

---

# 戦玉 SENG(Y)OKU

暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦玉 SENG(Y)OKU

### 【Nコード】

N5739A

### 【作者名】

暁

### 【あらすじ】

鬼が蔓延る世の中で、強い意志を持った武将達の魂が作り出す物‘武者魂玉’。ある日主人公の‘経’はある組織に追われている事に気付く、その組織と経の運命が交わる時、経の日常は崩れ去る

## プロローグ

人間は死なない。

強い意志を持ち、歴史を変えたものは、魂、だけが残る。

この話はそんな、魂、むしやこんぎよく、武者魂玉、に取り付かれた者達の天下太平の、第二次戦国時代の話。

願わずに第二次戦国時代に呑み込まれた、一人の少年の物語。

誰も本当の戦国時代を知らない、

誰も取り付かれた者の末路を知らない、

知りうる時は恨む時

## 第一陣

少年は掛け布団を投げ出して、腹を出して見事な大の字で寝ていた。少女は少年を起こすべく力いっぱいオープンな腹に重たい鉄拳を入れた。

少年は朝の目覚めを理解する間もなく痛みとの戦いを繰り広げる。少女はカーテンを開けて、朝の日射しを暗かった部屋に入れた。そして少年の第一声は。

「朝か!？」

少年は時間帯をやつと理解した、しかし理解の至らないところが一つ。

「巴嘩が何でいるんだよ!？」

「経ちゃんが遅いから」

経とは、石織経いしのほろけい、サラサラの目にかかるくらいの髪の毛、ツリ目気味のパツチリ二重が年相応に見られない。

巴嘩とは、袋小路巴嘩ふくろじこどもか、美しい真つ黒な髪の毛を緩く後ろで束ねている、垂れ目と通った鼻に柔らかく整った唇、俗に言う美少女だ。巴嘩の服装は、灰色のブレザーに赤いネクタイと茶色のチェックのスカート、高校生だ。

「早く起きない、これ以上遅刻すると単位どころか進学すら出来ないわよ」

「それより、幼馴染みでも家宅侵入罪ってのは適用されるぞ、この

場で国家権力の助けを借りることも出来るんだけど」

「その前に経ちゃんの命があればね。ほら、死にたく無ければ起きる！」

巴嘩は軽々と片手で経を持ち上げて立たせる、経は比較的小柄なのもあるが、同年代の少女に真似出来る技ではない。

いつまでたっても部屋を出ようとしない巴嘩を見て経が一言。

「着替えたいから出ていってくれない？」

「別に良いでしょ、幼馴染みなんだから。それとも見られちゃマズイものもあるの？」

巴嘩にとって経は異性では無いらしい、経もそこまで気にしてないのだが、‘一応’女の子ということで気を遣ったらしい。

同じような色彩の制服を着て、学校という修羅場（経にとっては）へ向かう途中だった、どこからともなく人の声が

『経どの、雑魚ながら近くに異端の気が。申し訳ないが‘学校’には行けぬ』

「またあ？これのせいで俺がどれだけ苦労してるか分かるだろ？」

『しかし人間達に危害を加えられてからでは困る、ノミのようなものだ』

今、経と話しているのは、経の‘武者魂玉’の‘義経’だ。

源義経、異才とされた源氏の血を引くものだが、兄の差し金により命を落とした武将。

経は義経に取り付かれた適合者、本人は望んではないが適合者に選択権はない

「巴嘩が行つてよ、俺よりは留年つて言葉に縁が無いだろ、頼むよ」

「どうする巴？たまには経ちゃん助けちゃう？」

巴、木曾義仲の妻、力は屈強な男よりもある女武将、巴嘩の武者魂玉。

『義経さん』

『そうだね。経殿、巴嘩殿、今回は経殿一人では厄介かもしれないぞ』

「どういう事だよ、ノミなんだろ？ノミなら何百匹集まろうが一人で十分だろ？」

ノミやら異端やら言われている存在は‘鬼’、古来戦などで雑兵などと呼ばれた存在は、9割が鬼と言われている、しかし鬼は人間を喰らう存在でもあるために半面忌み嫌われてた

『その中に適合者がいるの、多分鬼を束ねてる存在だと思うわ』

「でも巴、一人だけなら変わらないんじゃないの？だって経には…」

『一人じゃないんだよ、少なくとも二人以上はいる、異端の気に紛れて分らないが、経殿一人ではキツイ』

経と巴嘩は驚きを隠せない雰囲気だ、適合者が鬼を連れてる事は北朝鮮と日本が合併するくらいの事だ、それが現に起こってるから厄介だ。

「しょうがないわね、行くわよ」

『かたじけない』

「じゃあ行くか！」

適合者には人間のそれを遥かに超越した身体能力が与えられる、普通の人間の体では武者魂玉の力に押し潰される事があるからだ。経と巴嘩は脚力を最大限に上昇させ地面を蹴った、2Kmを10秒足らずで移動した。

そこには、長くてストレートの髪で、冷淡な目をした細身の男と、重力に逆らった髪とゴツゴツした顔、獣のような目でゴツイ男の二人と、ザツと見て100匹ほどの異端がいた。

経にとって異端は敵では無かった、問題は二人の男にあった、20mほど離れていてもジリジリと伝わってくる、気、

「巴！枯葉魅刃！」  
こっばみじん

巴嘩は武者魂玉の名を叫ぶと、眩い光と共に手元に歪な形をした長なが刀が現れた、名は枯葉魅刃。  
なな

武者魂玉には、3種類ある、装備型と馮位合体型と属性馮位型。

装備型は文字通り、武器となる玉だ。

馮位合体型は、適合者の身体能力を高めたり、一部を変形させる玉。

属性馮位型は、どの玉にでもある属性を極限まで高めた玉だ。  
巴の属性は‘木’、‘水’には強いが‘火’には弱い。

「寄生木！」  
やどりぎ

嘩が長刀を地面に突き刺すと、地面から生えたツルが異端に絡まりミイラとかす、男二人は瞬時に回避した。

「装備型なのに大層な属性攻撃ですね」

「歳！甘く見てると死ぬぞ！」

そついうと、細身の男は手を天に突き上げ、ゴツイ男は四ん馬になった。

「歳三さん、麗雲水刃」  
れいうんすいじん

「勇！状態白虎！」

細身の男は装備型、水流によって形成された刀。ゴツイ男は牙が生え、手足の爪は鋭くとがってる、馮位合体型だ。

「義経、あの四聖獣の白虎だよな？あんなのに俺達二人で勝てるのか？」

『案ずるな、経殿には我々がついてる、それに経殿は王になる人だ、死ねない』

経の目付きが変わり、右手を下に、左を逆手で上げた、経は精神を集中し叫んだ



「義経！疾風双刃！」  
しつぷうそうちば

経の手には二刀一对の刀が握られていた、細身の刀だが威圧感はある、通常より短い刀を右手は通常通りに、左手は逆さにして握られている。

「美しい刀身ですね、ですが私は巴さんの方へ」

「じゃあ俺は義経！」

ゴツイ男は経の元へ、細身の男は巴曄の元へ向かった、しかし巴曄には一つ理解出来ない事があった、それは属性関係だ

「貴方何で先に私を選んだの？属性を考えたら不利じゃない？」

「美しい者と強い者に目が無いんですよ、だから、属性何て関係ありません、私をガツカリさせないで下さいよ」

「最期に一つ、貴方の魂玉は、土方歳三、よね？」

「そうです、貴方は巴……！？」

巴曄は、相手が名前を言い終わる前に突進した、細身の男は受け太刀をしたが力で押し負け、10mほど飛んだ

「貴方の話は聞く気は、ミジンコほども無いわ」

「そうですね、不意打ちとは言え中々でしたよ、流石馬鹿力で有名な巴さんだ。でも敵の名前を知らずに殺すのはつまらないでしょ？」

私は美濃歳那です」

「袋小路巴嘩！行くわよ！」

10mは間合いの内に入らない、一瞬で巴嘩は上段から斬りかかる、しかし歳那もそれを許さない、後ろに避け斬り返そうとした時だった

「木槍！」

地面から鋭い木の根が出てきて歳那に襲いかかる、歳那の姿が見えなくなるほどの量の根が圧倒的力を感じさせたに思えた、しかし次の瞬間巴嘩の淡い期待は目の前の光景の如く碎け散る事になった

「何だかム力つきますね、僕が圧されてる？フツ！笑わせないで下さい、力を抜いていたからですよ！」

「貴方まだ生きてたの！？」

その瞬間、歳那を突き刺したハズの根が氷始めた、辺り一帯が冷気に覆われるほどの強い力で、次の瞬間根が碎け散った、しかも歳那は傷どころか服の乱れや汚れすら見当たらない

「う、嘘でしょ？こんな化け物に勝てる訳がない、属性を無視して凍らせるなんて」

「ああ、美しい顔が恐怖と絶望の海に吞まれるその顔、そそりますね、決めました、凍らせて私のコレクションにします、……」

歳那が目の前から消えた、亜音速までついていけるハズの巴嘩があつさりと見失った、気付いた時には遅かった、歳那は音速以上の速

さで巴嘩の前にいた

「一生、この美しい顔が私の物になる。ああ、考えただけでめまいがする、巴嘩さんもそうは思いませんか？」

巴嘩は声を出せなかった、‘恐怖’と‘死’からの絶望感から

## 第一陣（後書き）

土方歳三

新選組副長、鬼の副長と呼ばれ、隊をまとめるタメに局中法度なるものを作成、違反者には切腹という重い罰を与えた。戊申戦争で、新政府軍の一発の銃弾により倒れた

## 第二陣

一瞬にして経の前まで移動してきたゴツイ男もとい四聖獣の異名をもつ「白虎」、経の目には確り捉えられていた、相手のスピードも先ほどまでいた場所が陥没してる事も、その時察した、一撃でも喰らおうものなら致命傷となるだろう。

「スゲー脚力。でも……遅い」

「随分な自信だな、その自信が何時まで続く事やら。俺の武者魂玉は「近藤勇」、お前は源義経と見た」

「正解。逃がせて言っても逃してもらえなそうだし、殺るんですよ？」

「分かってるじゃねえか！！」

白虎は大きく跳び上がった、地面はヒビ割れ脚力の強さを物語る、白虎は爪を出し経に切りかかって来た、経は軽々と避け背中をとった。

「遅いつて言っただろ」

足が震えてるのを抑えながら相手を挑発する、そして右手で斬り掛ろうとするが地面が隆起してそれを阻む、経は亜音速の速さで20mほど離れた、その時に完全に理解したからだ、万が一にも勝てない事に。

「（最悪だ、ただでさえ強いのに属性が「石」かよ、勝てる気がし

ねえ」

「気付いたか、そう俺の属性は『石』、そしてお前は『風』、勝てると思うか？ いや勝てねえ、……残念だったな」

「やああああ！！波！」

経は右手を上段から振り下ろし左手を下段から振り上げた、その瞬間、切っ先から風の刃が発せられ白虎に襲い掛る、しかし前と同じように地面が隆起してそれを防ぐ。

「無理だよ……！」

白虎が上を見ると頭を下にして跳んでる経がいた、経は刀を地面に平行にして高速回転をした、その瞬間竜巻が起きた。

「鎌<sup>かま</sup>異<sup>いたち</sup>太刀！」

白虎の動きを封じることが出来るが切り裂く事は出来ない、それが属性の影響だ、経は巴嘩の方を見ると根が砕けて巴嘩が脅えてるのが理解出来た、経は白虎を蹴り体制を崩した。

「突<sup>はつ</sup>風<sup>ふう</sup>豪<sup>ごう</sup>波<sup>は</sup>！」

「ぬ！うわああ！」

白虎を30mほど飛ばして体勢を崩した、目的は攻撃じゃない、時間稼ぎだ。

巴嘩は頭の方から足の指先に至るまで‘死’を覚悟していた、この状況から自分が生き残る方法はない、歳那は巴嘩の顎を持ち上げ顔を近付けて舐め回すように見た、巴嘩は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなっていた

「美しい、何と美しいのだろう、その恐怖と絶望に歪んだその顔、生気を無くした虚ろな瞳、全てを私の……」

「波！」

歳那目がけて風の刃が飛んで来た、歳那は避けて目をやると経がいた、経は一瞬で巴嘩の前に行き歳那の前に立ち憚る。

「巴嘩、大丈夫か？」

「……経、ありがとう」

いつの間にか白虎は歳那の所にいた、経はまともに殺り合って勝てる相手じゃないのも理解していたし、巴嘩が立っているだけでやっということにも気づいていた

「自ら死に行くか、一人で逃げていれば生き延びれただろ」

「相手を助けるのには2種類あるんだよ、一つはまとめて相手に出来る力を持つてる場合、もう一つは……、風砂<sup>ふうしゃ</sup>！」

強い竜巻が起き回り一面が砂塵に包まれ視界ゼロとなった、歳那は水をまき散らして砂塵をおさめた、そこには経と巴嘩の姿は無かった、二人は魂玉に戻し考えた

「勇治さん、逃げられましたね」

「そうだな、またあのお方に怒られるな」

「でも良いですよ。巴嘩さん、もっと強く、もっと美しくなつて下さい、もっと私をゾクゾクさせてください」

白虎こと勇治が大声を張り上げて笑っている、歳那は仕留められなかった事を悔いるのではなく次への期待を抱いている

「勇治さんも楽しそうですね？」

「分かるか！？油断してたとはいえ、風に圧されていた、あんな強い奴が‘我等’以外にいるとは、楽しみだ！」

「あのお方の読みは正しかったようですね」

二人は意気揚々と帰って行った、戦った後は戦争を物語るほどに地形を変えて、残ったのは異端のミイラだけ。

経と巴嘩は経の家にいた、巴嘩は気絶して経のベッドで寝てる、その横で悔しさを隠しきれない経がいた、ベッドに寄りかかって天井だけを見つめている



『経殿、落ち込むな、今回は相手が悪すぎた、誰も怪我をしてないだけで良しとしよう』

「俺って弱いな、強くなりてえ、もっともっと」

『経殿は強い、だが相手が怪物だったんだ、それに相手が石で無ければ勝てた』

「でも……」

「経ちゃんは強かったよ」

巴嘩が起きてたらしい、経の肩に手を当てて微笑んでいた、経は相変わらず天井を見つめたままだった

「経ちゃんがいなかったら私死んでたよ、全部経ちゃんのお陰だよ、だから落ち込まないで」

「でも、俺が強ければ巴嘩を危険な目にあわせずに済んだ」

『経殿、強くなるには悔いてるだけではダメだ、次を見えることも強くなるには必要だ、殴られたら蹴れば良い、蹴られたら斬れば良い、斬られたら殺せ』

声だけだと経は義経の凄みが分かった、そして義経の言ってる意味を理解した。

「（俺は生きてる、生きてる限りアイツらを殺すチャンスはある、次は勝つ）」

経の折れかけた心は義経によって繋ぎ止められた、巴嘩は経の背中を見つめながら自分の無力さを感じていた、しかし巴嘩の心も折れてはいなかった。

「義経、何で適合者と異端が一緒にいたんだ？しかも適合者が異端を操ってるようにも思えた、何か適合者を呼び出すように。戦争でもおっぱじめるつもりか？」

『経殿の推理は間違っていないだろう、異端がどれだけ束になってもある程度の適合者には意味がない。それにあの二人、我らが着いた時不敵に笑っていた、恐らく目当ては経殿であろう。そして目的だ、ココからは憶測に過ぎないが、天下太平を試みている魂玉がいるだろう、夢を叶えられずに死に大きな影響力を持ったもの、もう分かったであろう』

経は信じたくなかった、今の世界を崩しかねない事だった、そして義経が上げた条件が一致して、その人物なら納得出来る奴が一人いた、それは……

「織田信長」

『正解、憶測に過ぎないが信長が戦争を起こそうとしてる』

「でも何で俺なんだよ！？義経の推理だと俺は狙われてるんだろ！？」

『しかも組織単位でだ、それは経殿が王に一番近い存在だからだ』

経その「王」というものに嫌気がさしていた、経は「王」という存在自体を良く理解していなかった、それ故に義経が言うことを理解

していなかった。

「その‘王’ってやつなんだけどさ、何それ？」

『これで152回目だ。‘王’とは全ての武者魂玉を統治する存在、魂玉の天下太平を行う者だ。今日の者達が行おうとしているのは世の中を自らの手に収めようとしている、だから魂玉を統治されては困るんだ、反乱分子となりうる存在は排除するつもりなのである』

経はいつものように分かったようなふりをした、義経は半ば諦め気味だ、しかし経も馬鹿ではない、何か大きな事が起きようとしているのは本能で気づいていた。

「経ちゃん、私も頑張るから」

「否が応でも避けられないのか」

この時経が思ってるほど生温いものでは無かった、経が進む道が真紅に染まるとは義経ですら想像できなかった。

## 第二陣（後書き）

近藤勇

新選組局長にして、天然理心流四代目宗主。人の信頼を集める存在で人柄も温厚、しかしそれ故に隊をまとめるのに至らないところがあった。新政府軍に捕まり死刑となる。

### 第三陣

巴嘩と経は強くなるにはどうするかという悩みを解決するために修行なるものを行なっている、学校が終り誰もいない廃屋が修行場となっている、体育館ほどの広さがある空間に木刀と木製の長刀の音と適合者にしか聞こえない声が響く。

『経殿、踏み込みが甘くなってる、スピードにのらなければ力が入らぬぞ』

『巴嘩ちゃん、腰に力が入ってない、練習とはいえ相手を殺す気でないという意味がないわよ』

経が横から右手で打ち込もうとするがいと簡単に止められてしまった、しかし左手で打ち込もうとした時だった、強引に巴嘩が長刀を振り抜いて経を飛ばす、体勢を崩した経に間髪入れずに乱れ打ちする、しかしいくら体勢が崩れてるとはいえ連撃で経に勝てない事は巴嘩も分かってる、一発一発が力を持っているので経も防戦一方だ、経が再びよろけたのを巴嘩は見逃さなかった、力一発上段から叩きこんだ、しかし経は地面に突き刺さった長刀の上に乗って木刀で頭に触れた。

「俺の勝ち。１２勝９敗だな」

「ちえ、経ちゃん速すぎ、体勢崩すだけで精一杯だよ」

「巴嘩の馬鹿力にもビックリだよ、９敗の内７回は木刀が折れたせいだから、それ以外でも１５本も折ってるだろ」

『それで良いんだよ、経殿のスピードに巴嘩殿がついていければ弱点の克服になるし、巴嘩殿の力を抑えきれれば然り』

この修行はその意味もあつた、お互いが正反対なタイプなだけにお互いを触発して更に効果が出る。

経と巴嘩が一休みしてると一人の来訪者が現れた、逆光で姿は分からないが身長は190前後、扉に寄りかかってタバコに火を付けた後に近寄つて来た、扉が閉まって屋内にある光のみになった時に顔が初めて理解出来た、長い髪の毛は毛先がはねていて前髪は頭頂部で留めていて真っ黒、きれた細い目に大きな口、二人はこの人物に見覚えがあるらしい

「次郎さん！」

「楽しそうな事してるね、俺も交せてよ」

次郎こと阿刀田次郎<sup>あとうだしろう</sup>、二人の兄貴分で武者魂玉の先輩でもある。

取り付いた魂玉は佐々木小次郎、‘物干し竿’と呼ばれた長い刀を持ち、素早い二撃の‘燕返し’、という技で相手を圧倒した、有名な巖流島の決戦で戦死。

次郎も同じような戦いかたをする、スピードで相手を圧すタイプだ、故に経と次郎の二人が戦うと巴嘩ですら捉えきれないスピードとかが

「次郎さん、久しぶりに手合わせお願いします」

「良いよ。じゃあ小次……」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっとタイム！」

経は全身全霊をかけて次郎を止めた、さながら獲物を見つけたチーターのような速さで

「今回は魂玉抜きの木刀のみで、基礎のみの修行なもので」

「でも俺木刀嫌いなんだよ、短いから間合いが分かりづらいんよ」

『僕も同感です、あんな短いものでは如何せん気合いが入らないんですよね』

小次郎が間に割って入る、次郎の魂玉は装備型、それに刀の長さが2m近くになる大刀故に木刀では届かないということがしばしば

「お願いします！俺の修行のためにも」

「しょうがないな、今度は魂玉でやろうよ」

「はい！」

経と次郎は始まると同時にその場から消え10m近くある天井の付近に現れた、只の連撃が五月雨の如く降り注ぎ、巴嘩は木刀を捉える事だけでやっとだ、しかし二人は地上に降りると更に素早くなった

「凄いね」

『二人ともスピードなだけに一発はないけど防ぎきるのは至難の技ね、豪快な巴嘩ちゃんには防ぐだけで精一杯よね』

「しかも経ちゃん、スタイルを変えて攻撃してる、舞うように叩き込んだり、キツツキみたいに突いたり、経ちゃん凄い」

経は素早いだけではなく、いろいろなパターンやスタイルを考えていた、巴嘩相手の場合はどうやって相手に「連撃」をいれるかだった、しかしスピード同士となるとどうやって「一撃」をいれるかだ、力の場合相手の隙について連撃を加えないと一発だけではごり押しされたら簡単に反撃を喰らう、しかしスピードの場合は相手に一撃でも当たればスピードは衰える、故に流れるような連撃や意外性が必要となる

「速くなつたね、俺が木刀とはいえ一発も当てられないなんて」

『経殿、力み過ぎだ、もう少しリラックスしないと対処が遅れる、しなやかにそして機敏に』

義経と次郎のアドバイスで少しずつではあるがスピードが上がっている、それに巴嘩との修行のせいか強い一撃を喰らった時に体勢を崩さなくなっている、確実に修行の成果は出ている。

「経、強くなつたよ」

「余裕ありますね、でも、次郎さんの首とるのも近いっすね」

「そうかな？」

次郎は経の腹を蹴って体勢を崩して上段から素早く無駄の無い動きで一撃、更に間髪いれずに下段からの切上げ「燕返し」だ、経は木刀で防ぐ余裕が無くバックステップで後ろに避けた、その後素早く切り返し相手の懐に飛込む、右手の木刀は次郎の喉元にあった。



「へえ、やるじゃん」

しかし経はその場に木刀を落とし座りこんだ、経の顔に安堵の色は無い。

「負けました！完敗です、やっぱり次郎さんは凄いや」

「えっ！？何で？経ちゃん勝ったじゃない、次郎さんの木刀は切上げたままだったし、切っ先も触れて無かったよ」

巴嘩は目先の事だけにとらわれ過ぎていた、経はこの修行の形式も次郎の魂玉の特性も全て知った上での敗北宣言だった、経は実際の戦いだっただら何回も死んでいる事も把握していた、最も魂玉には属性攻撃というものがある故に今と違った戦いになるのは明らかだが

「ねえ、巴、何で経ちゃんは負けたの？むしろ圧してるように私には見えただけど？」

『巴嘩ちゃん、これは木刀同士の試合、これが魂玉同士の戦いで全く同じようにやってたら経は死んでたわ』

「だから何で？」

『次郎の刀を見たことあるでしょ、経がギリギリで避けたのは、実際だったら経は二人になってたわよ、特に最後の燕返しは完璧に死んでたわね』

「そっか、今私達がやってるのは基礎の修行だもんね、実際はまた違った内容になってくるんだ」

『でも基礎がなければどれだけ優れた魂玉でも、ただのおもちやよ、適合者の力があって初めて意味を成すもののな』

巴嘩は腕を組んで頭を大きく縦に振って納得した、経は力を使い過ぎたのかその場でヘタってしまった、すっかり体力の回復した巴嘩は長刀を持って次郎の前に行った。

「次郎さん、私も手合わせしてもらって良いですか？」

「おう、良いよ」

巴嘩はお辞儀をした後構えるでもなく経の側に行き、そして経の首を掴んで小動物のように軽々と持ち上げた

「経ちゃん邪魔、それと、ちゃんと受け身とってね」

「えっ？はあ！？おい！！」

経は気づいた時にはハンドボールのように飛んでいた、経はなんとか受け身をとって巴嘩の方を見ると巴嘩は笑って手を振っている。

「じゃあ行きましょう、とその前に、木刀変えた方が良いですよ、危ないですし」

「大丈夫だよ、ささくれも出来てないし、悪い所も見当たらないし」

「どうなっても知りませんよ！」

そういつて巴嘩は飛込むととつさに次郎は受け太刀をした、しかしとも簡単に木刀が楊枝のように折れてしまった、次郎は身をのけぞらせて何とか避けた、その後瞬間的に新しい木刀を取ってもう一本腰にさした

「だから言つたじゃないですか、一試合ごとに代えないと危ないですよ」

「経、いつもこんなのと相手してるのか？」

「そうつすよ」

「強くなるわな」

そういつて今度は次郎の方から飛び込んで言つた、胴に叩き込むはずだったが長刀がそれを許さなかった、それどころかそのまま強引に弾き飛ばされた、そして次郎が着地する前に追いつき上段から振り下ろす、次郎は半身で受け太刀をして回転を利用して踏みつけて長刀を地面に刺す、長刀の上に乗ったところで腹を掌で押され飛んで行った

「同じ手は二度と喰らいません」

「じゃあこれは新しいパターンか」

気付くと巴嘩の喉元に木刀が当てられていた、しかし次郎の腹にも長刀の先がついていた

「これも前にありました」

「相打ちか、やるね巴嘩ちゃん、前とは段違いに強くなってるよ」

「ありがとうございます！」

巴嘩はスキップをしながら経のもとに行った、理由は相打ちの自慢をするために、巴嘩の場合は完全な相打ちだったから今回は巴嘩に軍配が上がった、その二人の様子を次郎は親のような目で見ていた、知らぬ間に強くなってた二人に喜びを感じていた。

「小次郎、二人とも強くなったね」

『そうですね、その内本格的に負けるんじゃないんですか？』

「大丈夫だよ、今回は木刀だし、属性攻撃があればまた違った感じになるだろ」

『楽しみですね、経さんは特に王になる存在ですから、いろいろな意味で人とは違いますからね』

「アイツの魂玉の事か？」

『はい、彼は特殊です、彼みたいな例は聞いた事がありません、可能性を秘めた存在ですね』

次郎は笑ってタバコに火を付けて、夕焼けの街に帰って行った、その後日が暮れるまで二人の修行は続いた、次郎が帰った事を忘れるくらいに。

## 第四陣

経宅で食卓を囲む適合者が三人、一人はこの家に住んでいるから当然経だ、もう一人は半分居候状態になっている巴嘩だ、半分居候状態とは一週間の内学校のある五日間は経の家で寝泊まりしている、親が家にいることが皆無に等しい経にとっては有り難いのだが幼馴染みとはいえ巴嘩は女の子だ、女の子と二人暮らし状態故に経は若干の違和感を感じている、巴嘩本人は全くもって気にしていないようだ。

そして最後の一人は次郎だ、次郎がココにいる理由は経と巴嘩が修行の後に帰ると家の前に小次郎が座っていた、そして腹が減ったという自己中心的かつ個人的な理由で家に上がって来た、経達は賑やかになるという理由で招き入れた。

「にしても経の家デカイよな、親はいないの？」

「親は世界中を旅行してて家には一年に一週間くらいしかいないんですよ、あつ、同情とかしないでくださいよ、親というのが俺の中ではそういう存在なので寂しいかと思った事も無いし今更親の愛が欲しいとも思いませんから」

「いや、同情なんてしなよ」

経の涙無しでは聞けないような経歴を口にしようが焼きを含みながらあっさりとしるす次郎に微妙に経は同情をあおった、しかし人間の「慣れ」というのは恐ろしいものだ、親がいなくなるのは寂しいが親がいらないのは愛を知らないから寂しいという感情が湧かないらしい、一応経に親はいるけど。

「で、何で家がこんなにデカイの？親は世界旅行に家はデカイ、金の出処は？」

経の家は坪で加算すると200坪ほど、庭が無いので敷地いっぱい  
に2階建て屋上付きコンクリート打ちっぱなしの家が建っている、  
半地下の車庫には高級外車が4台ほどあるがそのどれもが使われて  
いない、俗に言う豪邸だ、ちなみに長嶋さん仕様の屈強なセキユ  
リティ付きは言うまでもないだろう。

「聞いた事ないですよ、親がいないから聞く機会もないですし  
帰って来ても一泊もしないでまた旅行行っちゃうですよ、お金  
には困って無いんですけど不満を強いてあげるなら家を小さくして  
ほしいですね」

巴嘩と次郎は半分呆れていた、贅沢なお坊っちゃん、しかしお坊っ  
ちゃんってほど生温い生活を送っていないのは確かである、むしろ  
そこらへんの格闘家より危険な世界にいたので二人もそれでいじろ  
うとはしない。

食事も終わって経と巴嘩はテレビをみて次郎はタバコを吸いながら  
雑誌を読んでいる、恐らく次郎もココに居候するつもりなんだろう、  
しかしそんな穏やかな生活にはそぐわない適合者特有の‘生体反応’  
を三人は感じた、生体反応とは生物なら全てが持っているものだ、  
人間なら人間、犬なら犬の生体反応があり適合者の生体反応のは人  
間のそれとは異なるものだ。

「小次郎、この反応は」

『そのようですね、この妖気にも似た生体反応はアイツしかいませ

んね』

次郎の顔が見たことがないくらいに険しくなり経と巴嘯が寒氣を覚えるくらいの殺氣を放ち玄関をでた、経と巴嘯は後を追って外に出た、二人の目には亜音速で移動する次郎が写り後を同じ速度で後を追う、常人の目にはどれだけ頑張ってもとらえられないだろう。

ほんの数秒で広い空き地に着いた、誰もいない恐らく工事中であるうと思える場所、そこには一人のボサボサ頭で人の目とは思えないような生気の無い目をした男と次郎が立っている。

「お前ら、手を出すなよ」

経達は自分達に向けられた殺氣ではないと分かっているても恐怖を感じずにはいられない、しかしその殺氣を全て受けている本人は顔色一つ変えずに立っている。

「武志、待つてたぞこの時を、あの時からどれだけ待ち望んだか、お前を殺すタメだけに俺は強くなった、まあ死ねばの話だがな」

不適な笑を浮かべているが感情が無い、経と巴嘯は適合者だから感じる事が出来る、この適合者特有の生体反応なのだが人間の生体反応には思えない、本来ならば複合して感じられるハズの‘人間’の生体反応がない、むしろ異端に似た小次郎が言った通りこれは‘妖氣’そのものだ。

「義経、何だよこの反応は？」

『分からない、こんな反応を感じたのは初めてだ、俺らの思い違い

なら良いのだが』

次郎の‘魂脈’の流れが速まった、魂脈とは気の流れなどと言われ魂とはこの事を指す、魂脈の回転を速める事により魂玉との同調率を上昇させて魂玉を実体化させたり馮位させたりする、属性攻撃の場合はこの魂脈を逆回転させることによりその場に岩や木を構築出来ると言われている、次郎の魂脈が速まったということは魂玉を發動するという事。

「小次郎！神清氷刃！<sup>しんしんひょうじん</sup>」

次郎の背中には鞘に入った反りが大きい刀が現れた、190近くある小次郎の身長とほとんど変わらない長刀だ、ボサボサの男もとい武志は両手を広げて魂脈の流れを速めた。

「武蔵、両陽若火<sup>りょうようじやつか</sup>」

武志の右手には刀身のやたらに広い恐らく20センチくらいあるのかという普通の刀、左手には同じくらいの比率の脇差しが握られていた。

宮本武蔵、史上最強の剣豪と呼ばれ戦いを愛した侍、二天一流、俗にいう二刀流の開祖としても有名である、巖流島の決戦で心理戦により勝利した。

経達には一つの疑問があった、刀を鞘から抜けるのかということだ、しかし二人の疑問はすぐに無くなった、次郎が刀に手をかけると鞘が砕け散った。

「氷塊雨！<sup>ひょうかいう</sup>」

武志の上から大量の100Kg近い氷の塊が降ってきた、しかし武



志の周りから炎を巻きあげ氷を溶かした、溶けた氷の水で炎を消す、蒸気に包まれその蒸気が晴れて武志の目に写ったのは次郎の刀だった、武志は防ぐの精一杯なのもあるが次郎の一振りの距離は武志が踏み込まなければ届かない距離でもある、この距離の差は大きかった、次郎の五月雨のような斬撃を防ぐだけしか出来ない、武志は後退りをしながら防御をしていたタメに小石につまずき体制を崩した、その瞬間武志の左手腕が地面に落ちた、武志の肩口から先がなくなっていた。

「ハ、ハハ、ハハハハハ！甘い、甘すぎる、此くらいで俺が殺せるとでも思ったか？片腕落としたからなんだ」

苦悶の色も浮かべずに無表情で笑う、そしてなにもない肩口を見て鼻で笑う、そしてなにもない肩から腕が生えてきた、ほんの3秒たらずで斬られる前の状態に戻った、まるで袖から腕を出すように腕が生えてきた。

「おい！義経、今見たよな？腕が生えてきたよな？ってかアイツ人間だよな？絶対におかしいよな？」

『経殿、落ち着けとは言わない、黙れ』

経は無言でのパニック状態に陥る、しかし経が騒ぐのも無理はない、適合者の回復能力が常人に比べて高いのは確かだが‘生える’という表現が使えるほどのものではない、傷口が塞がるのが早いだけではあつて落とされた腕を生やすの不可能な事だ、生物学的の概念を大きく無視することは出来ない、だから武志の腕が生えてきたのは理解に苦しむようだ。

『恐らく武志とやらは武蔵に支配されてると見た』

「し・は・い？」

経はパンク寸前の思考回路をフル回転させパンクした、今の経ではついていけないレベルだったらしい、普通の状態でも恐らくパンクしただろう。

「おかしくない義経？普通、魂玉が適合者に‘取り付く’って表現をするわよね？でも義経は今‘支配’って表現を使った、おかしくない？」

『巴嘩殿が正しい、しかし武志は‘支配’されている。通常適合者に魂玉は取り付く、しかし適合者の力があまりにも弱い場合、もしくは魂玉の力が強すぎる場合、適合者の精神が崩壊して魂玉に支配される事があるらしい』

魂玉による適合者の支配、経には理解出来ていないらしいが巴嘩にはその重大さも適合者の末路も想像出来ていた、しかしまだ納得いかない事があった。

「でも腕が生えてくるのは何で？体は人間のものなんだから良くて適合者と同じ能力でしょ？」

『それは既にあの体が生物という概念を無くしているからだろう、武志の体は属性攻撃の物理攻撃に近いものだと思う、巴嘩殿が木を出せるのと同様なものになっているんだよ‘あれ’は、故にあれは死なない、一種の不老不死に近い存在だ』

経はついていく事すらやめた、経の今の頭で考えたら廃人になるだろう、巴嘩は武志について最終段階に達した、そしてその答えにた

どり着いた時、人は絶望というものをかんじる。

「それって、アイツに私達は勝てないって事？」

『いや方法はある。分子単位まで粉々にするか魂玉自体を破壊する、前者の術は見当たらないが後者なら不可能ではない』

「やっと俺にも理解出来た、アイツのあの魂玉をぶっ壊せば良いんだろ、そんなら俺の出番だな……、でも今彼処に行ったら殺されそう」

経が身震いをして次郎と武志の方を見ると圧倒的に次郎が圧してる、間合いをつめさせない攻撃で相手に攻撃するチャンスを与えない、次郎は一瞬の隙について上段から振り下ろした、しかし武志は身を反って斬撃を回避して状態を戻す反動で前宙、次郎の刀を地面に突き刺しその上に立つと同時に遠心力で上段から斬り掛る、当たる寸前で水弾で武志の体がボールのように吹き飛ぶ。

「義経、今技名を言わないで属性攻撃したよな、あんなこと出来るのか？」

『属性馮位型なら不可能ではないが、装備型で技名破棄を見たのは初めてだ、次郎殿は相当修行を積んだようだな。しかし見た限りだと武志の方も技名破棄をしてるようだな』

属性攻撃とは魂脈を逆回転させるだけでは如何せん放てるものではない、イメージと言霊が必要となる、その言霊を破棄してるのだからかなりの集中力をようする、それを戦闘の最中、しかもあれだけの状況でやる次郎の能力は桁違いだ。

次郎は吹き飛んだ武志を追って行った、武志は刀を地面に叩き付け

てその反動で体を浮かして体制を立て直す、武志が地に足を着くのと同時に次郎の間髪つかせぬ連撃がはいる、武志はまたもや防戦一方となる、しかし武志の足が徐々に凍っていき動かなくなった、止まったと同時に武志の首を斬り落としバックステップで間合いをとる、武志の首が生えてくるのを全員が確認し絶望が増す。

「俺がお前ごときに本気を出さなきゃいけないなんて、俺も落ちぶれたな」

「大丈夫だ、お前は落ちぶれてない、むしろ強くなっている、しかし俺の方が強くなっている、ただそれだけの話だ」

「なんか俺が既に本気を出したような口ぶりだね、そうだと思ってたなら残念だよ、これから本気だよ」

そういうと次郎は刀を背中に当てて鞘に戻した、そして次郎の魂脈の流れが前にも増して速まり刀が凍りついた、辺り一面は冷気に覆われてきた、次郎の足元はすでに凍っている。

「死ぬ前に目に焼き付けとけ。小次郎！魂玉段階式！」

## 第五陣

「小次郎！魂玉段階式式！」

小次郎の背中にある刀の氷が大きく膨らみ砕け散って出てきたのは違う刀だった、反りの大きい刀が左右についていて切っ先は一つになっっている、さながら猫の瞳のような形をしている、長さは先ほどと大差はない。

「じんがとうじん  
神牙凍刃」

魂脈の増幅率に経達は恐れをなすほどだった、魂脈の量が上がれば上がるほど力があると言っても過言ではない、次郎のそれは経と巴嘩が今までに体験したそれとは大きく違った、魂玉段階式式というのは魂脈の流れを無理矢理増幅させ更に強力な魂玉を実体化させるもの、魂玉との同調率と魂脈の流れを無理矢理速くする精神力が必要となる。

「義経、あんなことホントに出来るのか？俺も出来るようになるのか？」

『それは経殿しだいだ、同調率は十二分だがまだ魂脈の使い方が荒い、今一番近いのは巴嘩殿だろう』

経は若干落ち込んでいる、巴嘩が慰めて意識を二人の戦いに戻す、次郎が刀身に触れると猫の瞳の空間に液体が膜をはった、それは切っ先から流れ落ち地面を凍らしてしる、次郎が横に一振りすると液体が刃となって武志を斬りつける、そして傷口があっという間に凍っていく。

「この液体は‘窒素’だ、当たれば確実に凍る、死なないのは分かるが動き難くはなるだろ」

これが弑式の力、只の適合者なら即死レベルの攻撃をいとも簡単に放つ次郎の力、経と巴嘩には鬼にも神にも感じられた、次郎は刀を片手で持ち振り回す、全てが液体窒素の刃となって斬りつける、武志の体の周りには炎が渦巻いているがいとも簡単に消してしまう、そして体が凍っては再生、凍っては再生を繰り返している、力の差は歴然だが勝てない、それが今の戦いだ。

「次郎さん、コイツは分子単位にまでしないと死にません！再生能力は尽きません」

次郎は舌打ちをする、経の介入ではなく武志の不死身に嫌気がさしたのである、肉体的には疲れていないが精神的に疲れがきていた、普通の人間なら今頃は跡形もなく斬り刻まれているだろうが武志は再生を繰り返してそれをしのいだ。

「次郎さん！コイツを魂脈ごと凍らせませんか？そうしたら俺が壊しますから」

「チツ、しょうがない、出来るから準備しとけよ」

次郎は斬撃をやめて武志の懷に飛込んだ、移動速度も格段に上がっていて経ですら走るのやっとのスピードだから武志には見えていないだろう、亜光速で完全停止をして振り下ろす時は下の刃で、振り上げる時は上の刃で右腕・右足・左足・左腕の順番に斬り落とす、そして背中から倒れて両腕両足が再生したところで技名破棄で氷の杭を頭・両手・両肘・腹・両膝・両足に打ち付け動きを封じる、そ

して距離をとり武志が氷の杭を溶かすより先に技を放つ。

「氷人形・永久凍人！」  
ひょうにんぎょう・えいきゅうどうじん

武志が真つ青に凍りついて動かなくなった、恐らく体から脳、魂脈にいたるまでを凍らしたのだろっ、しかしまだ動かないだけで生きている、相手の動きを封じるだけの力しかない、ここからは経に魂玉を壊す作戦があるらしい、魂玉はどれだけ重い物で打ち付けようがどれだけ熱い物でも壊す事が出来ない完全物質だ。

「経どするつもりだよ、まさか魂玉を壊すつもりなのか？」

「そのまさかですよ、魂玉で魂玉を壊すんですよ」

「義経みたいなスピード系の装備型で出来るわけないだろ」

「なにも俺の魂玉は義経だけじゃありませんよ、なあ、弁慶、」

『久しぶりですな若！やっとな拙者の出番が来たんですか？御曹司ばかり楽しい思いをして退屈だったんですよ』

若とは経の事、御曹司とは義経の事だ、普通適合者一人につき魂玉は一つしか取り付かないはずだ、しかし経は異質で義経の元を死んでも離れなかった弁慶は義経が取り付いた経に取り付いた、二つの魂玉を受け入れられる事も経が王候補の所以でもある。

武蔵坊弁慶、五条大橋で平家の刀を奪っていた時に牛若丸（のちの義経）に負け付き従う事に、義経を自害させるために頼朝軍の弓を受けなお立っていたという逸話がある、これを有名な弁慶の立ち往生という。

「魂玉変えるだけで壊せるのか？」

「まあ見てて下さい。弁慶！金剛碎玉！」  
こんこうさいぎよく

経の手には長刀が握られていて、長刀は短い柄に大きく歪な形の金ダイ剛石ヤモンドの刀身がついている、経は担ぐような状態で持っていたのを両手で持ち上げた。

「金剛魂玉一刀粉碎！」

金剛石が真つ赤に染まり上段から振り下ろして武志の魂玉に当たったと同時に大きな光を放って粒子と化した、そして魂玉が無くなり暫くすると魂玉と同じように武志も粒子と化した、次郎はさほど驚いていないが経と巴嘩はショックを隠しきれないようだ、武志が死んだ事よりも武志が粒子と化した事がショックだったらしい。

「何で粒子になったんですか？武志の精神が崩壊してるだけなら只の肉塊になって終わりですよね？」

「お前ら知らないのか、適合者と魂玉は言わば一身団体だ、どちらかが無くなればもう一方も無くなる」

経は柄にもなくショックを受けていた、魂玉を壊すつもりだったから死ぬのは分かっていた、しかし実体が無くなるとは思っていなかったがタメに死ぬのには変わらないがショックも大きい。

経が落ち込んでいると経達から20mほど離れた所に亀裂が出来た、何も無い場所に2mほどの縦に割れてそこから人が現れた、襟の大きい大きめのジャージのファスナーを上まで上げて口は見えない、サングラスをつけて長い髪の毛、顔が確認出来ない変な男が出てきた、顔の見えない男は粒子と化した武志を見て亀裂に帰ろうとした。



「おい！誰だよお前、この前の歳那とか勇治と同じような奴なのか？」

「フッ」

鼻で笑って亀裂に入って行った、そして向き直して経達の方を向いて何とか聞き取れるような声で言った。

「お前ら、強いかな？」

「やってみるか？」

経は挑発をした、相手が挑発にのるほど馬鹿ではないと分かっているが、出てきたらもうけレベルだ。

「じゃくけんていりようぼ  
弱犬程良吠」

そういつて亀裂を閉じた、三人は理解できなかったらしい、発音だけ聞いて分かる人間はいないだろう、煮えきらないまま空き地を後にした。

経達が家に帰るとしんみりした空気になった、次郎は疲れているのもあるがいつもの明るさはない、あれだけの戦いをした後だから当たり前だろうが考え込んでるっていうのもあるだろう、経と巴嘩は武志と次郎の関係が気になっていた、しかし巴嘩は兎も角経にも遠慮というものがあつたらしい、何があるかは二人には分からないが穏やかな次郎があれだけの殺気を放つ原因が気になっていた。

「二人とも俺と武志の関係知りたい？」

次郎は全てお見通しだったらしい、経の反応を見ると的を射ていたらしい。

「え、んまあ、教えてくれるなら知りたいです」

「まだ俺に小次郎が取り付いてそんなにしない頃だったかな、異端相手にやつとだったところに彼女がいたんだ、二人で一緒にいた時に武志が現れたんだ、まだ生体反応の感知もままならなくて武志が適合者だって理解できなかった、それで気付いた時には彼女の首から上が無くなってた、俺は怖くて指一本動かす事ができなかったんだ、アイツはその場にいた奴ら全員を殺して回ってたけど俺だけは殺さなかった、理由は分からないけどその時復讐を誓って今日に至るわけ」

経と巴嘯は言葉を失った、次郎は淡々と話しているが自分の無力さと情けなさを悔いていた、経は慰めの言葉などをかけようとしたが何も思い浮かばない、経を見かねて次郎がこの空気を破った。

「過ぎた事だから気にしないで良いよ。それより今大事なのは亀裂から出てきた男だ、アイツが適合者なのは気付いただろ、恐らく武志の知り合いだろう、そして歳那と勇治とやらと同じようなものだと思う」

「ってことは、敵？」

「そうだな、今回ののは武志の独断で動いたんだろうが次は本格的にそいつらと戦う事になるだろう。それでだ、ココからが本題だ……」

次郎のさつきまでの険しさが消えて不適な笑に変わった、さながらビジネスか何かを持ちかけるような、話を一旦中断してポケットからタバコを取り出して口にくわえて火をつけた、煙を吐き前のめりになりタバコを経と巴嘩に向ける。

「お前らにも魂玉段階式までいってもらわないと話にならない、恐らくこれから戦う奴らは段違いの強さだ」

「俺らが…」

「式式に？」

困惑を隠しきれないようだ、当然だろう、経と巴嘩が感じた次郎の魂脈の流れは異常なものだった、そこまで自分達が達するののかという不安と新たな力への期待が入り混じっている、しかし次郎には何か秘策があるらしい。

「とりあえず明日、俺と手合わせしてもらっ、当然魂玉でな」

「はい！」

二人は気づいていなかった、これからの地獄の修行と魂玉段階式式の遠さを。

## 第六陣

次郎は修行を受けてる経と巴嘩、魂玉を使った全力の戦闘、寸止めという条件付きで、と言ってもあれだけの力を持った次郎相手に手加減をしていられるほど二人は強くない、それなりに粘るが最後にはやられてしまう、力の差があるのは分かっていたが、実際に戦って二人は絶望感に襲われていた。

「無理だ、次郎さん何かに勝てる訳がない、ってかこんな事やって何になるんですか？」

「そうですよ、私達の力を今更試したところで魂玉を使ったら勝てないですよ」

「勝つのが本意じゃないよ、お前らの力が見たかったんだ」

「力？」

ひたすら戦ってるだけだったから二人はただの実戦練習だと思っただけ、しかし次郎には何か他の狙いがあつて魂玉での修行を行なってる。

「二人の能力を見させてもらったよ。まず巴嘩ちゃん、高等属性攻撃ばかり使ってるから気づいてないと思うけど、もう下等属性攻撃くらいなら技名破棄出来るよ、俺に樹縛じゅばくやってみな」

巴嘩は魂脈の流れを逆回転させた、そして強くイメージすると次郎の足元から木の根が出てきて次郎の体に絡みつく。

「氷人形」

根が凍って次郎が腕を広げると簡単に砕けた、巴嘩はショックよりも喜んでいた、次郎がやっていた事が自分にも出来た事が嬉しかったらしい。

「ほらな、巴嘩ちゃんに必要なのは実戦経験だけ。問題は経だよ、経は実戦経験は十分だけど魂脈の流れの操作も集中力も足りない、だからこれから俺の属性攻撃を避けてもらっ」

「簡単じゃないですか、言っちゃ悪いですけど避けるだけなら次郎さんよりも上ですよ、俺は」

次郎は不適な笑を浮かべて経の半径10mの所に氷の矢が包囲した、経は甘くみていた、この詰めของ甘さがいつも失敗を生んでいる事を気付かずに。

「これを避けるだけなら誰でも出来る、でも精神を研ぎ澄まして空気の流れを感じるによって無理矢理魂脈の流れの操り方をマスターしてもらっ、だから目を瞑れ」

「はい？」

間抜けな声を出した、次郎が行った事が滅茶苦茶だったのか理解が出来ないらしい、しかし一步天国に近づく事は分かってたらしい。

「だから、普通に避けるのはだれでも出来るよ、それじゃ意味がないから目を瞑ってこの氷を避ける、ちなみにエンドレスだから」

「無理ですって！死にますよ、完璧ただのリンチじゃないですか！」

「黙って始める、スタート。ちなみに当たっても怪我程度だから気にするな」

「えっ！あれ？見えない」

経の目には不透明の液体で周りが見えなくなった、そして経の右肩にボクサーの重いストレートのような衝撃が走る。

「くっ！」

「避けないとホントに危ないよ、死にたくなきゃ本気だせ」

次郎のドスの効いた声で経は腹をくくった、今の衝撃と状況を考えたら‘死’というものを実感した、そして次郎は巴嘩に目をやった、巴嘩の場合は実戦あるのみ。

「木刀持ってきたからそれで仕合ね、ちなみに敗けは無いから、倒れても木刀が折れても続けるよ、このタイマーが鳴ったら終了ね、経もだから」

返事がない、恐らく集中をしてて聞こえていないのだろう、経は当たる瞬間に反応出来るものの避ける事は出来ない。

「すみません、これを言っちゃ悪いんですけど私一回次郎さんに勝ちましたよね、それならこれはそれほど意味を生さないんじゃないんですか？」

「甘いね、これは巴嘩ちゃんなぎなたの長刀、折れないように芯を入れてるから。それでこれが俺の」

次郎が取り出した木刀は2m近くあった、次郎の魂玉を模した木刀だ。

「前は経の木刀に合わせたから力が半分も出せなかったから、今回は本気でいくよ。じゃあ、どうぞお好きにかかってきて」

巴嘩は次郎に斬りかかるがあっさり止められた、巴嘩が力で押しきろうとしたが次郎は木刀をずらしたタメに巴嘩はそのまま転んだ、次郎は背中に一発いれた。

「がはっ！」

「最初だから手加減したけど、魂玉だったら確実に死んでたよ、力は時としてマイナスになることを覚えときな」

「うわあああ！」

うつ伏せで倒れてた巴嘩が次郎の足を薙払おうとするが次郎は避けようと跳び上がる、しかしスグに立ち上がった巴嘩が足を掴んで地面に叩き付ける、足を持ったまま投げ飛ばす、次郎が受け身をとった反動で起き上がると目の前には巴嘩がいた、巴嘩は片手で横から斬りつけると次郎は木刀を地面に突き立てて防御した、巴嘩はもう片方の手でボディーを殴ろうとするが相殺される、反動で二人に間合いが出来た。

「そうそう、その調子、俺を殺す気で来ないと取り返しをつかない大怪我するよ」

「お互い様。はああああ！」

巴嘩は地面に手を差し込んでコンクリートの床を素手で剥がす、それを次郎に投げつける、次郎はそれを木刀で叩き割ると砂煙で前が見えなくなった、砂煙の中から巴嘩が出てきて左手に持った長刀で横から斬りつける、次郎がそれをまた片手で持った木刀で防ぐが巴嘩が木刀と長刀が合わさってる部分に蹴りをいれる、圧されて体制を崩した次郎に地面についた片足だけで空中回し蹴りを顔に向かつて蹴るが手で止められた、そして体制を保てない巴嘩を木刀で払い飛ばす。

「なんて無茶苦茶な戦い方なんだよ、体術と混ぜるなんて、やっぱり馬鹿力の考える事は一味違うね」

「お誉めの言葉と受け取っておきます」

その後は次郎が終始圧していたが巴嘩の形にこだわらない無茶苦茶な戦い方にしばしば肝を冷やす場面もあった、経は連続25回まで避ける事が出来たが集中力が持続せずに氷をくらった、氷は自動属性攻撃で休むという事を知らない、経が倒れようが何をしようが止まる事はない、次郎がそれを命ずるまでは。

“ジリリリリ！！”

この場には不似合いなタイマーの音が廃屋に鳴り響いた、それと同時に経の周りの氷と目隠しの液体が消えた。

「二人ともお疲れ！今日はこれにて終了。巴嘩ちゃん、経と自分に樹癒<sup>じゆい</sup>使っ<sup>し</sup>って、当然技名破棄<sup>はき</sup>だね」



巴嘩は魂脈を逆回転させイメージすると経と巴嘩を大きな葉っぱが包み込む、‘木’にしか存在しない回復系の技だ、葉っぱの中が強く光り葉っぱが枯れていく、そして中からは先ほどまでの怪我が無くなった経と巴嘩がいた、見事なまでに回復している、傷から体力にいたるまでベストの状態だ。

「地獄の特訓だ、何回天国への階段に足をかけたことが」

「まだまだだよ、もう一段階、難易度が高い修行をやって終了だから」

「俺無理！これならプライドで選手全員とゲンコで勝負したほうが100倍ましだよ」

「経ちゃん、勝つためだからしょうがないよ、勝たなきゃ死んじやうんだよ」

経は渋々納得した、これはこの先の戦いに備えたものである事を改めて実感した。

経達は経の家に行って食事をしたあとリビングで思い思いの時間を過ごしていた、そして巴嘩が立ち上がり部屋を出ようとドアノブに手をかけた。

「巴嘩、どこいくの？」

「コンビニにデザート買いに」

「じゃあ巴嘩ちゃん、俺のタバコも買って来てくれない？ショート

ホーブね」

「私未成年ですから買えませんよ」

「大丈夫、俺もだから」

その場に沈黙が流れる、聞こえるのはバラエティ番組で馬鹿騒ぎする若手芸人の声だけ、経と巴嘩は次郎が大人だと思い込んでいた、いつもタバコを自然に吸っているし自分達より身長が高いという理由だ。

「すみません、次郎さんって何歳ですか？」

「16歳です！高校に直すと高一かな、でも今流行りの二ートね」

「えええええ！」

16歳という経と巴嘩も15歳の高一だ、つまり三人はタメということになる、そして経の驚きの次の感情は怒りだ。

「はっ！？じゃあ何か、俺らが敬語使ってるのを楽しんでたのか？  
じ・ろ・う！」

「いやそういう訳じゃないけど、言うに言えなくて……」

「気にしなくていいよ、私達も少なからず悪いんだから、でももう敬語は使わないから」

「良いよ、別に俺もそれで優越感に浸ってた訳じゃないから」

経の怒りは治まり次はタメであつた事を喜んでゐる、巴嘸はそんな経を見て喜怒哀楽の起伏の激しさに呆れていた、そんな二人を後目に巴嘸はコンビ二に向かった。

家の屋根の上の空間に亀裂がはいる、そしてそこから白のロープをはおつてフードを深く被つていて顔が確認できない小さい女の子と思われる人が出てきた、白い女の子は屋根の上から辺りを見回す、そして一人の少女が視界に入った、その少女はコンビ二に向かう巴嘸だった、そしてそれを見て白い女の子は口角を上げた。

「可愛い、あの女の子どんな鳴き方するのかな？私を感じさせてくれるのかな？ねえ四郎はどう思う？鳴き声聞きたくない？」

『ご自由に、僕は美しい音色を奏でて頂ければそれで満足です』

「じゃあ決定！あの女の子をいっぱいいいじめちゃおう！それで私をいっぱい感じさせて、頭が狂っちゃうくらいに」

『キリストよ、我々の所業をお許してください』

白い女の子は体を抱いて興奮を抑えていた、口を大きく開けてあえぐような高い声で興奮を抑えていた、そして白い女の子は屋根から飛び降り巴嘸の前に立ち興奮して流れたヨダレを拭いた、巴嘸は白

い女の子の不気味な笑に背筋が凍った。

## 第七陣

巴嘩の前に小さい女の子と思われる少女が飛び降りて来た、真っ白のローブに深く被ったフードで口元しか見えない、しかし巴嘩はそれだけで恐怖を覚えた、そして適合者ということに気づいた、白い女の子は近寄り巴嘩に抱きつき耳を心臓の辺りにあてる、巴嘩はあまりの恐怖で動けなかった。

「ねえ、あなたはどんな声で鳴いてくれるの？この心臓はどんな恐怖の音を奏でてくれるの？」

「な、何よあなた？」

白い女の子は一步下がると宙に浮いた、そらを仰いで両手を大きく広げた、そして魂脈の流れが速まった。

「四郎よ、我が刃となりて聖<sup>ひじり</sup>を持って咎人に裁きを下せ、死の旋律は血の戦慄によって奏でたまえ。属性馮位、聖<sup>ひじり</sup>の舞」

白い女の子の周りに白い球体が複数規則的に円を描いて現れた、属性馮位特有の状態だ、しかし巴嘩には一つの疑問が浮かんた、それは属性だ、属性は本来火・風・水・岩・木の五つだ、だが白い女の子が唱えたのは‘聖’、それは巴嘩の知識の中では存在するはずがない属性だった。

「巴、どうということ？聖なんて属性聞いた事ないわよ、それにそんなものが存在するの？」

『残念ながら存在しちゃうのよ、属性馮位だけに存在する属性が二

つあるの、一つは彼女の聖、もう一つは真逆の闇よ。聖は闇に強い、でもそれ以外には変わらないわ、けど主な五つの属性攻撃を使う事が出来るの。闇は主な五つの属性全ての弱点であり、全てが弱点、聖には一際弱い属性なの』

「お話は終わった？早く始めようよ、どっちかがお人形さんになるまでね」

巴嘩は覚悟を決めた、相手の魂脈の速さから次郎の魂玉段階式並の力があることは容易に想像できた、今逃げてもすぐに追い付かれる事も、巴嘩は魂脈の流れを速めた。

「巴！枯葉魅刃！」  
いしはみじん

巴嘩は白い女の子に跳び掛る、目の前まで上昇すると横薙で斬りつける、いつの間にか白い女の子の隣に来ていた球体が平たく壁になって斬撃を止めた、巴嘩は落ちるのと同時に白い女の子の足を掴んで下に投げる、勢いよく落ちていた白い女の子は徐々に減速して着地した、巴嘩はその上から上段から斬りつける、だがさつきと同じように壁に阻まれる、それと同時に球体が横から巴嘩を弾き飛ばした。

「くっ！」

「キャハハハ！もっと鳴いてよ、それとももっといじめないと鳴けないの？」

地面に倒れてた巴嘩が腕を着いて立ち上がった、口から唾に混ざった血を吐いて白い女の子を睨んだ。

「一人で空にいたらつまらないでしょ、地面にいないと苦痛に歪む顔が見れないわよ」

巴嘩は挑発するが白い女の子の口元は何も変わらない、口角を上げたまま、白い女の子が手を広げると左手に半分、右手に半分の球体が集まって大きい鎌の形を成した。

「それもそうだね、鳴き声が聞こえないし手元で歪む顔が見たいもの、だから私を感じさせてよ、ね？」

「あなたが生きてたらね」

「あ！あと私の名前は四奈ね、あなたは？」

「巴嘩よ、よろしくね四奈ちゃん」

「よろしくね巴嘩ちゃん」

次の瞬間目の前に四奈がいた、左手で斬りつけるが何とか魂玉で防御する、しかし右手が残っていた、鎌の柄を素手で掴んで頭突きをするが左手の鎌が欠けて巴嘩の頭突きを防ぐ、巴嘩は無理矢理腕を掴んで後ろに四奈を投げる、そして追って斬りかかろうとするが檻に捕まり檻の椅子に拘束された、シーソーのようなものの先端に檻がついている。

「パン屋の檻」

「な、何よこれ！？」

檻が落ちるとその先には大きな水溜まりがあった、そして拘束され

たまま水に落ちた、住宅街に水溜まりがある訳がない、四奈が作り出したものだ、四奈が檻を引き上げる、檻の出し入れをして四奈は楽しんでいる。

「ゴホッ！ゲホッ！ハアハア……！」

「もっと苦しんでよ！悲鳴を上げて、死んじゃうまえに奏でてよ」

四奈が檻を下ろすと最後まで落ちたにも関わらず巴嘩は肩までしか水に入っていない、四奈は口角を上げたまま首を傾げた、そして巴嘩は笑った。

「残念だったね四奈ちゃん、私の属性は木よ、これくらい吸わせるくらい簡単な事」

「残念だな、でもこのまま死なれても鳴き声聞けなかったからいいや、次は鳴けるよ」

檻は球体に戻った、地形も元に戻って四奈の右手に球体が集まって右手はハンマーと化した、四奈は亜音速で巴嘩に突進してハンマーをフルスイングする、流石に巴嘩は吹き飛ばされる、着地するとまたハンマーで殴られるが今度は押されるような感じだ、そして巴嘩は「何か」に入った、それは扉のように体を開いた女の子の鉄の像だ、内側には刺がある。

「鉄の処女」

扉は観音開きになっていて閉まる前に巴嘩が手で閉まらないようにする、鉄の像は閉まろうとするが巴嘩の力が勝った、扉は紙のように折れ曲がり簡単に千切れた、四奈は口を馬鹿みたいに開いていた、



これが普通の反応だが巴嘩の馬鹿力では常識だ。

「何これ？アルミ？こんなんで私を殺そうとしたなら笑えるわね」

四奈の口角がまた上がって大きな口を開けて大笑いしはじめた、巴嘩にはなんで笑ってるのか理解出来ないらしい。

「巴嘩ちゃん最高だわ！私今のでチョット感じちゃった、でもやっぱり鳴き声が聞きたい、だから鳴いてね」

急に四奈の魂脈の流れが速まった、四奈の両足に球体がまとわりついて手のひらにもある、空気を蹴るように高速の速さで駆け出した、巴嘩は見失って次の瞬間右側に四奈が現れ右手に触れて消えた、同じ要領で左手に触れた、そして最後に足に触れると巴嘩と10mほど離れた場所に四奈が現れた。

「咎人は動くに値せず、咎人よ聖なる十字架により汝の動きを封じる、神の十字架」

「えっ？やあ、何これ!？」

巴嘩の腕が90度を開き足は閉じて宙に浮いた、巴嘩がどれだけあがいてもビクともしない、十字架に張り付けにされたような状態だ、恐らく魂玉の力により拘束されたのだろう。

「何よこれ？離しなさいよ、気持悪い!」

「離すないわよ、これからもつと鳴いてもらうんだから、ほら段々顔が絶望に近付いてきた、泣きたかったら泣いて良いよ、その鳴き声も私は大好きだから」

四奈は巴嘩の頬に右手を、腰に左手を置いて耳元で囁くように言った、巴嘩はあまりの恐怖で涙が流れて来た、それを見た四奈は体を震わせて口角を上げた。

「鳴き声聞かしてよ、涙は感じるけど悲鳴には負けるわ、これから死んじゃうんだよ、怖くないの？私はゾクゾクしちゃうわ」

「お願い、こ、殺さないで、私、な、何でもするから、ねえ、お願い……！」

四奈は巴嘩の唇に自分の唇を押し付けた、長く濃厚なキスだ、巴嘩は目を丸くして涙を更に強く流した、四奈は巴嘩から離れると頬を流れる涙を舐めた。

「バイバイ、最後に聞くけど焼き加減はレア・ミディアム・ウェルダムどれが良い？」

巴嘩はあまりのショックで言葉が出なかった、四奈は無言で巴嘩から離れた、その時ついに巴嘩は死を覚悟した、もうこの状況からの打開策は考えつかなかった、四奈は興奮する体を抑えていた。

「じゃあ思いつきり鳴いてね。魔女狩り」

巴嘩の足元から徐々に火が出てきた、そして一気に燃え上がる瞬間だった、巴嘩の上から大量の水がふつてきて巴嘩をビショビショにしたついでに消火した、そして高速で移動する何かが四奈を地面に抑えつけた、魂玉の力が薄れて巴嘩が落ちた時に巴嘩をキャッチしたのは次郎だった、そして怒りの形相で四奈を抑えつけてるのは経だ。

「デメエ、俺は女だろうが子供だろうが容赦はしねえ、殺すと決めたら殺す」

「……経ちゃん」

「キャハハハ！殺せなかったな、これじゃ勝てないよ、私は手を引くよ」

白い球体が無くなった、そして抑えつけてる地面に亀裂がはいってそこに四奈が消えて行った、経には入れない空間らしくガラスがあるかのように四奈が亀裂に消えて行った、経は一目散に巴嘩のもとに向かった。

「巴嘩、大丈夫か？」

「何で経ちゃん達が？」

「別の魂玉の生体反応を感じたと思ったたら魂脈の流れが速まったから、心配して来てみたらこの有り様だった」

「経ちゃんありがとう！わ、私死ぬかと思った、絶対、絶対に助からないと思った！」

巴嘩は経の肩で声を上げて泣いた、経は泣き止むのを待つて家に帰った、巴嘩をベッドに寝かせるとすぐに深い眠りに入った、経は考えながらロフトの上の布団で横になると、いつの間にか寝ていた。

経が朝起きると違和感を感じた、いつもと違う、何か温もりがある、布団をはぎとってそこを見るとそこには女の子がいた、真っ白な素肌、色素の薄い方まで届く巻き髪、そして何より未発達な身体、何よりおかしいのは服を着ていない事だ、経は考えられるありとあらゆる可能性を考えた、その結果。

「誰だよお前!？」

女の子は目を擦りながら起き上がった、そして大きな目を見開くと口角を上げて経に抱きついた。

「おはよう!ご主人様!」

「ご主人様?それにお前誰だよ?」

「私?私は久留米<sup>くるめしな</sup>四奈、四奈って呼んで」

## 第八陣

「それで、何でお前がココにいる？」

経と次郎と四奈は机を囲んで四奈を問いつめていた、巴嘩はトラウマらしく部屋の隅の方で膝を抱いて震えていた、裸だった四奈は一応巴嘩の服を着せてるが大きすぎる。

次郎と経は険しい顔をしているが四奈はマニアなら二秒で逝くような笑顔を振り撒いてる、昨日あれだけの事をしているのでそう簡単には信じられないのは当たり前だろう。

「経、これはヤバイよ」

「分かってる！コイツは巴嘩を殺そうとした奴だ、それがココにいるってのは殺してくれて言うてるようなもんだろ……、なんなら殺しても良いんだけどさあ！！」

経は怒りを剥き出しにして四奈の胸ぐらを掴んだ、経は急に立つたために椅子が大きな音をたてて倒れた、四奈は顔色一つ変えずに経を見つめた、次郎は経の手を引き離して経を座らせる、経は背持たれに持たれて次郎は頬杖をついて四奈を眺めた。

「うーん、やつぱりヤバイな。経はロリコンだったなんて、しかも裸で添い寝なんて確実にご法度だよ」

「次郎！お前も殺すぞ！」

経は怒りの矛先を次郎に向けた、次郎は苦笑いを浮かべながら両手を挙げてる。

「冗談だよ、冗談。それよりさあ、四奈ちゃんは俺らに信じて欲しいんだよね？」

「うん！」

「じゃあ俺が今からする質問に答えて、回答次第じゃ殺すから、まあ逆を返せば信じるに値するかなあ、と」

四奈は二つ返事で応えた、経は納得出来ないようであからさまにキレてる、次郎と四奈は笑いながら向き合ってるが次郎から殺気が出ている状態だ。

「じゃあ最初に、武志と顔が見えないロン毛の男について教えてよ、ロン毛が武志の前に現れた事から二人が繋がってる事は誰でも分かる、そこで四奈ちゃんとロン毛は同じ亀裂に出入りしてた事から二人が繋がってるのも分かってるから」

「武志は私達の仲間だった奴だよ、アイツはワンマンプレーが多かったから嫌いだったんだよね。それとロン毛の顔が見えないのは多分半哉はんやだと思うよ、半哉の事を私達は『死刑執行人』って呼んでるんだ、明らかに負けた奴とかワンマンプレーが過ぎた奴、後は裏切り者とかを殺してるのが半哉。他に知りたい事はある？」

次郎は頭の中でそれらのピースを当てはめていった、そして整理して最大限の推理を働かせる、その間巴嘖は震えがとれて四奈の話に耳を傾けてる。

「じゃあこのままいくと四奈ちゃんは半哉って奴に殺されるって事？」

「そうだよ、流石の私でも半哉と殺り合ったらヤバいね」

「まあその事はおいとして、次に……………」

「歳那って変態はアンタの仲間でしょ？」

復帰した巴嘩が顎を掴んで持ち上げた、四奈はボディーラングエツジで喋れない事をアピールした、それを見て巴嘩は四奈を下ろした。

「あと勇治もな」

「あれ？総羅そらはいなかったの？歳那・勇治・総羅はいつも三人一組で動いてるんだけどな」

「私と経ちゃんけいちゃんが戦ったときはその二人だけだった、さあ早く教えなさいよ」

「三人も私の仲間だよ、でも二人ともラッキーだったね、あの三人は私とは比べ物にならないくらいに強いから、あれは化け物だね」

経と巴嘩は顔が青ざめていった、四奈が次郎と同じくらいに強いのは知っている、それよりも強いということは確実に次は「死」が待っている事を理解した、しかし次郎は顔色一つ変えずに四奈への質問を続けた。

「じゃあ最後に、四奈ちゃん達の組織は誰が親玉なの？」

「組織ってより集団に近いような形態だよ、あと親分は信征のぶゆき、魂玉は「織田信長」」

三人の顔があつという間に変わつた、次郎の推理は正しかったらしい、今まで笑っていた次郎が険しい顔をして四奈の話に聞きいつていた。

「他のみんなは信征の考えに勝手に賛同して集まつただけ、私は楽しそうだったから参加したの。私達が使つてゐる空間に亀裂をいれる移動手段は信征がくれた力、でもこれは魂玉に寄生させる呪いみたいなものの、だから信征から私達の居場所はまる分かり……………」

「ちよつと待てよ……………」

馬鹿な経でも理解出来たらしい、このままいくと自分達の命がいくつあつても足りない事に、そしてこの家と四奈ごと消される事に。

「つてことは今お前は脱走したことになる、それで居場所が分かるつてことはやっぱりお前スパイだろ!？」

「まあ待てよ、四奈ちゃん、まだ続きがあるんだよな？」

次郎は経をなだめて落ち着かせた、次郎は経に意識を向けながら四奈の話を聞いた。

「流石あ！信長の属性は‘闇’、四郎は‘聖’だから闇を制するくらいいけないの、信征には太刀打ち出来ないけどね、でも呪いを解くのなんてアリを潰すよりも簡単、だから今の私は‘呪い’の‘の’の字も無いよ」

「四郎？お前の魂玉は誰だよ？」



『それは私から』

始めて四奈の魂玉が話をしだした、声だけで好青年ってことが分かる、そして四奈とは違い裏表の無い透き通った雰囲気を持ちあわせている。

『私は天草四郎です。どうか四奈をよろしくお願いします、この子は嘘はつきません、多少行き過ぎた趣味はありますが純粋でいい子です』

四奈は照れながら四郎の話を聞いている、三人は何故か四郎の事は信じられた、これほど適合者を信賴している魂玉もそう多くはない。天草四郎、キリスト教の信者で不思議な力を操った少年といわれていた、キリスト教の弾圧により幕府に歯向かい軍を統治した、しかし殲滅され四郎も若くして戦により死んだ。

「俺は信じるよ」

「何でだよ！？仮にもコイツは巴嘩を殺そうとしたんだぞ、俺らに付け入って殺そうと考えてる可能性だってあるだろ！」

「それは無いよ、巴嘩ちゃんなら分かるだろ。もし本当に俺らを殺す気ならとつくに死んでるよ、寝首かつ切れば良いんだもん、経と一緒に寝てたって事は殺す気は無いと思うよ。じゃあ殺す気があると過程しよう、今は信じさせて後で殺す経の推理、多分コイツは勝ち目の無い戦いはしない、昨日経が捕まえた時に逃げたのが決定的だ、本当に殺したいなら一人ずつ殺すはずだ、だろ？」

四奈は笑顔で頷く、経は何となく理解できた、四奈に殺意が無いことだけは、巴嘩は次郎と同様に全てを推理出来ていた、そして巴嘩

と次郎は四奈が即戦力になることも分かっていた、四奈と一緒にいてマイナスになるのは敵の攻撃が過激になるくらいだ。

「俺は四奈ちゃんと手を組むのは賛成だよ。巴嘩ちゃんは？」

「嫌だけど、今は少しでも力が欲しい、だから……………」

「経は？」

「巴嘩と次郎がそこまで言うなら……………」

「やったあ！嬉しい、ご主人様と一緒に暮らせるなんて！最高に感じる毎日になりそう」

四奈は肩を抱きながら体をクネらせた、三人は呆れ気味にそれを眺める、そして四奈は経に抱きついてキスを迫る、しかし経は四奈の顔を押し退ける。

「そういえば四奈ちゃんは何で経の事を『ご主人様』っていうの？多分それが寝返った理由だと思うんだけど？」

「だって…………、男の人に押し倒されたのは始めてだったんだもん、私Sだと思ってたけどMの血が目覚めちゃった。だから私のご主人様！」

再び経にキスを迫る、巴嘩と次郎はなんだか呆れて見てる、経はその気は無いようだが四奈は盛のついた猫みたいな状態だ、多分経が期待に応えるまでは治まらないだろう。

「頼むからご主人様は辞めてくれ、俺にそんな趣味は無いし気色悪

い、経で良いよ」

「じゃあこれから愛の契ちぎを、私と経様の熱い一夜を」

「経様って、それに四奈とは何もしないから……、ひい!？」

経の視線の先には般若が可愛く見える巴嘩がいた、多分子供くらいなら顔だけで殺せるだろう、今にも経千切りそうな勢いである、経はその時本当の‘死’っていうものを肌で感じた。

「経ちゃん、こんな子供に手を出したら犯罪だよ、いや、子供じゃなくても犯罪だよ」

「ち、違う!俺にはその気はない、な?ししし、信じてくれよ、なあ、巴嘩!」

「私は子供じゃないわよ……」

四奈は経から離れて巴嘩元に行き耳打ちをした。

「巴嘩ちゃんのアレ、ファーストキスでしょ?」

巴嘩の顔がみるみるうちに真っ赤になって、茹で蛸のようになった、四奈は清々しい笑を浮かべてソファに座ってテレビを付けた、経と次郎は状況を把握出来ないまま蚊帳の外。

## 第九陣

経と巴嘩の修行風景が変わった、巴嘩は次郎との仕合、経は四奈による地獄の目隠し球体避け、次郎の時とは違い球体が直線的ではなくイレギュラーにとんでくる、しかも途中で分裂したり形を変えるため一筋縄ではいかない、巴嘩と次郎は次郎が仕合一つに集中すれば良いため次郎の技のキレが変わった、経も巴嘩も最初は苦戦していたがなんとかついていけるレベルまで達した。

「キャハハハ！経さまもつとつと鳴いてよ！死んじゃうよ！？」

“ジリリリリ！！”

頭に響くような金属音が廃屋に響く、その瞬間全員の動きが止まる、経はその場に倒れこむ、巴嘩は一礼してその場に座った。

「終わっちゃった。神の祝福」

四奈の白い球体が経と巴嘩を包んで離れると怪我などがなくなっている、聖による回復だ、巴嘩のものより精度が高く回復時の外からの攻撃を防げる優れ物だ。

「ああ、死ぬかと思った、四奈少しは手加減しろよ」

「したよ、経さまの今の状態で本気出したらチリになっちゃうわよ、でも徐々にスピード上げてったけどね」

「いやあ、二人共凄いいよ、成長のペースが異常なくらいだよ、巴嘩ちゃんは明日から次の段階だから。四奈ちゃん、経の場合は徐々に

スピード上げてって、フェイントとかも混ぜてね」

「了解です！」

四奈は満面の笑で敬礼するがヨダレがたれている、その四奈の顔に経は恐怖を通り越して死を感じた、確実にいつか殺されるであろうこの修行、経は遺書の書き方を必死に考えていた。

「今日は土曜だしどうか行こうよ、四奈ちゃんもいつまでも巴嘩ちゃんの服じゃ嫌だろ？」

「わーい！お洋服買って貰えるの！？」

「ちょっと待て、次郎にも巴嘩にも金は出せないだろ？」

次郎と巴嘩と四奈は経を睨んで笑を浮かべた、経は馬鹿なりに言わんとしてることが分かったらしい。

「俺が払うの？」

「他に誰がいるの？」

「経ちゃんのものなんだから経ちゃんが面倒を見るのは当たり前でしょ？」

「そうだよご主人様！いっっぱい買ってね、お洋服」

「服を買うのは良いけど四奈が俺の物って件は有り得ないだろ、俺にそんな趣味は無いし、受け入れる気もない」

「大丈夫だよ！私の心も体も経さまのものだから、なんなら今から既成事実を作っても良いんだよ？」

四奈は経にキスを迫るように抱き締めている、その間も経は巴嘩の殺気を背に受けていた。

経達は電車に乗って10分ほどの街にいた、服などを揃えるには丁度良いデパートがあるからだ、女の子の物を買うということで経と次郎は別行動、四奈と巴嘩は必要な物を揃えに回っていた。

「下着は買ったし、後は服だね、どんな服が良いの？経ちゃんのお金だからお店ごと買っても良いわよ」

四奈は巴嘩の手を引っ張りながら目的地まで歩いていった、他人から見たら仲の良い姉妹に見えるだろう、とても本気で殺し合いをした間柄には見えない。

四奈が巴嘩を連れて行ったのは不思議な感じの店だった、巴嘩はそのファッションの事をなんとか知っていた、しかし自分がそれに関わるとは思ってもみなかっただろう。

「……ロリータ？」

「そう！私大好きなんだ！どれでも買って良いんだよね？」

「良いよ。行つてらっしゃい」

四奈は無邪気に走って行った、籠を引きずるように持って次々に服を投げ入れる、そして一つが埋まると他の籠を持ってきて服を投げ入れる、巴嘩は呆れて見ていた、ある程度服を入れると四奈が巴嘩

の元に走って来た。

「ねえ、他のお店も回って良い？」

「良いよ、経ちゃんお金持ちだから気にしなくても大丈夫」

巴嘩は四奈の頭に手を置きながら同じ視線で話した、四奈は巴嘩の手を引いて服の会計をした、店員も同じくロリータで巴嘩は少し居心地が悪かった。

「47万2千円あります」

「……高い」

あまりの値段に二人は啞然、そして四奈が不安そうな顔で巴嘩を見る、巴嘩は苦笑いしながら経から借りてる財布を開いた、そこには福沢諭吉が二人しかいなかった、しかし問題はカードだ、一枚だけはいってる黒いカード、それを見た瞬間巴嘩がフリーズした、四奈は不安そうに巴嘩を覗き込んだ。

「巴嘩ちゃん、お金足りる？」

巴嘩はそつとブラックカードを出してその場に置いた、店員は珍しい物を見るような目で巴嘩が出したカードを見た、そして慣れた手付きで会計をする。

「なにあれ？」

「ブラックカードって言ってね、お金が使い放題になる物」

「ホントに！？じゃあもつと買って良いんだ！」

「そうだよ、私も買っちゃお」

その後二人は普通の女の子では有り得ないような買い物をした、そして持ち帰れない事に気付く経と次郎を呼び出していた、呑気に歩いてきた経と次郎は巴嘩と四奈の荷物の量を見てフリーズした、巴嘩は笑顔で経に財布を返した。

「いくら使ったの？」

「……二人で120万くらい？」

「馬鹿じゃねえの！？服で120万ってどんだけお嬢様だよ！？」

「経さま起こらないで、お願い……」

うるんだ粒来な瞳で経を上目使いで見ると、経はそれにやられて無理矢理納得させられた、四奈は巴嘩の方に向き直って笑顔でコンタクトする。

「経ちゃんと次郎も何か買う？コーディネートしてあげるけど」

「俺はいいや、めんどくさいし着れば良いんだよ」

「じゃあ俺は買おう。経、着いてこい」

「ちょっと待って！」



巴嘩は二人の手を掴んで制止した、二人を呼んだ理由は値段報告ではない、只の労働力として呼んだんだ、今帰られては女の子二人だけで有り得ない量の荷物を持たなければいけなくなる。

「二人ともこれ運んだら行って良いよ」

「どこに運ぶんだよ？」

「……先に帰ってるから、タクシーに詰め込んでえ！」

四奈と巴嘩はタクシーに荷物を積ませてタクシーに乗り込んだ、その間経と次郎は買い物をする事になった、次郎は気に入った服を数着買って終了、経は次郎に任せてベンチに座ってる、次郎が帰ってくるとダルそうに立ち上がる。

「経、行こう」

「それだけで良いの？もつと買っても……………！！」

「経、まさか？」

「こんな時にかつたるいな、チャッチャと片付けて帰るぞ」

次郎と経は河川敷にいた、人がいない河川敷だが人以外の禍禍しいものが埋めつくしてた、200体近くの異端だ、経は次郎に荷物を全て持たして臨戦体制に入った。

「かつたりい」

『そついわずにパパッと片付ける、これくらいなら一振りだろ?』

「振らねえよ」

経は腕を前に突きだして手の平を敵に向けた、魂脈が逆回転しはじめる、しかし今までの経よりも流れが格段に上がっている、経本人が一番それを実感してた。

「烈波<sup>れつぱ</sup>！」

横一閃の真空波が異端を胴を境に斬れた、全てを一撃で倒した事に経が一番驚いている、そして明らかに強くなっている事に喜びを感じていた。

「魂玉を開放しないであれだけの属性攻撃をだすなんて、かなり成長してるよ」

「当たり前だろ、そのうち足元すくわれるぞ」

次郎は笑いながらその場をさつていく、追うようなかたちで経が後についていった、しかし二人は気づいていなかった、異端は群れても10体単位ということに、異端が何体いようが二人には関係ない事なので見逃していたのだろう。

河川敷の上から経と次郎を眺める一人の男がいた、茶色の髪の毛はパーマがかかったミディアム、身長は経より大きいくらいだ、そし

て男は含み笑いをしながら歩き出した。

「あれは使えそうだな、まだまだクソ以下だけど、クソ、は使いようだな」

『馬鹿、じゃろつが！わざとか？それともマジか？』

「クソが、わざとに決まってるだろ」

男はその場から消え去った。

## 第十陣

経達はいつものように廃屋にいた、経の球体避けは最初に始めた時の倍以上の速度になり一度に複数を避けられるようになった。

巴嘩は簡単に折れてしまう長刀ながなたでの仕合、相手の攻撃をまともに受け太刀しようものなら楊枝の如く折れてしまう、巴嘩はこの修行で何とか最初から最後まで一本の長刀で仕合が出来るようになった。

次の日、次郎は廃屋に行くいつものように始めずに二人に魂玉を開放させた、そして次郎は二人をボクッと眺めて笑った。

「よし、じゃあ式式を発動してみようか」

「発動つて、もしかしてもう修行終了！？俺らも式式を使えるのかよ！？」

「だからそれを確かめるの、一回魂玉を戻していつもより魂脈を速く回してみて、壱式とは違う魂玉を感じると思うから、後は始めて開放した時と同じ」

二人は目を閉じて魂脈を速めた、巴嘩は元から魂脈を使うのは慣れたるタメにあつという間に流れが異常なスピードまで達した、そして巴嘩の頭に美しい形の長刀が浮かんだ、巴嘩の周りに桜の花びらが舞はじめて巴嘩が両手を前に突き出す、桜の花びらは渦を巻き巴嘩の手元に集まる。

「巴！枯雀桜刀！」  
いこめくおうじん

桜の木の枝の先に桜色の等身の広い刃が10枚、花が咲いたように円形についている、巴嘩は確かな力と魂脈の美しさに浸っていた。経は少しずつだが着実に魂脈の流れが速くなっている、以前の経とは比べ物にならないくらいだがまだ足りない、そして経は更に集中した、経の周りに風が吹き始める、そして風が渦となりその中に一筋の光が回り始めた、経が両手を開くと右手に光が降りた、光は右手から弧を描いて左手に痕を残して移動する、光の周りに全ての風が渦巻く。

「義経！疾鎖双狗！」

壱式より短い刀の柄が鎖で繋がっている、右は緑色、左手は黄色の刀身だ、経は左手に持っている刀を投げると鎖が伸び続ける、そして経の意思で戻す事もできる、経は魂玉を眺めて笑った。

「スゲエ、なんか魂脈の流れの速さが分かる、風が体の中に吹き荒れてるみたいだ。それに……、なんだろこの感覚？」

経は自分が使ってる風とは違う何かを感じた、初めての感覚だが使い方はイメージが出来る、次郎が拍手をしながら近寄ってくる。

「おめでとう。じゃあ最終段階の修行やろうか」

「え？もう終わりじゃないの？式式を開放出来ただろ」

「甘いなあ、経は感じるだろ？風とは違う何かに。今度はそれを使いこなしてもらおう、それが出来て始めてマスターしたことになる。ちなみにその力は一度マスターしたら壱式でも使えるから」

そういうと次郎が魂玉を開放した、次郎はその場に水溜まりを作り

そこに手を触れる、次の瞬間辺り一面が冷えだして水溜まりが凍った、暫くすると外気は普通の温度に戻る。

「これは経が感じた奴の仲間、巴嘩ちゃんは前々からなんとなく分かってたと思うけど属性の奥には更に‘付加効果’がある、水の場合は‘冷却’、経の風の場合は‘雷電’、巴嘩ちゃんの木の場合は‘出芽’、他には岩の場合は‘鉄鋼’、火の場合は‘爆発’といった感じだね、普通は技名とかはいらないけど場合によっては必要だね、口で説明するよりやってみな」

経はイメージした、風は体を回るイメージ、だけど新しい力は体を駆け巡るイメージだ、それを魂脈の流れを逆回転させる、そうすると体を電気が包む。

「スゲー！体が軽い、それに空間が俺のものになったみたいだ」

「それは多分空気中にある電子が影響してるからじゃないかな、じやあ次は巴嘩ちゃんの番だよ」

巴嘩はイメージした、木を生やすのではなく、魂玉を生やすイメージを、魂脈の流れを逆回転させる、そして前方一直線に集中する、巴嘩から一直線に式式の魂玉が次々に生えてくる、それらは全てが魂玉なので今巴嘩が持っている物と変わらない。

「何だよこれ？相手に魂玉を渡してるようなものじゃん」

経は生えた魂玉を握ると魂玉から木が生えて経に巻き付く、そして経は身動きができなくなった。

「うわぁ！何だよこれ！？巴嘩、早くこれほどいてくれよ」

巴嘩は全ての魂玉を消した。

「凄い、これなら式式の力をフルに使えるわ、まだまだ改良の余地はありそうね」

「はい。じゃあこれから二人に殺し合いをしてもらってから、それが最終段階ね。属性攻撃抜きで付加効果と魂玉だけで戦って」

「ちょちょちょ、ちょっと待て、殺し合うつて何だよ？どっちか二人が死ねと？」

次郎は笑うと四奈に何かを言った、次郎と四奈は少し下がると経と巴嘩を収容する空間が出来た、そしてそこに穴が空き次郎が入る。

「ココは四奈ちゃんの魂玉が作り出した空間、いつも二人が回復してもらってるやつの改良版、だから……！」

次郎は経の肩口から脇腹にかけて斬る、しかし確実に斬れたハズだが経は痛みすら感じていないし傷口すらない、経と巴嘩は次郎に斬られたところを見るが痕も何もない。

「この空間で痛みは無いよ、傷口も斬れたらすぐに塞がる、例えば致命傷だったとしても全てはロストされる、衝撃とかはあるけどね。この空間なら殺し合えるでしょ？頑張ってね」

次郎は穴から出ると二人に手を振っている、外部からの全てのものは遮断されるらしい、経は壁に左手の刀を投げるがビクともしない、諦めたの経は構える、それをみて巴嘩も構える。

「怪我しないなら本気でいくから、巴嘩も手加減するなよ」

「当たり前じゃない、それに今は新しい力のイメージが湧いてくるの、経ちゃんに負ける気がしない」

「あつそ、じゃあ行くぞ」

経は一足で10mほどあった差をつめる、しかし左手の刀は元いた場所に突き刺したまま、刀一振りのみで巴嘩と斬り合う、巴嘩は軽々と防ぐ、そして経に斬りかかろうとした時だった、経の魂玉の鎖が収縮して巴嘩の巻き付く、経は戦いながら巴嘩の周りを回って鎖を巻き付けていたのだ。

「残念でした、これで一回死んだ………！」

経が巴嘩を斬りつけようとした時だった、巴嘩の魂玉の刃がバラバラになって経に襲い掛る、経は鎖をほどいて全てを避けた、間一髪で避けた経は間合いをとり一息つこうとした時だった、後ろに巴嘩がいた、しかし前にも巴嘩がいる、考える暇もなく後ろの巴嘩に斬られた、斬ると後ろの巴嘩は消えた。

「魂玉だけじゃなくて適合者も生やせるんだよ、陸は全て私のテリトリー、それを頭にいれといてね」

巴嘩の魂玉の刃が回転し始めた、そして今度は巴嘩が斬りかかる、次郎は受け太刀した瞬間刀を地面に叩き落とされた、刃の回転により格段に斬撃の威力を上げたのだ、経は少し下がる、巴嘩はゆつくりと歩きながら経に近づく、次の瞬間巴嘩の胸から先ほど叩き落とした刀突きでていた、そしてそれを抜くと経の手元に戻った。



「油断大敵、魂玉でも刀は鉄らしいな、こっちに引き寄せるのは簡単だったよ」

そついう経の手元は電気が走っていた、手元を磁石化することによって落ちていた刀を引き寄せたのだろう。

「まだまだだよ！」

次郎は中の二人を外から笑いながら見てる、四奈は拳を振り上げて観戦している、これだけ高度な戦いをしている経と巴嘩にただ純粹に楽しんでる四奈と次郎。

「巴嘩ちゃんも自分を生やすなんて考えたね、経はまたスピードが上がってるし、スゴいスゴい」

「キャハハハ！二人ともスゴイ！ねえ次郎君、こんなに凄い戦い見たことある？私は無いよ！」

「でも俺らはこれからもつと凄い戦いをしなきゃいけないんだよ」

経達が戦おうとしてる相手はココにいる四人でも勝てない相手だ、まだまだ四人は強くなる必要がある。

公園の一角の空間に亀裂が入る、中から髪が長くジャージの襟が高

い男が出てきた、半哉だ、そして集中すると何かを感じたらしい、  
あえて魂脈の流れを速める。

「近いな」

## 第十一陣

経と巴嘯の殺し合い（実際は死ねない）を見てる次郎と四奈は空間に響く生体反応を微弱ながら感じた、そしてその反応の魂脈の流れが急に速まる、四奈は反応を感じると顔をこわばらせて苦笑した、次郎はその異様な速さの魂脈の流れを感じて嫌な胸騒ぎを覚えた。

「四奈ちゃん、悪いけど二人の修行は終りみたいだね」

「そうみたいだね」

四奈は経と巴嘯を取り囲む空間を二分する、片方は経、片方は巴嘯、普通に空間を無くした時にどちらかが攻撃をしたらシャレでは済まされない、二人も終了の意を悟って魂玉を戻した、四奈も戻して外部の空間を感じた経と巴嘯の顔色が変わる、大きな適合者の反応、しかしそれ一つだけしか感じない、異端の反応も他の適合者の反応も。

「何だよこれ？」

「た、多分、死刑執行人、半哉が来たのよ、……………私を消しに」

全員黙ってしまう、四奈は体を震わせながら歩いて行く、戦うつもりなのだろうが相手の力量を知ってるが故に震えが止まらない、経が見かねて肩を掴んで制止するがそれを振りきって微笑む、しかし顔は冷汗でいっぱいだ。

「大丈夫だよ、経さま、怖いけど勝つから、絶対に死なないから、だから安心して」

「なら俺も……………」

「それじゃ駄目なの、これは私と経さまが歩む上で避けては通れない壁なの、みんなの力を借りるのは簡単だけどココでみんなに甘えたら遅かれ早かれ死んじやうよ、私一人で勝たなきゃいけないの、だから一人で行かせて」

経は四奈と同じ目線まで屈んで四奈の頭をクシヤクシヤにした、今出来る最高の笑顔で涙を堪えてる四奈の顔を覗きこむ。

「子供のクセに考える事は一人前だな。そこまで言っただから絶対に勝てよ、生きて帰ったら何でもしてやるよ」

四奈は経から離れて経達に背を向けた、そして涙を拭って廃屋の窓から見える太陽を見る。

「みんな待つてね。……………それと、私17歳だから」

涙を一粒と捨てセリフを残して四奈は消えた、経と次郎は驚きを隠せないようだ、巴嘩は後ろの方で誰にも見られないようにすすり泣いている、この中で四奈と戦ったのは巴嘩のみが四奈の力を知っている、それ故に半哉と四奈の力の差が分かってしまった、経と次郎は四奈の勝利を信じていたが巴嘩だけは違った。

広い公園のベンチに腰掛ける一人の男、表情は読み取れない、男の30m先に四奈が現れる、それを見て男もとい半哉は髪を後ろにもつていき一つにまとめる、目にはサングラスをかけていてやはり表

情は分からない、四奈は震える体を抑え込むだけで精一杯だ。

「最期に二つほど質問する、1・戻る、2・死ぬ、選択の自由は与えた、選べ」

「3・貴方を殺して前に進む、これに決定」

「残念ながら交渉決裂のようだ、後悔先起」

「四郎よ、我が刃となりて聖を持つて咎人に裁きを下せ、死の旋律は血の戦慄によって奏でたまえ。聖の舞」

四奈の周りに聖の球体が浮かぶ、そして半哉は魂脈の流れを速める、やはり異常な魂脈な流れが速い、四奈は覚悟を決めて集中する。

「半蔵、風の流れを刃と変え、前に佇む闇の<sup>たたず</sup>僮どもを疾風の羽衣で絶つ。属性馮位、風の閃き」

辺り一帯に強い風が吹くと半哉の体の周りに風が吹き始める、半哉も四奈と同じ属性馮位型だ、属性は風、風の属性馮位型は殆どをスピードにおき体術中心の戦いとなる、しかしスピードは尋常ではないタメに防ぐことも出来ない事もある。

服部半蔵、日本の忍者の代表的存在、伊賀の忍者で徳川の家臣として暗殺・スパイを中心に活躍した。

「そういえば貴方も属性馮位だったわね」

四奈は両手を刀に変化させる、そして構えて相手に走って行く、しかし一瞬で目の前から消えて後ろに現れる、殴ろうとしたが背中 of 辺りに岩を隆起させるがそれを碎いて四奈を殴り飛ばす、四奈は球

体を網のように広げて体を守る、しかし一瞬で四奈の目の前に半哉が現れ腹に一撃をいれる。

「ガハっ！！」

四奈は口から血を吐いて下に落ちる、腹を抱ながら起き上がると半哉は10mほど先で立っていた、四奈は体を球体で覆って回復する、半哉は四奈が回復するのを待つかのように腕を組んで眺めてる、四奈が球体を元に戻すと腕をブランと下に垂らす。

「終りか？」

「待っててくれたんだ、優しいのね、でも、それが命とりになるわよ」

「弱犬程良吠」

今度は半哉の方から走って来る、瞬きの間に目の前に来ていた、半哉は殴ろうとしたが四奈の球体が板状になってそれを防ぐ、そして四奈の球体が四方八方から飛んでくる、だが半哉にそれをかわすのは目を瞑って赤子を抱きながらも出来る、四奈は球体を半哉に降り注がせながら地面は足場が無いくらいに燃やし空からは氷の矢を降らせる、半哉は何とか足場にする地面の火を風で消して避ける事しかできない、四奈も今の状況を持続させるだけで精一杯だった。徐々にはあるが球体が半哉の体をかすり始めてきた、地面の炎も空から降る氷の矢も変わらない、そして半哉の腕に球体の一発が命中した、その瞬間体制を崩した半哉を球体が次々と襲う、まるで球体同士が半哉という球体をキャッチボールするかのように半哉を弾き飛ばす、そして四奈は地面トゲにしてそこに半哉を突き落とし全ての球体が上空から半哉を襲う。

「し、死んだ？」

半哉は四奈の期待を裏切るかのように立ち上がった、半哉の体は無傷とまではいかないがあれだけの攻撃を受けたにしてはキズが少なすぎる、半哉は空中で全ての球体をガードしていたのだ。

「甘いな、最後のトゲは効いたが他は大した事が無い」

「そうかしら？もしかして貴方ほどの人がこの状況にまだ気づいて無いのかしら？だとしたら私は過大評価を今後の課題にしくちなね」

「……………！！」

半哉は辺りを見回して気付いた、さっきの攻撃は全てフェイクであった、半哉の動きを封じているのが目的であった、そして半哉の動きを封じて得た結果は。

「……………増えてる」

球体の数が初期の3倍、4倍近くにまで膨れあがっている、そして球体は徐々に大きくなり、ある程度まで大きくなると二つに分かれる、それを繰り返して徐々に増えていっているのである、これが聖の属性馮位の能力である、風が瞬身ならば聖は増殖、長期戦になれば圧倒的に聖の方が有利なのだ、それを誘うために四奈はあえて単調な攻撃を仕掛けたのである。

「これだけ増えれば十分ね、これから貴方は私に指一本触れられないわよ、これが最大の防御であり最大の攻撃なの。聖なる審判」

球体の一つが大きくなりカプセル状に四奈を覆う、そして他の球体は半哉に襲いかかる、四奈は相手の攻撃を受けないばかりか攻撃を常に仕掛け続けられる、しかも球体は増え続ける、相手が死ぬまで続けられるまさに最強の技だ、しかし半哉はカプセルに近寄りそれに手をあてる。

「例え魂玉越しでも俺の攻撃はあたる、残念だったな」

「それは貴方の方よ」

四奈が笑うと半哉が触れてるカプセルの面が半哉の腕を掴んではなさない、そして次々球体が襲ってくる、半哉がいくらあがいても手は抜けず球体のサンドバッグ状態だ。

「クッ！仕方ない。……………グッ！」

半哉は風の刃で自分の肘から先を切断してその場を逃れる、カプセルに半哉の肘先だけが残っている、四奈は半哉の腕を落としてそのまま攻撃を続ける、しかし半哉もそれで終わる訳がない、半哉は残った左手を地面に突き刺す、そして次の瞬間四奈のカプセル内に力マイタチが起こり四奈がズタズタに斬られる、そして球体の攻撃もおさまる。

「ハアハア、これで終了だ」

「あ、ああ、痛い、やっぱり無理な、なのかな？」

「ハアハア、死ね」



半哉は四奈を空中に蹴り上げてそのまま空中で蹴り続ける、四奈はもう指を動かす力も残っていない、半哉は地上に降りると四奈の頭を掴んで持ち上げる、四奈は人形のように動かない。

「魂玉があるという事はまだ生きているのか、しぶといな、だが次で楽にしてやる、肉片一つ残らないくらいにな」

「……………け、経さま」

四奈が僅かな声を発した時に球体が半哉を弾き飛ばす、油断していた半哉は5mほど飛ばされたところで受け身を取る、半哉の目に入った光景は金色に輝く球体達と四奈、球体と四奈は強い光を放った、半哉はサングラスが壊れていたため目を反らした、次に目を開けた時には周りには四奈が大勢いた、どれもが全く同じな四奈だ、しかしそのどれもが動くこうとはしない、ただうつ向いて佇んでるだけだ。

「所詮この程度か、これくらいでなんだ。極・疾風刃」

半哉の属性攻撃は大きな風を起こして全ての物を切り裂いた、ベンチも木も外灯も看板も、しかし四奈達だけは全てが無傷だった、感情が無いハズの半哉が恐れを抱くほどだ、四奈達何も変わらず、何も動かず、何も感じない、まるでマネキンが立ってるようだった。

「ハアハア、有り得ん、ならば探せば良いだけ」

半哉は一つ一つを蹴りながら回った、本物がいたなら必ず吹き飛ばさず、半分以上蹴り疲れて一瞬動きが止まった時だった、半哉背中から誰かに抱きつかれた、そしてそこには四奈がいる、四奈の外側が剥がれて半哉を覆う、剥がれた後にはボロボロの四奈がいた、他の球体が半哉のくつつき大きな球体が出来た。

「こ、今度こそ私の勝ちね」

四奈は手を開いて前に突き出す、そして握ると同時に球体が縮み始めた、中からは骨が砕ける音と半哉の叫び声だけが聞こえる。

「グワアアア！し、死ねええええ」

「ギャハっ！！」

半哉の大きな叫び声と共に四奈の背中が大きく切り裂かれる、そしてその場に四奈は倒れた、球体は消えて中からはグチャグチャに原型を止めてない半哉が出てきた。

倒れて気を失ってる四奈の前に茶髪でパーマの男が現れる、その男の顔は険しく傷口を見るとそこに触れた。

「クソ痛いけど我慢しろ、生きる為だ」

当然四奈からの返答はない、男は四奈の傷口に触れて手でなぞると煙と共に傷口が焼けている、傷口を焼いて塞いだ、そして男は四奈を担いで移動した。

経達は四奈と半哉の反応が消えたのを確認した、そして違う誰かがそこにいることも、巴嘩はその場に泣き崩れた、経は頭を抱えてその場に座りこんでしまった、しかし気づくと遠くにあった反応が目の前にある、そこには茶髪のパーマの男が四奈を抱えて立っていた、

男は四奈をうつ伏せにそつと下ろす、下ろした瞬間経が胸ぐらを掴みかかる。

「テメエ四奈に何した！？テメエが四奈を殺したのか？」

「違う、それよりこんなかに回復系できる奴はいないのか？応急処置しかしてねえからクソヤバい状態には変わらねえよ」

「私がやる」

巴嘩は泣きながら四奈の回復をする、傷はどんどん癒えていき完全に無くなった、そして暫くまつと四奈が重たそうに起き上がった。

「うゝん。あれ？私生きてる？経さまに次郎君、巴嘩ちゃんと……」

「……」

四奈が視線を男にやると険しくなった、そして巴嘩の後ろに隠れて震え始めた。

「あ、貴方私を殺しに来たの！？もう私は信征とは関係ないの！だからお願い、見逃して！」

男は頭を思いっきりかきながらしかめつつらをする、そしてその場にアグラをかいて座り膝で頬杖つく。

「クソが、命の恩人に向かってそれは何だよ、あのクソ兄貴んとこるから脱走したならお前はもう敵じゃない」

「ってかお前誰だよ？」

「俺か？俺は龍奴<sup>りゅうつた</sup>、お前らが倒そうとしてるクソ信征の弟」

## 第十二陣

「俺は龍奴、お前らが倒そうとしてるクソ信征の弟」

四奈以外は目が点、目の前に敵の弟がいることに、しかもそいつが信征の敵であるはずの自分達の前にいること、しかも龍奴も適合者らしい。

「その弟が何のようだよ？」

「手を組もう、俺一人じゃさすがに殴りこみはキツイからさ」

「何で敵に寝返らなきゃいけないんだよ!？」

経が再び龍奴の胸ぐらを掴むと龍奴の頭には疑問符が浮かんでいる、恐らく大事な事を龍奴は忘れているのだろう、既に魂脈を速めて臨戦体勢の経を四奈が止める、次郎と巴嘯は何となく気付いていたらしく傍観者の立場だ。

「経さま辞めて、龍奴は少なくとも経さま達の味方だよ。龍奴は信征達の計画を阻止するタメに一人で動いてるの、私も何回か戦った事があるの」

経は突き飛ばすように手を離れた、そして龍奴は乱れた服を整えてイライラした感じで頭をかいた。

「俺の両親はあのクソ信征に殺された、両親も適合者だったから邪魔だったんだろ、でも俺は両親を見捨てて逃げた、アイツは俺の事なんて気にもしてなかったんだと思う、その時はまだ普通の人間だ

「ったからな」

「まあ、龍奴君が信征が恨んでるのは分かった、でもその計画ってのは何だよ？」

次郎は吸ってたタバコを地面に落として足で踏み消して言った。

「アイツのクソ計画は日本の陥落だ、今の日本を潰して自分達の国を作るらしい、そのタメに集まった適合者はそこにいるお嬢ちゃん以上の奴らが少なくとも信征を入れて8人はいる、それに雑魚が大勢、雑魚だけでも日本は潰せるだろう、それで今までに俺が殺したのが3人、今日半哉が死んでお前らが武志を殺した、戦力は確実に落ちてるはずだ」

経達が思っていた規模より大きかったらしい、次郎はタバコに火を付けてため息混じりの煙を吐いた、経は頭をフル回転させて出た結果が敵は強い、それだけだ、例え雑魚と言えども適合者だ、日本の自衛隊が全勢力を使っても20人も集まれば壊滅だろう、四奈より強い相手だった場合は原爆を落とさない限りは倒せないだろう、それくらい適合者とは強大な者なのだ、龍奴の情報からいくとそれだけの勢力があれば世界をも掌握出来るだろう。

「でも何でそんな事するんだよ？別にそんなめんどくさい事しなくてもいいと思うんだけど？」

「それが信征って奴だよ、今の王は信征だ、それを世界中に知らしめたいんだろ、名実共に王にならないと気が済まないクソみたいな質なんだよ。そこでお前の登場だ」

経の方を指を指して言った、経は王になると予言を受けた適合者だ、

二つの魂玉の適合者がそれを裏付けている。

「君……、経が邪魔だと俺は推理してる、だから俺は君達に近付いた、もうすぐ信征の使いが君達に攻撃を仕掛けて来ると思うよ、俺も狙われてるし一網打尽に出来るチャンスだろ」

「それって私達も戦いに巻き込まれてるんだよね？」

巴嘩が急に入ってくる、経が狙われる理由は分かる、龍奴が追われる理由も分かる、四奈が狙われる理由も分かる、しかしその流れでいくと次郎と巴嘩も必然的に巻き込まれる事になる。

「嫌かい？」

「何か良いように使われてるような感じがする」

「なら逃げろよ、俺は嫌な奴を引き込む気はない、覚悟が無い奴はクソ以下だ」

巴嘩は怒りを巻き散らしながら龍奴の前に行って下から上目使いに龍奴を睨んだ、龍奴は相変わらずの無愛想で巴嘩を睨む。

「私は私の意志で戦う、貴方が何をしようが関係ないわ、あの変態を殺してその親玉も殺す、道が交わってる、ただそれだけよ」

最後に笑って四奈の元に向かう、四奈と巴嘩は笑ってコンタクトをとった、龍奴は女性には評判が最悪らしい。

「後、俺家が無いから経の家に住むから」

「はあ！？何でお前が家に来るんだよ？」

「まあ良いだろ、龍奴君がいてマイナスになるのは性格だけだ、即戦力になりそうだし置いとくだけ得だろ？」

「話が速いね、次郎とは気が合いそうだね」

「なんならこれから飲んで語り明かす？」

「It's nice！じゃあ居酒屋でも行くか」

二人は肩を組んでどこかに行った、次郎は未成年だし龍奴も恐らく未成年だろう、それが普通に飲み会に行く光景に経は呆れていた。

経と巴嘸と四奈は家に帰ると一瞬で修羅場と化した、それは経が四奈を送り出す時に言った一言だった、経は冗談のつもりだったらしいが四奈は本気にしたらしい。

「経さま！これから愛の契を！私はもう子供じゃないのよ、それくらい体験したい年頃よ！」

「たたた、タイム！無理だつて！四奈が良くても俺が良くないから」

「大丈夫よ、マグロでも私がリードしてあげるから、何も気にする事は無いわよ」

「経ちゃん、不純ね」



巴嘩は表向きでは笑ってるが殺気は本物だった、経は片方は逆セクハラ、片方は般若の両手に地獄の状態だった、そして襟元を掴まれて騒ぐ経を無理矢理連れて行ったのは四奈の方だった、半分泣きながら無理矢理四奈の部屋に押し込まれて鍵が閉まった、ドアを何度叩きながら般若を頼った時の自分を想像して、経はマグロの道を選んだ、そして四奈はベッドに座って経は諦めてその場にあぐらをかいて頬杖ついた。

「経さま、私からのお願い、信征を殺して経さまが王様になって、私ずっと信征を見て怖かったの、アイツがしようとしてる事は血も涙も無い事、だから経さまに止めて欲しいの、純血を捧げるのはそれから！」

経は内心信征を倒したく無くなったけどそんな理由で手を退けるほど小さい事では無い、経は四奈の近くに行って頭に手を置いた、四奈は肩をすくめて目を瞑った。

「約束するよ、信征を倒すのだけな、他は却下だけど」

四奈は笑いながら扉を開けた、その瞬間勢い良く開いて巴嘩が入ってきた。

「経ちゃん！」

「巴嘩！？何もしてないから、信じてくれよ、なあ？四奈も何か行つて言ってくれよ」

巴嘩は経に馬乗りになって経の胸ぐらを掴む、そしてそのまま視線を四奈にやる。

「経さま、忘れないからね、ベッドで私の頭に置きながら囁いてくれたあの言葉」

「経ちゃん？」

「おい四奈！誤解を招くような言い回しするな」

四奈はそのままスキップをしながら部屋を出た、経から巴嘩の顔は逆光で見えない、でも上から落ちてきた雫で何となく表情は推測出来た。

「巴嘩……………」

「私も四奈と同じだよ、信征の事は任した、私達は経ちゃんのサポートするから。……………でも死なないで、経ちゃんに死なれたら私、私……………！」

巴嘩が気付いた時には巴嘩は経に抱き締められていた、それに抵抗どころか身を委ねていた、経の心臓の音が聞こえるくらいに。

「死さないよ、みんなで生きてるためにやってるんだから、誰も死なせない、当然巴嘩も死なせない、強くなるから」

「……………グスン」

経を下に胸を枕の用にして静かに泣いた。

深夜3時、酒に吞まれた次郎と龍奴が帰ってきた。

### 第十三陣

森の中に一つの大きな屋敷、そこだけ拓けてて静かだ、屋敷というのは表向きだけで地下をカモフラージュするための罫である、屋敷は信征達の居住区となっていてかつては四奈もココに済んでいた、地下は大きな実験場などが数々ある、全て合わしたらテーマパークくらいはスッポリ入る大きさだ。

玉座に銀髪の髪を立たせてメガネを付けた男が頬杖を付きながら座っていた、隣には細身で日本人離れした美しい女性が立っていた、そこは大広間のようになっており真ん中に和服に眼帯を付けて長い黒髪を簪で留めた和美人が一人、岩の上で寝ているこちらも眼帯を付けた四奈とさほど変わらない大きさで目付きが悪く髪の毛の後頭部で束ねた少女が一人、端の方には歳那と勇治と小さく幼い顔立ちに前髪を上の方で結んだ少年が一人、逆端にはガタイの良い優しそうな顔をした男が一人落ち着きなく歩き回っている、そして扉を勢い良く開けて入って来たのは普通にみたら女性のような青年だった。

「信征様すみません！ちょっと迷っちゃって」

青年は笑いつて頭を掻きながら言った、そして玉座の男を信征と読んだ、信征は顔色一つ変えずに青年を見た。

「誰か蘭に道案内してやれ」

「てへっ！」

青年こと蘭は片目を閉じて舌を出した、そして真ん中にある和美人の隣に膝を抱えて座って和美人を見上げた。

「十子<sup>じゅうし</sup>さん、まだ終わって無いよね？」

「ギリギリどすな」

「毎回毎回遅いんだよ！待たされてるこっちの身にもなれってんだ、この馬鹿蘭が！」

眼帯を付けた少女が天井を眺めたまま罵声を浴びせる、蘭は笑いながら眼帯の少女の所まで行って覗きこんだ。

「女の子なんだから口はおしとやかにだよ、正音<sup>まさね</sup>ちゃん。そんな悪い子ちゃんの口にはチューしちゃうよ」

「拒否する」

正音は蘭を突き飛ばした、蘭は渋々十子の隣に座った、二人は顔を合わせて笑った、そして信征は合わせた手に顎を乗せた。

「半哉が死んだ」

全員の顔が険しくなったのに蘭と幼い少年だけは笑顔を崩さない、二人は緊張感というものを持参して来なかったらしい。

「殺した相手は四奈だ、追って行ったら返り討ちにされたらしい、なんとも愚かだ」

「キャハっ！四奈ちゃんが勝ったんだ、強くなったね」

蘭が一人で手を叩きながら騒いでる、周りはそれを気にしないでい

る。

「四奈は敵に回った、敵とは武志を倒した次郎、そして巴嘩なるものと……………、経だ」

その言葉に歳那と勇治が笑った、幼い少年は二人が興奮してるのを不思議そうな顔で眺めた、二人はあの時の戦いを思い出していた。

「どうしたのお？二人とも楽しそう」

「あの時総羅はいなかったからな、アイツ俺らの前から人一人抱えて逃げやがった！」

「しかも巴嘩さんは美しい、今は更に美しくなってることでしょう、楽しみですね」

二人の思い出話をつまんなそうに聞いている総羅、自分で聞いたという飽きるところが子供だ、信征はその三人を見て一言言った。

「お前ら行くか？アイツらを殺しに？」

「本当ですか？私は行きたいですね」

「俺も当然行くぞ！総羅も来い、アイツら絶対に強くなってる」

「分かったよお、行けば良いんでしょ、行けば」

総羅はムスツとした顔でふてくされなが了承した、そして三人は亀裂の中に消えて行った。

「我らの目的は日本の陥落だ、それに邪魔な障害は全て排除する」

「ねえねえ信征様、僕達のグループに何で名前付けないの？」

「そんなもの必要ない、名前はそれらを拘束する枷でしかない、心同じ者達は心をつつだけで足りる」

「何だかよく分からないけど分かった」

そういつて蘭は広間を出た、優しそうな男もゆつくりと出ていった、十子は信征に一礼してカタツカタツと下駄の音をたてながら出ていくと同時に正音が消えた、残されたの信征と女性だけだった、女性は笑って信征を見た。

「信征様、私達の未来は明るいですよね？」

「秀美は何も気にする事はない、私が創る世界は私と秀美の世界だ、今が地獄と感ずるくらいに明るいだろう」

「嬉しい」

二人はキスをしてその場から消えた。

龍奴は四奈から色々な情報を仕入れていた、外から調べた情報よりも内側にいた者からの情報の方が圧倒的に確かである、経と巴嘩は聞いても意味が無いのでテレビを見てる、次郎はタバコを吸いながら雑誌を読んでいる、5人が思い思いの時間を過ごしていると強い適合者の反応を三つ感じた、経と巴嘩が一番強い反応をしめした。

「勇治!？」

「あの変態野郎」

「もう一人は総羅みたいね」

四奈が苦笑して言う、経と巴嘩はすぐに立ち上がって部屋を出た、その時強い異端の反応も感じた、後ろから次郎が追ってきた。

「相手は三人だ、俺も行く」

「じゃあ私と龍奴が異端退治してくるよ、良いわよね、龍奴？」

「クソめんどくさいけどしょうがねえ、適合者達はお前らに任した」

5人は外に出て各々の向かう先に消えた。

龍奴と四奈は河川敷まで来ていた、そこには通常より一回り大きい異端が100体近くいた、龍奴はめんどくさそうに魂脈の流れを速



めた。

「龍馬、砲芒火彌」

龍奴の腰には二挺のリボルバータイプの拳銃があった、拳銃タイプの魂玉は真つ赤に燃えてるように見える、それを両手に構えた。坂本龍馬、幕末に開国を論じた剣客、時代を見通して常に先端をいつていた、当時の幕府にとっては厄介な存在だった、宿で休んでいるときに暗殺された、暗殺したのは見廻り組が最有力といわれている。

「四奈、手出しは無用だからな」

「最初からそのつもりよ」

「H A H A！異端ども、俺の前に出てきたこと後悔するんだな！ Good bay」

龍奴はマシンガンのような勢いで火の弾を五月雨のように撃ち込む、龍奴は狂ったように打ち続けた。

「The end……、じゃねえのかよ、何だよ半分しか死んでねえよ、めんどせえな」

龍奴は魂脈を逆回転させて地面に手を付いた。

「溶岩泉」

異端の足元が溶岩となって異端が吸い込まれていく、気付いたら白い蒸気だけがその場に漂ってた、龍奴は銃口に息を吹きかけると口

から火が出た。

「See you next timeって言っても次は無いか」

「じゃあ帰ろう」

四奈がそういつて帰ろうとした時だった、橋の上の空間に亀裂が入ってそこから銀髪メガネをかけた男と美しい女性が出てきた、龍奴と四奈の顔は一瞬で険しくなった。

「信征！！？」

龍奴は気付いたらいなくなっていて信征と秀美の後頭部に銃口を押し付けていた、しかし二人は顔色一つ変えないで信征は龍奴を見た。

「愚かな弟までいたとは、計算外だった」

「クソが、今お前に選ぶ義務をやる、Heaven or Hell、さあ選べ」

「その選択肢は却下だな、お前に私は殺せない」

「クッ！」

四奈と龍奴は体が重くなってその場に倒れた、体に何か重い物がのしかかって動けなくなった、しかし信征に二人を殺す気は無いらしい、そのまま去って行った。

「時期に楽になる、それまでそこでひれ伏せ」

「クソが！H e y！俺と戦え！」

信征と秀美はゆつくと歩いて行った、亀裂に入るでもなく高速移動をするでもなく、普通の人間と同じように歩いて行った、龍奴と四奈はそれを見つめる事しかできなかった。

## 第十四陣

経と巴嘯と次郎は始めに歳那と勇治と戦った空き地にいた、そこには歳那と勇治ともう一人小さな少年がいた、少年は人指し指をくわえて辺りを見回していた、その光景に経は力が抜けて速めてた魂脈を元に戻してしまった、呆れたように経は少年を見てると目の前に歳那と勇治がいた、経は不覚にも尻餅をついてしまった。

「経、緊張感を持とうよ、死ぬよ」

「だってあのガキ見たら誰でも呆れるだろ、ココは戦場だぞ、そこにガキってさあ」

「僕はガキじゃ……………」

「ガキだな」

少年こと総羅が経の前に行った瞬間、経が消えて総羅に肩を組んでいた、その場にいたもので反応出来たのは油断故に誰一人としていなかった。

「ム力つく、僕、こいつ殺す」

「おいちよつと待て！経は俺の獲物だぞ、いくら総羅でもそれは出来ねえ！」

「僕が殺す！！」

総羅の魂脈が一瞬で速まる、経はその魂脈に緊張感を取り戻した、

もしかしたら経が今までに戦った中で一番強い敵かもしれない、そしてそこにいる全員の魂脈の流れが速まる。

「総司、三炎天鵲」  
さんえんてんぶ

総羅は真つ赤な刀を右手で引きずりながら持っていた、刀身には炎の模様が彫られていてそれが本物の炎のように揺らめいている。

沖田総司、新選組の若き天才剣士、新選組で一番隊の隊長を勤めて組を引っ張った、若くして肺結核に侵されて病死。

「義経！疾風双刃！」

「巴！枯葉魅刃！」

「小次郎！神清氷刃！」

「勇！状態白虎！」

経達は手に武器を握り勇治は虎に近付いた、しかし歳那の魂脈の流れが前回のものとは違う、装備型の魂脈の流れではなくこれは……。

「歳三さん、我の水刃となりて敵を美しく散らせ、目の前に立ちばかる醜き肢体を華麗なる水氷が蒼く染めるだろう。属性馮位、水の輪廻」  
すいひょう

歳那の足元は水浸しになる、前回巴嘩が目にしたのは装備型だった、しかし目の前の歳那は誰が見ても属性馮位型、詠唱をした事からそれは否めないだろう。

「巴嘩さん、不思議そうな顔をしていますね、これでどうですか？トリックが見えましたか？」

歳那の右手に水で出来た刀が現れた、その瞬間巴嘩は左手を頭に置いてため息をついた、そして殺気を発して歳那を睨んだ。

「騙したわね」

「相手に手の内を見せる時は相手を殺す時です、あの時は偵察だったタメに最初から開放してたんですよ、まだ弱かった貴方達は気付きませんでしたけどね」

笑いながら歳那は巴嘩を見た、巴嘩は経に愚痴を聞いて貰おうと思っただが経も次郎も消えていた、そして全ての矛先が歳那に向かった。

「イライラするわね、貴方、ココで死ぬわよ」

「それも一興ですね、美しくなった巴嘩さんに殺されるなら………、やっぱり嫌ですね、これだけ美しい人は人形にしなければ」

「一々話が長いわね、そんなに喋りたいなら閻魔様に聞いて貰いなさいよ！！」

巴嘩は歳那に右から斬りかかった、歳那は左手に水を物凄い圧力で貯めて防いだ、巴嘩はそのまま左から蹴るが歳那は水となって消えた、歳那は巴嘩の後ろに現れて水が渦巻いてる足で蹴る、巴嘩は草を出してクッションにした。

「また力が増しましたね」

「うるさいわねえ、貴方なんて串刺しになっちゃえば良いのよ」

巴嘩が服の埃を落としながら言う。歳那の足元から木の根が槍のよう突き出して来た、歳那は上空に逃げたがそこには巴嘩がいた。

「セクハラのお礼よ！」

「なっ！？グハッ！」

巴嘩は歳那を思いつきり殴った、歳那は勢い良く落ちるが下に池を作って勢いを殺す、池の中から歳那の手が出てきた、その瞬間上空から氷の矢が降ってきた、とても避けられるような量ではない、巴嘩は魂玉で弾いたがいくつか体に当たった、受け身のとれないまま地面に叩きつけられた、埃とともに血が飛び散る。

「アハッ！」

「少し傷付けてしまいましたがそれくらいはしょうがないですね、少し力だしますよ！」

巴嘩はフラフラになりながら立ち上がると歳那は既に目の前にいた、歳那は素早く殴る、腕に水が渦巻いているために威力が強い、巴嘩は手も足も出せない、しかし巴嘩は体を後ろに反らせて相手の攻撃を目で捉えた瞬間腕を持って下に叩き付ける。

「ガハッ！」

「痛いわね、レディーを殴るなんて」

巴嘩は体を葉で覆い癒す、ある程度癒したところで歳那を見るがそ

ここにはいなかった、後ろを見ると後ろに歳那がいた、歳那の体の周りには水が渦巻いていた。

「少し手を抜き過ぎましたね、相手に失礼ですよね」

「それなら私もね」

歳那は驚いたような表情を浮かべて巴嘩を見る、巴嘩は魂玉を一旦戻して魂脈を速める、その瞬間巴嘩の足元が草花で囲まれた、そしてそれが風で舞い上がると巴嘩の手の周りに桜の花びらが舞始める、徐々に細長く渦を巻き始めて魂脈の流れが速まる。

「巴！魂玉段階式、枯雀桜刃！」

巴嘩の右手には桜色の刃が花のように円を描いている、柄は桜の木の枝の模様で見ても美しい魂玉だ、歳那はそれを見て口を開けて拍手をした、巴嘩は構えた。

「貴方はココで終りね」

「なんとも美しい魂玉ですね、桜の花が咲いたようだ、………  
…次は散る番ですね」

歳那が手を前に差し出すと巴嘩の足元に水が渦巻き始めた、そして水が柱のように渦巻いて巴嘩を取り囲む、しかし水の柱から巴嘩の魂玉が突き出し、横薙に払うと水が消えた、巴嘩が一步踏み出した瞬間に足元から無数の根の槍が出てきた、歳那は巴嘩に注意をしなから跳び上がる、しかし巴嘩は動かずに根の槍が伸びてきて歳那を襲う、根の槍が歳那に触れようとすると水に触れて凍って砕ける、だが根の槍が納まるところを知らずに歳那を追いつける、一本の根



が歳那の足に絡まると生きてるかのように歳那を地面に叩きつける、他の根の檜は歳那目がけて突き刺しにする。

「まだ生きてるんでしょ」

「分かりましたか？」

根がどんどん腐食していき崩れ落ちた、そこからは埃まみれの歳那が出てくる、歳那の周りに水が渦巻き埃は流れた。

「強くなりましたね、しかしまだまだ私には到底及びません」

歳那が魂玉の流れを速めると冷氣が辺りにたちこめる。

「凍えし五月雨」

巴嘩は氷の矢に包囲されていた、横も前も後ろも上空も全てに矢があり逃げ場がない、しかし巴嘩はその中でも顔色一つ変えずにそれらを見渡す。

「降り注げ」

歳那の合図と共に氷の矢が降り注ぐ、それら全てが巴嘩に刺さった、一本も逃す事なく、出芽した巴嘩に、本物の巴嘩がパチンと指を鳴らすと巴嘩達は桜の花びらと化して消えた、氷の矢は地面に落ち、桜の花びらは舞い上がる、辺り一面に桜が舞乱れ地面染める。

「ああ、美しい、巴嘩さんは私を全てにおいて満足させてくれます、最高に楽しいですよ」

「別に貴方を満足させるタメにやってる訳じゃないわよ、貴方を殺すタメにやってるの、死に目くらいは美しい方が良いでしょう？」

「私が死ぬですって？有り得ませんね、これくらいで死んでいたら信征様に申し訳ない」

「なら今のうちに謝つときなさいよ、跡形もなく殺してあげるから」

そういうと巴嘩は魂玉を地面に突き刺した、そして地面に完全に押し込んだ瞬間だった、辺り一面の地面から巴嘩の魂玉が出てきた、歳那はギリギリのところで横に避けて無傷に終わった、そして高々に笑う。

「これで私を殺すですって！？笑わせないで下さい、もしかして笑い死につて事ですか！？だとしたら私は危ないですね！」

「笑い死にも良いかもね、でもこれで終りな訳無いでしょ。舞散れ、花達よ！」

巴嘩が地面に手を触れて叫ぶと魂玉の刃が舞散り空へと舞い上がる、そして巴嘩が立ち上がり、両手を前に出して手を広げる。

「桜の花びら達よ、その桜色の美しい身を、朱に染めよ！桜吹雪・阿修羅の舞！」

桜の刃は歳那目がけて一斉に飛んでくる、歳那は避けきれないと判断したのか渦で体を守る、いくつか弾き落としたが水を切り裂き歳那の体も切り裂く、そして渦が無くなり歳那が姿を現すと地面に落ちた桜の刃が歳那を襲う、歳那は肩膝についてその場に倒れた、歳那の周りは血の付いた刃が散っていて真っ赤だ、巴嘩は近くにあっ

た柄を掴むとそれ以外は消えた、巴嘩の持った柄には刃が生えて来た。

「これで死んだでしょ、綺麗に死ねて良かったわね」

巴嘩は歳那に背を向けて帰ろうとした時だった、背中に衝撃が走りそこから血が吹き出す、何かと思って後ろを見ると歳那がフラフラになりながら立ち上がった。

「貴方は……………、私の逆鱗に、ふ、触れました、死んで、貰います、……………跡形もなく」

「……………えっ？……………な、何で、立てるの？」

その瞬間歳那の魂脈の流れがさっきの倍以上になり周りが冷気で包まれた、そして歳那がゆっくり巴嘩に向かって歩いて来た、巴嘩が構えた瞬間に地面から氷の刺が一本出てきて巴嘩の右肩を貫いた、氷が消えて傷口から血が溢れてきた、巴嘩は魂脈を木の根で手に巻き付けと左手で傷口を押さえた。

再び刺が突きだし今度は左足太股を貫く、肩膝について息を荒くしてる巴嘩の右の脇腹を刺が貫く、そして巴嘩は力無くその場に倒れた、地面は血で朱に染まり巴嘩の呼吸は弱々しくなっていた。

歳那が巴嘩に10m程の所にまで歩いて来た時だった、黒い大きな球体が現れるでそれが弾け飛ぶと中からは信征出てきた、信征は巴嘩を見た後に歳那を見る。

「撤収だ、アイツらが帰って来た」

「信征様！せめて巴嘩さんを殺してからでも！」

「私に逆らうのか？」

信征が殺気のこもった声で静かに言った、歳那は肩をすくめて後退する、信征は巴嘩を見下した。

「それにこのままでもコイツは死ぬ、もしくはもう死んでるかもな」

信征がそついうと歳那は亀裂に消えて行った、信征は移動して目の前から消える、巴嘩は体から流れる血の量に死を感じた。

「……………助かった……………の、かな？……………」

## 第十五陣

次郎は勇治の突進を受けて吹っ飛んだ、ダメージは殆ど無いが防いだ時に魂玉で防いだタメに手が痺れていた、勇治が歩いて来た後は爪の跡がくつきりと残っている、重量があるのもあるがその爪の鋭さに次郎は身震いした、飛ばされてる最中に口からタバコを落としたためタバコに火をつけて煙を吐き出す、そして口にくわえて構えた、勇治も構えた瞬間に勇治の下から氷の柱が出てきて勇治を突き上げる、勇治の重くなった体すらも軽々と浮き上がらせて次郎は空中で斬りかかる、しかし勇治はあっさりと魂玉をくわえて次郎を下に叩き落とす、次郎は着地して上を見ると勇治が爪を剥き出しにして落下してきた、何とか横に避けた次郎は再び構える。

「でかくて重いくせに軽々と動くもんだな」

「それが白虎つてもんよ！本気出せよ、死ぬからな！」

勇治物凄いスピードで突進してきた、次郎は自分の間合いに勇治が入った瞬間に素早く上段から斬りつける、勇治はギリギリで避けるが次郎が下まで振り抜いた瞬間次は下段からの素早い切上げで勇治の頬にかする、勇治は地面を叩き次郎の頭の上を通って5m程先に着地する。

「なんだよ惜しいな、燕返しを避けるなんてなかなかやるね」

「いやあ！焦った焦った、あの間合いからあれだけ素早い攻撃をされたら避けきれねえ！」

「初撃を避けただけでも立派だよ、次は外さないけどね」

「おう！そうだな、次はねえんだから外すも外さないもねえな！」

「口だけは達者だね」

次郎は構えて勇治に突っ込んだ、次郎の周りからは水弾が発射され、勇治に襲いかかる、しかし勇治はその全てを前足で消しきった、だが目の前は先程の水弾の霧で視界が悪くなっている、霧を引き裂いて最初に勇治の目に入ったのは次郎の魂玉の切っ先だった、勇治は間一髪のところでは後に避けるがすぐに次郎が間合いをつめる、次郎の連撃に防戦一方の勇治、次郎の大きな間合いとその魂玉の長さを感じさせない素早い斬撃に勇治は圧され気味だった、それに追い討ちをかけるように次郎の水弾の雨が降り注ぐ、勇治は前足・後ろ足・口・尻尾を使ってなんとか避けてるようにも見えた、しかし先程から勇治の顔色は何一つ変わらず不敵な笑を浮かべてる、まるで攻撃させてやっていると云わんばかりだ。

「もつとだ！もつと楽しませろよ！残り物には福があるんだろ！？」

「さあね、お前にとっての福が何を表すのかが分からないし」

次郎は更に斬撃を速めて勇治を追い込む、それだけではなく今までは水弾だったものを氷塊に変え防御時に加わる衝撃度を増やした、それによって若干の隙が出来る事を次郎は望んだ、しかしその僅かな望みはことごとく氷塊と同じように打ち砕かれる、勇治は顔色一つ変えずに全てを防ぎきる、次郎はこのままでは埒があかない事に気付いた、時既に遅し、次郎の魂玉は目の前にある岩壁にめり込んで動かなくなっている、その岩壁を打ち砕いて砂塵と共に勇治が飛び出して来て次郎の左肩に噛みつきそのまま投げ飛ばした、次郎はサッカーボールのようにバウンドしながら木に当たり停止する、暫

くして土煙の中から左肩を魂玉を持った右手で押さえてる次郎が出てきた、左手から血が流れ出して次郎が歩いた所に線を残している、次郎は苦悶の表情で左肩を凍らす、そしてポケットからタバコを取り出して加えて火をつける。

「今のはヤバかったな、でもまあ、何とか動くし、どうにかなるでしょ」

「お気楽な奴だな！気付いたら死んでるぞ、気を付けろ！」

「忠告ありがとね、でもどっちかって言ったら死ぬよりは殺す方が好きだから、あつ、殺人鬼とかその類じゃないよ、死ぬよりはマシって事」

勇治は大声をあげながら大笑いをした、人の図太い声にも、虎の雄叫びにも似た大きな声で、それにビックリして次郎はタバコを落としそうになった。

「確かに！100人中95人はそう答えるだろうな！」

「後の5人は？」

「自殺志願者だな」

「おお！なんかお前とは気が合いそうだな、味方だったら良かったのに」

「そうだな、地獄で飲み明かそうぜ！どちらが地獄で待つかは……  
………」

「弱い奴だね」

勇治は笑いながら構えた、純粹に戦いを楽しんでるのもあるが、良い敵に巡り会えた満足感が大半を占めている。

次郎は魂玉を戻すと更に魂脈の流れを速めた、その流れを感じて更に勇治は笑いが止まらない、辺り一面に冷気が立ち込めて次郎の足下は凍り始めた、次郎の背中には大きな氷の塊が出来た、魂脈の流れが最高潮に達した時に氷の塊が弾けとぶ。

「小次郎！魂玉段階式、神牙凍刃！」

次郎の背中には鐔つばから伸びた二つの刀が切っ先で一つにした猫の瞳の様な刀があった、それを見て勇治は地面を揺らしながら興奮した、次郎は刀を鐔から切っ先にかけて触れると猫の瞳の穴の部分に液体窒素が溜まる。

「おお！スゲエじゃねえか！これ以上に俺を楽しませてくれるのか！？」

「まあ、飲み会は信征を倒してからな、それまで待っててくれよ、地獄でな」

次郎は燕返しをした、二つの窒素の刃が勇治に向かって飛んで行く、勇治は地面から岩壁を出して防ぐが全てを防ぎきれずに岩壁が碎けた、碎けた岩壁の向こう側からもう一つ窒素の刃が飛んできて避けきれずに尻尾に当たり尻尾が凍った。

「グッ、グアアアア！………なあってな」

勇治は苦しんだフリをしていた、尻尾は剥がれ落ちて新たな尻尾が



現れる、それは新たな尻尾ではなく外に土を塗って鎧としていたのだ、勇治が大きな声で吠えたと体の周りあった土の鎧が剥がれ落ちた、次郎の顔がひきつって魂玉を握る手に力が入る。

「それだけのハンディアンカー付けてアレだけのスピードかよ、これはマジでヤバめだな」

「さあて、ちよいと力出すぞ！気を付けろ！」

勇治が姿勢を低くした瞬間次郎の視界から勇治が消えた、気付いた時には後ろにいて魂玉を振って攻撃をしようとするが当たらない、当たらないどころか右肩に爪がかすった跡がある、傷に気付いた時には次郎は勇治に後ろから突進されて飛ばされていた、とっさに水のクッションを作り防いだがダメージは大きい、次郎は立ち上がり勇治の方を見ると勇治が見当たらない、次郎は右足を軸に回転して円形に窒素の刃を放つ、そして上を見ると勇治がいた、勇治めがけて再び窒素の刃を放つ、勇治は前足で弾いたが僅かに付着した窒素により所々火傷を負った。

「俺も本気出すからな、お前も本気出さないと気付いたら凍ってるよ」

「何だか俺が本気を出してるみたいな言い様だな！？」

「本気だろ？」

「そんなに俺の本気が見たいなら見せてやるよ！ただし、記憶に残る前に殺すかな」

勇治の魂脈の流れが一気に速まる、そして体中の毛が金色に染まっ

ていく、そして唸る様に鳴くと大きな声で吠えた。

「勇！状態麒麟！」

勇治の体が大きくなり牙は剥き出しとなった、角も生えていて金色の毛に長い手足、まるで馬のような風貌だが筋肉が異常だ、体は麒麟そのものだった、現代に生きるキリンではなく神獣の麒麟だ。

「……………デケエ、でも動きは更に鈍くなったんじゃないの？」

「試してみるか？」

地に響くような声だが美しい、まるで心に話しかけてくるような声だった、勇治は軽く体を沈ました瞬間に消えて次郎の後ろに現れた、前足で軽く薙払うと次郎は勢いよく吹っ飛んだ、木を何本か折つてやっと止まった、痛む体を無理矢理起き上がらせて魂玉を握るが力が入ってない。

「次で終わりだ、言い残す事はねえか？」

「芋焼酎が飲みてえな」

「残念だがそれには答えられねえな、持ち合わせてない」

「なら、ココでお前を殺して買いに行くよ」

次郎は圧倒的な力の差を感じていた、立っただけでもやつとだ、魂玉を握ってるだけでも賞賛に値する、次郎が気付いた時には次郎の体は宙に舞っていた、勇治に口で投げられたのだ、勇治は大きな口を開けて次郎の落下地点にいた、次郎に体を動かす力も残ってなく

手に握っていたハズの魂玉は消えていた。

「そこまでです！」

「……………！」

勇治がよそ見をしたお陰で次郎は地面に叩き付けられた、次郎はその場に人形のように横たわったままピクリとも動かない、勇治の目線の先には秀美が立っていた。

「信征様からの命令です、今すぐに帰還せよとの事」

勇治は次郎を見て状態を解除して人間に戻った、そして次郎を蹴り飛ばして亀裂の中に消えて行った、秀美は動かない次郎を見て近寄り次郎の頬に手をあてる。

「綺麗な顔だったのに、私達に戦いを挑んだのがそもそもの間違いだったよね」

秀美は立ち上がり亀裂に入って行った、一人取り残された次郎は意識が混濁するなかでこれ以上ない死への実感を感じていた、そして次郎の瞼は落ちたまま開かなくなった。

## 第十六陣

総羅は経を連れて歩いていて、今の総羅に殺気はなく経はそれに不安すら感じていた、警戒しながら後ろについていく経を後目に総羅はスキップをしている、総羅が歩いた後には刀を引きずった跡がずつと残っている。

「おい、いつまで歩いてるつもりだよ？戦わないんなら他の奴らの加勢に行きたいんだけど」

「ダメ、君は僕と戦うの、ここら辺は木が多いから後でめんどくさい」

総羅はなおも歩き続ける、そして何も無い拓けた所に来ると立ち止まって経の方に振り返った、その瞬間に強い殺気を放つ、総羅の顔色は何一つ変わらないがその殺気と魂脈の速さはかなりのものだ。

「やっとヤル気になった？」

「僕強いよ、怖かったら逃げな、あの二人と違って手加減はしない、相手の力量を測る気もない、強ければそれで良い」

「残念だな、お前が楽しむ暇もなく殺してやるよ、俺は女子供でも容赦はしないからな」

経が右手の刀を肩に置いて爪先で地面を叩いてると総羅が飛び込んできた、経は右足を総羅の顔に突き出すが総羅は身を屈めて避ける、総羅は経の左足を斬ろうとするが経の左足は弧を描いて総羅の顎を捕える、総羅は吹っ飛び経はバック宙をして再び同じ体制に戻った、

経は起き上がった総羅の顔を蹴り飛ばす、しかし今度は総羅も受け身をとるがそこには経の姿は無かった、気付いた時には背中に強い衝撃が走り体が飛んでいた。

「お前弱いな、それで楽しませろだ？それはこっちのセリフだったの」

総羅は体の埃を叩きながら立ち上がった、その顔に笑顔は消えて怒りが滲出ている。

「君ホントにム力つくね、少し僕が油断したから調子のっちゃって、もう許さない」

「お前まだ気付いてないの？さっきから魂玉で攻撃してないんだけど、それに最初以外は魂玉すら持っていないし、まともに着いてる足は左足だけ、10%も力を出してないから、魂玉で攻撃したらお前は今頃サイコロステーキになってるな。……………分かったらアンクル外せよ、人をなめ腐るのもいい加減にしろ」

経が低い声で総羅を威嚇すると総羅は高い声で笑い始めた、経は怒りにも似た感情が沸き上がってきた。

「なんだ、気付いてたんだ、何時頃から？最初に蹴った時？」

「俺をナメるな、お前が歩いてる時からだ、スキップしてる時に体が重かった、蹴った時の感覚からいって20kgは着けてるだろ？」

「残念だね、25kgだよ」

総羅が体に着いているアンクルを外していく、全て外し終わった時

には体が一回り細くなっていた、そして最後に靴を脱いで裸足になる。

「別に靴に重りは着いてないだろ？」

「うるさいな、僕がそうしたいんだから良いだろ。それより、君魂玉持って無いね、今の僕の攻撃はさっきの攻撃とは比にならないスピードだよ、手加減を知らないって言ったよね？」

総羅が経に向かって走って来る、総羅の斬撃を全て避けるが全てがギリギリだ、経の顔色は全く変わらずに避け続ける、総羅は素早く突くと何故かあるはずの無い魂玉によって防がれた、総羅は慌てて間合いをとり今まで経の魂玉が刺さってた所を見る、しかしそこには何も無かった。

「いつとつたの？戻した訳じゃないよね？」

経は微笑んで左手に握っていた魂玉を遠くに投げる、そして地面につく瞬間に経の左手めがけて魂玉が飛んできた、総羅はそれを不思議な顔でそれを眺める。

「まだ気付かないのか？」

経は刀身同士を合わせて左手を魂玉から離す、そうすると魂玉はぶら下がったまま離れない。

「魂玉を磁石にしただけだよ、これくらいなら簡単に出来るものだね」

「……………フフ、君、今のでまた僕が強くなっちゃったよ、馬鹿

だね、わざわざ手の内を見せる事無かったのに」

総羅は体を左右に揺らし始めた、そして不規則な動きで経に向かって走って来る、総羅は体ごと下段から切り上げる、経はそれを右手の魂玉で受け太刀した瞬間に爆発して弾かれた、右手は大きな弧を描いて一回転する、総羅は後ろまで向くと振り向きざまの遠心力を使って経を突く、経は左手の魂玉で防ぐが魂玉もろとも爆発により吹き飛ばされた、何とか踏ん張って5m程で済んだ、経は痺れる手に何とか力を入れる。

「確かにヤバいな、でも俺もひらめいちゃった」

「あつそ、別に死ぬんだから何をひらめいても意味がない、それともカツコイイ死にかたでもひらめいたの？」

「それは開けてからのお楽しみ」

経は総羅に斬りかかる、総羅も体全体を使って経を薙払おうとした、魂玉が当たる寸前に経の斬撃のスピードが格段にあがった、そして二人の魂玉が当たると凄まじい爆発と共に地面がえぐれる、砂塵の中から魂玉をあわした二人が立っていた、総羅はそのまま不思議そうな顔をして経の顔を覗きこむ。

「何したの？」

「お前の魂玉も一応は鉄だ、俺の魂玉を強力な磁石にして斬撃のスピードを上げただけ、それに今のお前に魂玉を振ることはおろかこの状態から動かす事も出来ない」

総羅がいくら魂玉を動かしても経の魂玉から離れる気配がない、経

は左手の魂玉を大きくふりかぶった。

「これで終りだ、受け太刀は出来ないだろ、魂玉を戻しても開放する前に俺がお前をぶったぎる」

「甘いよ」

経が振り抜くと魂玉は空を斬った、そこに人影はなく10mほど離れた所に総羅が立っている、経は試しに魂玉同士を近付けると磁力は十分に残っていた。

「お前何した？」

「磁石って熱に弱いらしいよ、さっきから僕の魂玉を温めていったら磁力が弱まった事に気付いたんだ、だから一気に温度を上げたら取れちゃった」

「それは初耳だな、今後の参考にしておくよ」

経と総羅は再び斬り合う、お互いの魂玉が当たることに大きな爆発が起こる、本来ならばお互いにスピード系のために素早いだけの戦いになるはずだ、しかし今の戦いは素早く豪快、今の攻撃では五分の戦い、どちらが相手の裏をかくかで勝負は決まる、先にそれを仕掛けたのは総羅だった、総羅が素早い蹴りを入れると経は肘で受け止めた、しかし総羅の足は爆発して経はそれをモロにくらう、経思いつきり吹っ飛び砂埃を上げながら止まった。

「僕も生身だから本気はだせなかったから死んじやいないよね？」

「何だよ、バレてたんだ」



土煙の中から経の声がすると土煙が一瞬にして晴れた、中からは埃まみれの経が出てきて風で体に付いた埃を落とす、経は魂玉を戻すと一気に魂脈の流れを速める、経の周りには風が吹き荒れ砂塵を巻きあげる、体を光が周りに始めて経が右手を横に突き上げるとそこに光が止まった、そして右手を同じよう開くと弧を描いたまま左手に移動した。

「義経！魂玉段階式、疾鎖双狗！」

経の手には鎖で繋がれた二振りの刀が握られていた、それを見て総羅は笑って魂玉を戻した、総羅の魂脈の流れも速まる、足下は燃え始めて辺りは熱気に包まれた、総羅は右手を開くと炎に包まれた。

「総司！魂玉段階式、三影<sup>さんえいしんぶ</sup>蜃<sup>しんぷ</sup>鵲！」

総羅の手には湾曲していない真っ直ぐな刀が握られていた、総羅はそのまま経に上段から斬りかかってきた、経ギリギリで受け太刀したハズだった、しかし何故か肩に刀傷がある、総羅は体を後ろに向けて突いて来るが経はあっさりと其を防ぐが腹に何かが刺さった、経はとっさに間合いを広げて傷口を見る。

「何でだよ、俺はちゃんと防いだハズ、……………！？」

「気付いた頃には死んでるよ」

総羅が横薙に斬りかかってきた、経はそれを普通より早く受け太刀する、総羅の魂玉は経の魂玉に当たる前に止まった。

「ピンゴー！」

総羅が強い風を起こすとそこからもう一つの刀身が現れた、今まで経が見ていた刀身の下に平行してついている、上の刀身よりも長い。

「熱で光を曲げてこれを隠してたわけか、でもカラクリが見えちゃったら意味がないな」

「別にバレるの前提だし、これくらいでいい気になられたら困るよ」

「いちいちお前は釈に障る事ばつか言いやがって！」

経は左手の魂玉を総羅に投げつけるが総羅はあっさりそれを弾いた、経は引き戻して手元に来る前に右手の魂玉を投げる、それも弾かれ自分が踏み出すと同時に魂玉が手に戻る、総羅は右半身を引いて左手を切つ先に添える、そして経に素早い突きを放つ、経の目には刀は三振りに見えた。

「甘いんだよ！」

経は刀身が揺らいでいない一振りを受け太刀した、しかし他の二振りが経のを突き刺した。

「ブハッ！」

「甘いのは君だよ、こんなフェイクに引っかかるなんて」

経の体からはとめどなく血が流れ出している、しかし経は顔色一つ変えずに立ち続けている、経は血が流れ続ける体と感じさせないくらいに軽々と構える、やせ我慢等をしてる様にも見えない。

「何で大丈夫？傷は深いハズなんだけどな」

「カラクリ試してみるか？」

経は総羅の視界から消えた、そして次に現れた時には総羅の後ろにいて総羅の首筋に触れて再び元の場所に戻っていた、その瞬間総羅が腕を押さえてその場に倒れてもがき始めた。

「うわああああ！痛ああああい！痛い、痛いよお」

総羅は傷も何も無い腕を押さえて叫びだした、経はそれを笑いながら見ているが自分の体がだんだんと重くなっていくのは感じていた。

「ちよいと神経系をいじった、人間ってのは電気信号で動いてるかな、五感も然りだ。今の俺は痛みの信号を完全にシャットダウンしてる、お前の場合は痛みの信号を強くしただけだよ」

「痛いよお、お願い！助けてえ」

「暫くすれば痛みは消える、生きてればの話だけどな」

経は総羅のもとに行って喉元に魂玉を突き付けた、大きく引いて再び突き刺そうとした時に傷口の所に衝撃が走った、経が総羅に目をやるとそこには信征が立っていた、信征は総羅を掴んでそのまま亀裂に投げ入れると経に近寄る、経は痛みを感じ無くても体の自由が利かなくなってきた。

「今は殺さない、だが、いつかは俺の手でお前を殺す、それまで誰にも殺されるな」

信征は経に話しかけながら経の傷口を蹴り続けた、傷口からは更に流血が酷くなり意識が遠退いていくのを感じた、血が無くなり体の筋肉に力が行き渡らない、脳にも血が行かずに痛覚以外もにぶっている。

「……はっ、……………ココで、死ぬかも、な……………」

「そうだとしたら私の見込み違いだ、次に会う時は墓石になって無ように頑張るんだな」

信征はそのまま亀裂に入って行った、経は重い瞼を必死に開けて信征が去るのを見届けると安堵で目が閉じた。

「……頑張、れ……って……………無……………理」

経は力無くその場にうつ伏せに倒れた、最後まで残っていた聴覚も無くなって経は無の世界への扉を叩いてる、しかし何故か体の感覚がみるみるうちに戻って来た。

「……………さま、……………いさま……………経さま！」

経が目を開くと白い球体に包まれていた、体の五感是完全に戻り何とか体を起こせるようになった。

「……………四奈？」

「経さま！後少して完了しますからちょっと待っててください！」

「悪い、ありがとうな、四奈」

経は手を伸ばして四奈の頭を撫でた、四奈は目を瞑って回復を続行している。

後ろの方から先に治療が終わった巴嘸と次郎が来た、次郎はその場でタバコに火を付けて煙を吐く、くわえ煙草をしながら経を見た。

「経も負けたんだ、今回はみんな完敗だったな」

「馬鹿、俺は殺す直前に……………、アイツ誰だ？」

経は自分の記憶の扉を開けてたどり着いた先には見知らぬ銀髪の男がいた、相手は経の事を知ってるが経は相手の事は全く知らなかった。

「多分クソ信征だな」

腕を組んで四奈の後ろに立っていた龍奴が言った、龍奴は頭を掻きながらしゃがんで座っている経に視線をあわせる。

「信征？アイツがか？」

「ああ、巴嘸も見ただろ？」

「うん、歳那が言ってたから間違い無いよ。それに信征は、アイツらが来た、って言ってた。龍奴、心当たりはある？」

龍奴は空を見ながら爪を噛む、考える時に爪を噛むのは龍奴のクセだ、最後にバチンと大きな音を立てる。

「知らねえ、まあ間接的だけどお前らはそいつに助けられたんだな、

会ったらくソみたいに礼を言わねえとな」

「で、四奈、頼むから退いてくれない」

「私は命の恩人ですよ、これくらいはやってもらわないと困ります」

経の一声で全員が経を見るとあぐらをかいてる経の足の上に四奈が座ってた、ピッタリと経に寄り添ってる四奈を見て巴嘩は拳を振り上げる、そして経の隣に拳が刺さる。

「経ちゃん、どさくさに紛れて何してるの？」

「巴嘩！誤解だって、四奈が無理矢理座ってきたんだよ」

「経さま、私が嫌いな？経さまに嫌われるくらいなら私死んだ方がマシ」

「次郎、コイツらほつといて反省会開くぞ」

「おつ、じゃあ今日は芋焼酎で」

龍奴と次郎はその場から去った、経は四奈をなだめながら巴嘩の拳を避けている、巴嘩の拳に経は先程以上に死を感じていた。

## 第十七陣

次郎と龍奴は居酒屋をはしごしていた、当然全ては経の金で、次郎は龍奴が先に酔ってしまい自分が酔う前に酔っ払いのお守りになつてしまった、次郎は龍奴をタクシーに無理矢理押し込んで金だけ置いてタクシーを経の家まで向かわせる。

次郎はタバコを買いにコンビニに向かった、既に時計の針は12時を回っていて大きな路地を一本外れると人は皆無だ、次郎は夜風と途中の自販機で買ったミネラルウォーターで酔いを冷ましながらコンビニへの最短ルートを歩いていった。

途中のコインパーキングで適合者の気配を感じた、恐る恐る近付いてみるとそこには衰弱しきつた一人の少女が壁に持たれて座っていた、髪は短く恐らく経よりも短いだろう、大きめのシャツにデニムのミニスカートなのでほとんどスカートが見えない、左目の下にはハートのタトゥーが彫ってある、次郎は慌てて駆け寄って声をかける。

「おゝいどうした？どつか具合でも悪いのか？返事しろよお」

次郎は頬を叩きながら呼び掛けた、少女はそおつと目を開くと次郎と目があつた、次郎はニツコリと微笑みかけると少女は枯れた声で何かを言っている。

「喉枯れてるね、これ飲む？」

次郎は先程買ったミネラルウォーターを差し出すと少女は奪い取るような感じでミネラルウォーターを取り一気に飲む、次郎はそれを見ながら笑って言った。

「間接キスだね」

「ブツ!!」

少女は勢い良く水を次郎の顔めがけて吐き出した、次郎は苦笑いを浮かべながら顔を拭いて少女の口元も拭いた。

「まだ喉渴いてるでしょ？」

少女は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに頷く、次郎は魂脈を逆回転させて指から水を出した、それをそっと少女の前に差し出す。

「飲みな、体に染み込み易いようにしてあるから」

少女はそれをぼーっと眺めた後に次郎の手を持って水を飲んだ、あまりに喉が渴いていたのか次郎の指をくわえながら水を飲んでいる、次郎は苦笑いしながら水を出し続けた。

飲み終えて少女は満足そうな顔を見ると腹が鳴った、少女は顔を真っ赤にしてお腹を押さえると次郎は笑ってそれを見ている。

「お腹空いてるんだ、俺が買ってくるからココにいてね、逃げても適合者だから居場所は分かるけどね」

次郎はその場に少女を置いてコンビニに向かった、少女の反応は動く事なくその場に止まり続けている。

次郎は両手に大量の食料の入ったコンビニ袋をぶら下げてくわえ煙草をしながら歩いていた、買いすぎた事を後悔しながら美しい満月を仰いでいる、次郎は満月が大好きだった、武志に殺された彼女が



満月が大好きだったからだ、満月の夜は毎日あって月見をしていた、懐かしい思い出を運んでくれる満月を次郎はタバコの煙で雲をかけた。

駐車場にはまだ少女がいる、次郎は笑いながら両手に持っている袋を上げると少女は笑顔になった、その笑顔を見て次郎は更に明るく笑う。

「どれくらい食べるか分からなかったからいっぱい買ってきた、……って言っても買いすぎだよな」

少女は顔を横に振ると中から弁当を引きずりだした、割箸を割って手を合わせて親指に割箸をを挟む。

「いただきます」

凄く小さな声でそれだけ言うと口を大きく開けて弁当を掻き込む、あっという間に一つを食べ終わると他の弁当に取り掛かった、次郎は嬉しそうな顔でそれを見て、少女は箸を止めて次郎を上目使いで見た。

「はしたない女の子は嫌いですか？」

「全然、可愛いよ」

次郎はその透き通るような声に惚れていた、心の奥に染み渡るような、小鳥のさえずりよりも優しいその声が。

少女は顔を真っ赤にして再び弁当を掻き込んだ、しかし慌て過ぎて喉にご飯を詰まらして胸を叩いて、次郎は2リットルペットボトルのお茶を開けて少女に渡した、少女は小さい両手でペットボトルを握んで物凄い勢いでお茶を飲んでる。

「ハアハア、ありがとうございます」

「慌てなくても良いよ、可愛い顔にこんな物が付いてても気付かないくらい必死にならなくても」

次郎は少女の口元に付いたご飯粒をとって自分の口に放り込んだ、少女は茹で蛸みたいに顔を真っ赤にして一口ずつご飯を食べた。

次郎が適当に買ってきた異常な量の弁当を少女は全て食べ終えた、少女は2リットルペットボトルのお茶を2本飲み干して次郎にお辞儀する、次郎は微笑みながらタバコに火をつけた。

「お腹いっぱいになった？」

「はい、ありがとうございます」

少女は最初の頃とは違い覇気が戻った、次郎はあれだけの量の食品がこんなに小さな体に収まった事を信じられずにいる。

「名前なんていうの？ちなみに俺は次郎ね」

「私は晴季はるきです。男の子に間違えられるけど正真正銘の女の子です」

次郎は晴季と武志に殺された彼女を重ね合わせていた、外見は違うけど雰囲気似ている、何かが晴季と似ているのだった。

「何で晴季ちゃんはこんな所で行き倒れてたの？」

晴季は顔を真っ赤にしてうつ向いてしまった。

「異端退治と人捜しをしてるんですけど、……………食料とお金が底を尽きて」

「それで行き倒れね。で、異端退治はともかく人捜しって？」

「兄を捜しているんです、兄はある日何かに取り付かれたようにかしくなってしまったんです、夜な夜な人を殺したり、いきなり暴れだしたり、今だから分かりますけど兄は魂玉に取り付かれいたんだと思います。だから兄が他人に迷惑をかけないうちに、私が兄をこの手で……………」

次郎は笑顔が消えて黙ってしまった、晴季の兄に近い男を経と殺しているからだ、晴季の前にいる次郎は兄の仇、晴季にとっては恨むべき存在。

「念のため聞くけど、晴季ちゃんお兄さんって武志って名前だったりする？」

「兄を知っているんですか！？もしかして兄が何か迷惑を？」

「実に言いにくいんだけど、……………武志は死んだよ、正確には俺が殺した」

晴季は驚いた表情を浮かべてその後には晴れ晴れとした顔になった、次郎は晴季の顔を直視出来ないでいる、晴季は次郎の肩に手を置いて微笑んだ。

「ありがとうございます、兄は苦しんでいました、兄に残された道は死しか無かったんです、兄に代わって私が言います、本当にあり

がとうございます」

「ゴメンな、本当にゴメン」

二人の間に長い沈黙が続いた、しかし二人の沈黙は無理矢理引き裂かれる、二人は強い異端の反応を感じた、今までの異端よりも強い反応に加えて量が多い、二人は険しい顔をして立ち上がった。

「ああ最悪だ、さつき派手に殺りあってきたばつかなのに、タイミングでものを考えて欲しいよ」

「次郎さん、協同戦線ですよ、さあ、行きましょう」

晴季は次郎の手を引いて走った、暫くすると二人はその場から消える。

二人はたどり着いたは良いが異端の集団のど真ん中にいた、しかも異端がおかしい、人型ではなくゴリラのような獣型だ、空には大きな鳥のような異端もいる、次郎は異端といえば人型であったために少し動揺していた。

「次郎さん、落ち着いて下さい、形は違ってもただの異端です、大した事はありません」

「ああそうだな、パパッと片付けるぞ」

二人は魂脈の流れを速めた、二人とも何故か笑っている、今、この状況を楽しんでいるようにみえる。

「小次郎！神清氷刃！」

次郎の背中には身の丈ほどの長刀がある、晴季は次郎と背中合わせになった。

「晴明！呪符じゆふ五行！」

晴季の手には様々な文字の書かれた呪符があつた、変わった装備型の魂玉を次郎は後ろ目で見ている。

安倍晴明、平安時代に悪霊退治などで活躍した陰陽師、一般的に日本で言われる陰陽師はこの人だ、色々な術を使いこなしたといわれている。

「鷹よ！我が翼となり、刃となれ！」

晴季が呪符を何枚か投げるとそれは大きな鷹の形を成した、鷹は地面に降りてくるとその上に晴季が乗る。

「晴季ちゃん、上は任したよ、下は俺が潰すから」

「はい」

「晴季ちゃんは上の奴らだけを気にしてれば良い、俺は下だけを気にするから。信じてるよ」

そういうと次郎は異端の中に走って行った、晴季はそれをみて跳び上がる、空には大量の鳥型の異端がいた、一匹の異端が次郎めがけて急降下した、晴季は呪符を異端な投げる、異端は呪符が当たった瞬間に激しく燃えて灰となった。

「貴方達の相手はこの私です、よそ見をしてると死にますよ」

後ろから一匹の異端が突進してきた、鷹は軽く飛び上がり下を異端が通った瞬間に爪で捕える、首と胴体を掴んでそのまま引き千切った、晴季は跳び上がり一回転して呪符を投げる、異端に当たると燃え尽きそれらが輪を描いた。

「綺麗」

そのまま鷹は飛び回り鷹は爪と口で、晴季は呪符を投げて次々と異端を殺していく。

地上では次郎が異端を斬っている、次郎は異端を全く近付けずに自分の間合いで戦っている、しかし次郎はそれに嫌気がさしたらしい。

「ああ、めんどくさいな、疲れるけど一氣にいくか」

次郎は勢いよく地面に魂玉を突き刺すと物凄い勢いで魂脈の流れを逆回転させる、次郎が口角を上げた。

「氷林降誕！」

地面一帯に氷のトゲが出てきた、異端は全てそれに刺さって死んでいく、氷が砕け散ると地面はグチャグチャだった、次郎はそのまま座って上を見上げた。

晴季は大半は殺したがまだ残っている、晴季も長々と戦ってるのに嫌気がさして大量の呪符を空に投げた。

「降り注げ、岩達よ！」

空からは大量の岩が降って来て異端を貫く、次郎はその光景を眺めて青ざめた、地面に沢山の岩が降り注いだ、次郎はそれらをギリギ

リで避けていたが足場が悪いタメに転んでしまった、転んだ次郎めがけて岩が降ってきたが鷹が目の前にきて鷹が盾となって防げた、しかし再び次郎が空を見ると今度は晴季が降ってきた、スカートを押さえながら慌てている、次郎は落下地点までいって晴季をキャッチした。

「おかえり」

「……………ただいま」

「気にするなとは言ったけど把握しといてよ、死にかけたよ」

「ごめんなさい」

次郎は笑って抱き抱えたまま消えた、次郎と晴季が消えた後はまるで地面が引っくり返ったような状況になっている。

次郎と晴季は先程の駐車場いた、空は既に日が昇っている、次郎が時計を見ると8時を回っていた、そして肩に目をやると晴季が寝ている、次郎は晴季の頭をそつと撫でると晴季はその手を掴んだ。

「あつたかい、朝ですか？」

「そうだよ。寝顔可愛いね」

晴季が顔を真つ赤にしていると次郎がタバコに火をつけた、晴季は起きて次郎の肩に頭をのせている。

「晴季ちゃんは行く所はあるの？」

「兄がいないのならもう行く所は無いです」

「なら俺らが住んでる所に来なよ、俺の他に男が二人、女が二人、部屋とお金なら有り余ってるよ」

「良いんですか!？」

晴季は満面の笑で次郎の顔を見た、次郎はタバコを噛みながら歯を剥き出しにしながら笑った。

「晴季が良いんなら良いよ」

「ならお願いします」

次郎は立ち上がって晴季に手を差し出した、晴季は次郎の手を掴むと次郎は思いつきり引つ張る、晴季は勢い余って次郎に抱きつくような状態になった、晴季はそのまま動こうとはしない、次郎は晴季を前の彼女と重ね合わせてみていたが今は晴季という個人を見ている、次郎と晴季は朝日を背に手を繋ぎながら帰った。



## 第十八陣

次郎と晴季は朝焼けの中を手を繋いで歩いていた、二人の笑顔は太陽よりも眩しい。

次郎は豪邸の前で立ち止まり扉を開けようとした、しかし鍵が掛っていたのでポケットから鍵を取り出して鍵を開ける、そのまま扉を開けると眠そうな顔で歯を磨いてる経が立っていた。

「ただいま」

「……………」

経はフリーズしたまま動かない、そして階段から四奈がボサボサの頭で降りて来た、四奈は次郎と晴季を見ると自分の目を擦る。

「えええええ！？」

四奈の悲鳴と共にキッチンで朝食を作っていた巴嘩と二日酔いでフラフラの龍奴が集まった、巴嘩は持っていたおたまを落とし、龍奴は目が覚めたらしい、その間次郎と晴季は苦笑いを浮かべフリーズしている。

「じ、次郎？」

「今度からはお忍びで頼むよ、俺んちはホテルじゃないんだから」

「おい次郎、頼むから朝帰りのお持ち帰りを爽やかにこなすな、まあお陰でクソ二日酔いも吹っ飛んだけど」

「次郎君やるう」

次郎と晴季は顔を見合わせた、その後自分達の手を目をやり再びお互いに目を戻す、顔を真つ赤にして慌てて手を離れた、晴季はそのままそっぽを向いてる。

「ち、違うんだよ!」

「じゃあ説明してもらおうか?この女の子が俺んちにいる理由と朝帰りの理由」

次郎たちはリビングに上がり次郎は龍奴を帰した後の行動をことこまかに説明した、巴嘩は朝食を作り経は歯ブラシをくわえたまま、四奈は晴季の顔を覗きこんでいる。

「……………という事だよ、分かっただろ?それと四奈ちゃん、晴季ちゃんの顔を覗き込むの辞めてあげな、嫌がつてるだろ」

「だってこのタトウ、可愛いんだもん」

巴嘩以外は晴季の顔を覗き込んだ、晴季は顔を真つ赤にしてうつ向こうとしたが龍奴に頭を押されて下を向けないでいる。

「確かにタトウがあるな、クソスゲエ」

「はーふおは(ハートか)」

「経ちゃん、口ゆすいできて、はしたないよ」

「はい」

経は頭を掻きながら口を濯ぎにリビングを出た、龍奴は晴季の頭から手を離して背持たれに持たれて腕を組んだ。

「次郎、俺らが何でココに集まってる目的は説明してないだろ？」

「あつ」

「やっぱりな、そういうところがクソみたいに抜けてるんだよな」

「次郎さん、目的って？」

晴季は次郎の顔を不安そうな顔で見ると、次郎は虫の悪そうな顔をして頭を掻いた。

「晴季、俺らがココにいるのはお前の兄貴をダメにした俺のクソ兄貴を殺すためだ、ワイワイチームじゃねえぞ、ココにいる奴らはふざけた奴らでも命を賭けてる、ココにいるってことは必然的にこの戦いに巻き込まれるぞ、お前はその戦いに命賭けるきになれるか？」

晴季は次郎の顔を見ながら考えている、次郎は晴季の真剣な顔初めて見た。

「私戦います、兄のタメに、次郎さんを守るタメに」

「死ぬかもしれないんだぞ？」

「晴季ちゃん、住む所ならどうにでもなる、無理しなくても良いん

だよ？」

晴季は次郎を睨むように見た、その目は決意に満ちていて次郎は何を言っても聞かない事が分かった、次郎そのまま笑ってみせた。

「これは私の意志です」

「ししし、なら反対出来ないな、でも命を賭けるのと命を捨てるのは違うから、絶対死なないですよ」

次郎が晴季の頭を撫でると経が眠気のとれた顔で入って来た、経は静かな部屋にいる次郎と晴季を見て笑ってる。

「おいおい朝だぞ、朝は四奈でもサバサバしてるのに。巴嘸、ご飯まだ？」

「このクソ経が！」

「空気の読めない経ちゃんに上げるご飯はないわよ」

「何だよみんな、何か冷たくない？四奈もそう思うだろ？」

「経さま、いくら私でも今の状況で経さまに加担は出来ないよ」

孤独感にさいなまれていた経を無視して次郎と晴季は二人の世界に入っている、巴嘸は淡々とテーブルに食べ物を並べてる。

食べ終るといつものように男達が食器の片付けをしている、これは

暗黙の了解でこうなった、女性陣はこの時間は朝シャンだ、経の家の風呂は軽い銭湯なので仮に全員で入ってもお釣りがくる。

「晴季ちゃん、巴嘩ちゃんと私はお風呂に入るけど巴嘩ちゃんも入るよね？」

「すみません何から何まで、でも……………」

「下着なら大丈夫よ、私があるから」

「ならお言葉に甘えて！」

風呂は大きな窓がある、庭には露天風呂がありとても一軒家の風呂とは思えない、塀が高いのでとても人間が登れるような塀ではない、3人は一通り洗って露天風呂に行った、今日は土曜日だからゆっくり入れる。

「二人とも胸が大きくて良いですね」

「私は体が小さいからそう見えるだけだよ、巴嘩ちゃん天然だね」

「晴季、そんなに近くで見ないでよ、息があたる」

晴季は鼻が当たりそうな距離で巴嘩の胸を見る、そしていきなり巴嘩の胸を掴んだ。

「ヒヤッ！な、何？」

「はあ」

晴季はため息をついて手を離れた、そんな晴季を二人はビックリした目で見ている、晴季は自分の胸に触って再びため息をついた。

「晴季ちゃん、どうしたの？」

「私やっぱり小さすぎですよね？」

「大きくは無いよね」

「悩みなんですよね、ブラとかもいらないし」

ダークサイドに入った晴季を誰も連れ帰る事は出来ずに風呂を出た、体を拭いて晴季はズボンを履いて上はタオルを巻いたまま脱衣所を出ようとした。

「晴季、シャツもあるよ」

「私大きいシャツしか着ないの」

「何で？晴季ちゃん更に胸が小さいのが目立つじゃない？」

四奈の一言に再びダークサイドにはいった、しかし今回は早めに立ち直って笑った。

「兄のお下がりを着ていたら普通の服に戻れなくなって、普通の子の服だと落ち着かないんですよ」

「なら次郎に借りてくるよ」

巴嘸が戻って来ると手には何枚かのシャツを持ってきて晴季の前に広げた、晴季は一枚を来てみると当然ブカブカだ、しかし晴季は笑顔でそれを来ている。

「ありがとうございます」

「今度は下着も買いに行こうね、シャツは次郎の使えば良いけど他は買わないとね」

「でもお金が……………」

「この家の特権は経さまのお金を使い放題って事だよ、遠慮したらそんだからね」

「……………はい」

三人が風呂から上がると龍奴はリビングでテレビを、経は屋上でひなたぼっこ、次郎は部屋で雑誌を読んでいる、四奈は龍奴の隣に行つて無理矢理チャンネルを変えた、巴嘸は洗濯物を干しに屋上に、晴季は次郎の部屋に入った。

「次郎さん、服ありがとうございます」

晴季は部屋に入って思いつきりお辞儀をした、次郎は笑いながら自分の部屋の冷蔵庫からペットボトルを出して晴季に投げ渡す、晴季はお手玉しながらそれをキャッチした。

「あ、ありがとうございます」

「晴季ちゃんの部屋は俺の部屋の向かい側だから、いつでも俺の部屋に入って来て良いよ」

「はい。でもそんなに頻繁に出入りしたらみんなに変に思われたりしませんか？」

「それは大丈夫、四奈ちゃんは経に夜這いとかかけてるし、巴嘩ちゃんも雷とか地震とか来ると経と添い寝してるし、なんなら晴季ちゃんも一緒に寝る？」

次郎が布団を叩くと晴季は顔を真っ赤にしたままペットボトルをくわえている、次郎は冗談と言いながら腹を抱えながら笑っている、しかし………………。

「……………」

龍奴は見てるチャンネルを変えられて若干不機嫌になりながら新聞を読んでいる、四奈は朝のアニメを拳を振り上げながら見ている。

「おい四奈、もうガキじゃねえんだからそんなクソアニメばっか見てんじゃねえよ」

「良いの！それに龍奴もニュースとか新聞ばっか、爺くさい」



龍奴は青筋をたてて新聞の握っている所クシャクシャにした、しかし無邪気にテレビを見てる四奈を見て龍奴の怒りは薄れた。

「そういえば龍奴って何歳？」

「俺か？俺は19」

「一番年上か、一番だらしないのに」

「うるせえ、一番ガキに言われたくないね……………」

「……………」

いつものように屋上で寝ている経の上に洗濯籠がのしかかってきた。

「ゴホッ！」

「経ちゃん手伝って」

「やだ」

「経ちゃんも干すわよ」

経は無言で洗濯物を干し始めた、それを見て笑顔で隣で干している、空は快晴で青く澄みわたっていて経はたまに手が止まる、それを見

ると巴嘩が経の頬をつねって起こす。

「脳を揺らして起こしても良いんだよ？」

「起きます、起きました、頼むから暴力は辞めてくれ、只でさえ巴嘩は力が強いんだから」

「黙ってやる、終わったら寝て良いから」

二人は無言で洗濯物を干し続けた、巴嘩は黙々と洗濯物を干す経の横顔を見ていたら手が止まっていた、経と目が合うと慌てて目を反らして手を動かしている、経は首を傾げながら手を動かした、しかし一瞬で二人の手が止まる。

「巴嘩！？」

「玄関の前だね」

「適合者が二人、かなり強いな。飛ぶぞ！」

経と巴嘩は屋上から飛び下りた。

次郎と晴季は廊下を出た突き当たりの窓から飛び下りる。

龍奴と四奈は四奈が玄関のドアを開けてその上を飛び越えて龍奴が外に出た。

全員途中で魂玉を解放して四奈は檻を作り適合者二人を包囲して他の球体は槍となり包囲している、龍奴は玄関を出た所で二人に銃口を向けている、巴嘩は左、次郎は右から切っ先を向け、経は二人の後頭部に切っ先を向けている、晴季は上空から鷹に乗り呪符を構えた、六人は謎の適合者二人を完全に包囲した、最初に口を開いたのは経だ。

「……………お父さん？お母さん？」

「おじさんにおばさん」

「……え？」「……」

四人は気が抜けて魂玉を戻した、そこには20代後半くらいの男女が立っている。

男の方はスーツを来て髪の毛をオールバックにしてる、いうならば若社長のような感じだ。

女の方は一言で言うとおセレブだ、おしとやかな感じの笑顔に髪の毛はウェーブがかかっている、水色のドレスが空のように見える。

「経と巴嘩ちゃんか、それにどちら様？」

「経さんにもお友達が増えましたね、少々物騒ですが」

「いやそれより、お父さんとお母さんって適合者だったのかよ？」

「旅から帰って来たんだ、一先ず休ましてくれ」

二人はマイペースに家に入り紅茶を入れてソファに座った、六人は食卓の椅子に座ってる、全員今の状況が理解出来ていない。

「経と巴嘩ちゃんが適合者に成ってたとはな。それに経」

経のお父さんは背中を向けていたが振り返った、顔はかなり真剣で

ある、六人は息を呑み経のお父さんを見た。

「女の子がみんな可愛いじゃないか」

真剣な顔のまま言った、次郎は苦笑いを浮かべ、龍奴はため息をついて持たれた、四奈は喜び、晴季は顔を真っ赤にしてうつ向いた。

「信侍さん、小さな女の子にも色目を遣わないで下さい」

「謙恋ちゃんが一番、だからすねなるな」

二人のやりとりで半ば飽きて来た経達は帰ろうとしていた、しかし龍奴が口を開いた事によって一瞬にして緊張に包まれる。

「二人とも俺らが何でココにいるか聞かないんですか？特に四奈なんかは」

四奈以外は龍奴の顔を見る、不思議そうな顔、理解出来ない顔、不安な顔、様々だ。

「確かに、ココに四奈がいたのは計算外だ、しかし龍奴君、君というって事は少なくとも信じるに値するだろう」

「で、息子の危険を察知して飛んで帰って来たんですか？」

「ちょ、ちょっと待てよ！何でお父さんが龍奴と四奈の事知ってるんだよ？」

「風林火山の信侍、朱雀の謙恋といえどクソ信征を調べた奴らなら一度は出てくる名前だ、最強の適合者だよ」

「良く調べてるようだね、さすが僕達と同業なだけあるようだね」

経は驚いていた、自分の親達が最強の適合者、しかも龍奴と同業と  
いうことは信征を追っているということ。

「疾風の経、剛腕の巴嘍、長き氷の次郎、聖拷問の四奈、ツインハ  
ンドの龍奴、異端退治の晴季、みんな信征を調べてる間に出てきた  
名前だ、二つ名があるって事はそれだけ危険度が増すって事だ、こ  
れからは僕が調べた事を教えようと思う」

## 第十九陣（前書き）

今回はキャラ紹介です。  
ちよっとした息抜きです、良かったら読んでください。

## 第十九陣

### 《信侍の考察》

基礎知識について知っておいて貰いたい

### 《武者魂玉》

武者魂玉とは武将等の強い魂が玉のような形となり、選ばれた人間に取り付く、取り付かれた人間の事を‘適合者’という、基本的に武者魂玉の事は魂玉と略す。

### 《魂脈》

魂玉を使う上で必要不可欠なもの、これは血液のように体中を流れている、魂脈が出す反応を‘生体反応’という。

### 《適合者》

適合者とは魂玉を使う人間の総称。適合者は魂玉を武器にする‘装備型’、魂玉を馮位させて自分の姿形を変える‘馮位合体型’、魂玉の属性の力を最大限引き出す‘属性馮位型’がある。

### 《属性》

属性とは魂玉の攻撃を助ける力の事、  
‘火’、‘風’、‘岩’、‘水’、  
‘木’、‘聖’、‘闇’の7つがある、火は風にかき消される、風は岩を動かす事は出来ない、水は岩をうがつ、水は木に吸われ、木は火に燃やされる、聖は万物の根源故に全ての属性に通じ闇を照らす、闇は全ての属性を支配するが支配される、これにより属性の強弱が決まる。

### 《付加効果》

5つの属性にはそれに通じる効果がある、火は‘爆発’、風は‘雷電’、岩は‘鋼鉄’、水は‘冷却’、木は‘出芽’、これらに強弱の関係は無く使い方次第では属性の概念を打ち破る事も出来る。

私と四奈と龍奴の情報収集の結果、この戦いに関わる適合者達の考



察。

石 幟 経

(いしのぼり けい)

疾風の経

魂玉：源 義経

(装備型・風)

魂玉段階

壺式：疾風双刃

(しつぷうそうは)

弐式：疾鎖双狗

(しつさそうぐ)

魂玉：武蔵坊 弁慶

(装備型・岩)

魂玉段階

壺式：金剛碎玉

(こんごうさいぎよく)

袋小路 巴嘩

(ふくろこうじ ともか)  
剛腕の巴嘩

魂玉：巴

(装備型・木)

魂玉段階

壱式：枯葉魅刃

(こつぱみじん)

弐式：枯雀桜刃

(こじやくおうじん)

阿刀田 次郎

(あとうだ じろう)

長き氷の次郎

魂玉：佐々木 小次郎

(装備型・水)

魂玉段階

壱式：神清氷刃

(しんしんひょうじん)

式式：神牙凍刃

（じんがとうじん）

幾野 四奈

（いくの しな）

聖拷問の四奈

魂玉：天草 四郎

（属性馮位型・聖）

獅子丸 龍奴

（ししまる りゅうど）

ツインハンドの龍奴

魂玉：坂本 龍馬

（装備型・火）

魂玉段階

壺式：砲芒火彌

（ほうぼうびび）

平鹿 晴季

(ひらか はるき)

異端退治の晴季

魂玉：安倍 晴明

(特殊装備型・無)

魂玉段階

壱式：呪符五行

(じゅふごぎょう)

石幟 信侍

(いしのぼり しんじ)

風林火山の信侍

魂玉：武田 信玄

(装備型・火風岩木)

魂玉段階

秘密

石織 謙恋

(いしのぼり けんれん)

朱雀の謙恋

魂玉：上杉 謙信

(馮位合体型・火)

状態朱雀

これからは敵方だ、分からないところが多いが、二つ名だけは把握出来ている。

獅子丸 信征

(ししまる のぶゆき)

漆黒魔王の信征

魂玉：織田 信長

（属性馮位型・闇）

高伝 秀美

（たかつて ひでみ）

猿飛びくノ一の秀美

魂玉：羽柴 秀吉

（？・？）

和中 蘭

（わなか らん）

絢爛射手の蘭

魂玉：森 蘭丸

（？・？）

美濃 歳那

(みのう としな)

凍りし眼の歳那

魂玉：土方 歳三

(属性馮位型・水)

芒 勇治

(すすき ゆうじ)

白虎の勇治

魂玉：近藤 勇

(馮位合体型・岩)

状態白虎

状態麒麟

中巨摩 総羅

(なかこま そら)

幼き幻影の総羅

魂玉：沖田 総司

(装備型・火)

魂玉段階

壱式：三炎天鷲

(さんえんてんぶ)

弐式：三影屋鷲

(さんえいしんぶ)

弥益 十子

(やます とうこ)

針時雨の十子

魂玉：柳生 十兵衛

(?・?)



弥益 政音

(やます まさね)  
青龍の政音

魂玉：伊達 政宗

(馮位合体型・?)

状態青龍

我如古 隆徳

(がねこ たかのり)  
玄武の隆徳

魂玉：西郷 隆盛

(馮位合体型・?)

状態玄武

ココからは計5人の死亡者を記したいと思う、2人以外は龍奴によつて殺害された。

平鹿 武志

(ひらか たけし)

取り付かれし亡霊の武志

魂玉：宮本 武蔵

(装備型・火)

魂玉段階

壺式：両陽若火

(りょうようじゃつか)

冥笠 半哉

(めいかさ はんや)

死刑執行人の半哉

魂玉：服部 半蔵

(属性馮位型・風)

糠沢 小詩

(ぬかさわ こうた)

悪魔の旋律の小詩

魂玉：桂 小五郎

(装備型・風)

魂玉段階

壱式：律死妖笛

(りっしょうてき)

貳式：旋死魔笛

(せんしまてき)

久後 以慎

(きゅうご いしん)

冷静黙殺の以慎

魂玉：岡田 以蔵

(属性馮位型・木)

毬坂 義靱

(まりさか よしとも)

蹴球の義靱

魂玉：今川 義元

(装備型・岩)

魂玉段階

壱式：蹴駁鋼牙

(しゅうはくこうがい)

以上、私が調べた結果はここまでだ、これはこちらの力を知ると共に相手の力も分かる、この考察はトップシークレットだ。

## 第二十陣

信侍が一通り話終える頃には、経はいびきをかきながら寝ていた、晴季も眠い目を擦っていたので目が真っ赤だ。

無理もない、10分程前に日付が変わったばかりだ。

「もうこんな時間か、まあこんなものだ、これだけでは相手の力量は分からない、だけど意味が無い訳じゃないと思う、……………そういう事だ君達、頑張れ！」

真面目な顔で経達六人に親指を立てた、全員の頭を疑問符が埋め尽す、今までの話の流れからいくと信侍と謙恋も一緒に戦うものだと、誰もが疑わなかった。

しかし信侍は戦う気がゼロだ、それに呆氣をとられている。

「僕達はまた旅行に行くから、明日には旅立つ、だからこの事は君達に任せる」

「ちょっと待てよ、あんたらはココにいる全員がクソ信征共に殺されても良いのかよ!? コンビニに買い物行くんじゃないぞ!」

龍奴が椅子から乗り出して怒鳴った、声の大きさに経はビクリして起き上がり辺りを見回す、龍奴は信侍の前まで行って胸ぐらを掴んで立たせる。

「クソ旅行と息子の命のどっちが大事だ!？」

「これくらいで死ぬような息子に育てた憶えはない。第一死ぬのを前提で行くなら僕達がいなくても良いだろ? 自殺志願者を助ける程、

僕はお人好しじゃない」

信侍は龍奴の手を払い除け、龍奴に背を向ける、龍奴は歯を剥き出しにし、信侍に怒りをぶつけた。

「クソ野郎が……！」

肩を掴んで信侍を180度回してストレートを入れた、しかし龍奴の拳は空を切り、龍奴は顎を持たれ体が宙に浮いた。

「暴力は良くないな」

信侍はそのまま龍奴を投げ飛ばした、すかさず経が龍奴をキャッチして信侍を睨む、信侍は今まで以上に真剣な顔付きになり、経に近付いて目線をあわせる。

「お父さん、何でこんな事するんですか？龍奴は何も間違った事は言っていない」

「言わなきゃ分かんないのかな？君達がいると邪魔なんだよ、僕は目の前で殺されかけてる人を見逃せる程、酷い男じゃない、だから君達をかばいながら戦ってたら成せることも成せないんだよ、僕達二人の方が100倍マシだ」

「つまり俺達は………」

「足手まといなんだよ、雑魚が意気がつてられるようなおままごとじゃない、これは本気の殺し合いだ。5人殺しただあ？みんな雑魚じゃねえか、マシなのは半哉だけ、しかも相討ち、そんなもんで潰せたら今頃他の適合者が潰してる。身のほどをわきまえる！」

信侍は怒鳴って部屋を出て行った、後を追うようにして謙恋が経達に会釈をして出る。

経は二人が出ると、龍奴を離して壁を思いっきり蹴った。

信侍と謙恋は自室にいる、並ぶように二人のベッドがあり、左が信侍、右が謙恋だ。

信侍はベッドに腰掛け頭を抱えた、謙恋はそつと信侍の隣に行つて信侍の肩に手を置く。

「謙恋ちゃん、憎まれるのつて、楽じゃないんだな」

「そうですね。でもあれくらいで辞めるような子達には見えないのですか？」

謙恋は信侍の顔を覗き込む、信侍は笑つて謙恋を見た、信侍はベッドに仰向けになって、頭の後ろで手を組んだ。

「まだあの子達は弱い、でも強くなる」

「もつとヤル気を出させるタメにあんな芝居を打ったのですか？」

「そう、彼らはまだまだ強くなる、もしかしたら僕達以上の器かもしれない。でも今はまだサナギだ、大きな翼を付けるかどうかは彼ら次第、サナギのまま殺したら信征の思う壺だ。ココから先は誰の手も借りずに進むしかない、自分でしか開けられない扉なんだよ、扉を開ける鍵は、心にある」

経は自分の親に苛立ちを感じていた、情報を仕入れるだけ仕入れて自分達は戦うなど言われた事が、そして信侍達は戦わない事に。

「龍奴、お父さんが変な事言ってゴメン」

「お前は悪くない、それより今は俺達だけでどうやって信征達に対抗するかだ、信侍さんが言う事も一理ある、今の俺らじゃ戦っても無駄死にだ」

ここにいる全員がそれを分かっていた、次郎と巴嘩は勇治と歳那に半殺しにされ、経は総羅と良くて相討ち、そんな奴らが沢山いる中に自分達だけで勝てるのか、しかも相手には四聖獣の内の3人がいる、かなり絶望的状态だ。

この日は遅かったので全員そのまま就寝した、次の日、一番に起きた巴嘩よりも早く、信侍と謙恋はいなかった。

いつもと同じ朝に、いつもと同じ席の配置、でも誰一人として喋るうとはしなかった。

龍奴と経は食事が終わると二人同時に家を出た、二人で話し合った訳でもなく、ただの偶然である。

次郎は女性陣が風呂に入ったので、一人でテレビを見ながらタバコを吸っている。

この戦いに本当に晴季を巻き込んで良いのか、ホントに自分は勝てるのか、そんな事を次郎は考えていた。

「ああ、何か嫌になるよな」



経と龍奴は何をするではなく、散歩をしていた、何も話さずに、目的地も何も無い。

しかしそんな二人の沈黙を切り裂くように反応が現れた、龍奴は頭を掻きながら嫌々に経を見る、経はため息をついた。

「クソタイミングの悪い奴だな」

「弱ければ良いんだけどな」

「そりゃないだろ、なんかクソ見つけて欲しそうだぞ」

「あえてシカトする」

「それクソ最高、でもさ、急に現れたってことはクソ信征のお仲間だろ」

「頭良いね」

「バゝカ、今までとりあえず戦ってたのかよ」

経は黙って、頬を掻きながら明後日の方を向いた、龍奴は口をポカ

ンと開けて、経の横顔を見つめる。

「普通の適合者だったらどうするんだよ？」

「この街は俺と巴嘩くらいだから、来るのは全員敵、みたいなの？」

「馬鹿の見本だな。まあ、とりあえずいきなり現れるなんて芸が出来るのは、クソ信征の仲間以外にありえない、まあ俺らが察知出来ないスピードなら別だけどな」

二人は笑いながら歩いてる、反応の事をほったらかしで話に華が咲く。

「じゃあ行きますか」

「ああ、クソが、速攻終らせるぞ！」

二人は人に見えない所まで行って、高速で移動した、普通の人間では捉えられないくらいのスピードで。

次郎の周りには女性しかいない、ハーレムに喜ぶほど次郎は飢えてなく、これだけの人数に慣れてる訳でもない。

少し戸惑いつつ、四奈が毎週見てるアニメを見ていた。

左には晴季、右には四奈、下でテーブルに頬杖をついてるのが巴嘩、晴季も楽しんでいるので逃げるに逃げれない。

「巴嘩ちゃん、経遅いね」

「そうね、龍奴もそうだけど、二人で何してるのかな？」

「経は意気がったガキみたいな顔だからな、大人のお姉さんには人  
気だぞ」

次郎は巴嘩の内を探るように言う、巴嘩は何でもないように見えて、  
掴んでる机の端がぐちゃぐちゃになってる、木製の机といって強度  
は並じゃない、握って潰せるような物ではない。

「経ちゃんはおばさんには興味ないよ、……………多分」

「好きな男のタメに戦う健気な少女、おばさんに負ける」

バキンという音と共に机がえぐれる、晴季はオロオロして次郎と巴  
嘩を交互に見る、次郎は笑顔を崩さない、巴嘩は肩が震えている。

「経ちゃんのタメに戦ってる訳じゃない、私には私の目的がある、  
それがおじさんのお陰で確かめられた」

「目的って？」

「私と経ちゃんは幼馴染み、でも年上と年下の幼馴染みの姉妹がい  
たの、その二人には親がいなくて、私達は四人で楽しく過ごしてた  
の、皆で経ちゃんの家泊まって。でもある日その二人は変なおじ  
さんに着いて行ったまま帰って来なくなった」

「それが信征達の何の関係が？」

「二人の身体能力は異常だった、今思うと二人は適合者だったのかもしれない。それに、連れて行った男は亀裂に入って行ったの、まだ子供の私達にはそれが異常だとは思えなかった、でも今なら分かる、信征の差し金だって事が」

「巴嘩ちゃんが言ってるのって弥益姉妹の事？」

今までテレビを見ていた四奈が口を挟んだ、巴嘩は苦笑いを浮かべながら四奈を見た。

「そうよ」

「あの二人の写真はやっぱりそうだったんだ」

「写真？」

四奈は穏やかな顔で巴嘩を見る、巴嘩は慌てた中に希望を見い出していた。

「あの二人いつも写真を持ってた、でも見せてくれた事は一回もないの、多分巴嘩ちゃんと経様の写真よ」

巴嘩は笑いながら涙した、幼馴染みはまだ自分達の事を忘れて無かった、でもそれは殺さなければいけない相手が幼馴染みという、悲しみの涙も混じっていた。

## 第二十一陣

休日なのに大きな公演には人がいない、唯一いるのはデカイ男ただ一人、ボディービルダーのような体つき、髪の毛は無く顔は穏やかだ、雰囲気は悪くないが近寄りたくないタイプ、近寄ってはいいけないようなタイプ、それが隆徳。

龍奴は動物園で下手物を見たような反応をしえてる、しかし経はうつ向いて、伸ばした腕の拳は強く握られ、小さく震えている。

それは殺気に変わり、普通の人間なら正気を失うくらいだ、強く握り過ぎたせいか手には血がにじんでいる。

血は滴り落ちて、経の足元を着実に紅く染めている、龍奴は恐る恐る経に声をかけた。

「おい、どうした？おかしいぞ」

「うるさい！！」

経は腕を横に振りながら龍奴の言葉を遮った、その時に血は筋になつて飛び散る。

龍奴でも恐れをなす程の殺気を放っている、そこにいるのは鬼神と化した経だった。

「アイツは、…………アイツは！俺、…俺と巴嘩の大事な人を奪った！」

経が勢いよく指を指すと再び血が舞い散る、既に手は真っ赤に染まり、手の平には爪の跡が痛い程残ってる。

「十子ちゃんと正音をなんで奪った！？テメエは俺が殺す！」

「僕は奪っちゃいない、あの子達が自ら望んだ、それだけだ、貴様につべこべ言われる筋合いはない」

「わあああああああああ！！！！」

経は頭を両手で押さえてその場に崩れ落ちた、そして上半身を大きく振りながら叫び続ける。

後ろに大きく反った状態で停止した、腕を力なくブランと落とし立ち上がる。

急に魂脈の流れが速まる、経は右腕を頭の少し上まで上げ、下を向いたまま体の外で手を開く、その下は光って光が渦を巻く、地面からはダイヤモンドが隆起して、光が乱反射する。

「弁慶、魂玉段階式、金剛棍碎こんごうこんさい」

経の右手から地面にかけて大きな棍が現れた、太い部分には刺がついている、ダイヤモンドが光を取り込み乱反射して、発光してるように見える、経は肩に魂玉を担いで、左手を地面について構えた。

「正々堂々なんて関係ない、お前さえ死ねば俺は満足だ」

「なら貴様の願いは叶えられそうにない、僕は死ぬなど有り得ん」

隆徳は魂脈の流れを急速に速める、龍奴も慌てて速めた、隆徳の流れを感じて龍奴はいつも以上に速くする。

先に開放したのは龍奴の方だった、地面は燃えて龍奴のジーンズの裾が焦げ出した、腕を両側に大きく広げるて手を開く、手の周りには火の粉が舞う、火の粉が手の平に集まり爆発が起こった。

「龍馬！魂玉段階式！砲散火干！」  
ほうさんかち

爆発の煙の中から現れたのは真っ赤な二つのショットガン、普通よりは小型で二丁拳銃のタメのような物。

隆徳が開放する前に経は飛び出して、右手だけで握ってたのを両手で持つ、そして背中に添わして、体全体で振り下ろした。

「隆盛、状態玄武」

隆徳は経が振り下ろす直前に開放した。

西郷隆盛、幕末で倒幕を掲げた志士の一人、薩摩藩（現在の鹿児島県）の出身、藩の実権を握ってた者と対立して2度遠島処分を受けた、しかし大久保利通の力により藩政に復帰、禁門の変や長州征伐で活躍した。

隆徳の周りは土煙で包まれて隆徳は見えない、しかし経の魂玉は完全に振り下ろされてない、経は地面を蹴って離れ、再び担いで構えた。

煙が晴れると無傷の隆徳がそこには立っていた、隆徳の体がおかしい、顔だけは出ていて、他は亀の甲羅のような木で全てが覆われている、指先も足先も全てが覆われていて、まるで鎧を纏っているかのようだ。

「それつきしで儂を倒せるとでも思ったか？この甲羅は全て魂玉だ、それだけ言えば分かるだろ」

魂玉というものは完全物質、しかし本来の属性は放棄出来ないし、経の弁慶の魂玉なら破壊出来る。

「最高にCOOLな魂玉だな、でも今言った事がHeelへの道しるべだ！」

ハイテンションになった龍奴はショットガンを乱射した、散弾するため避けるのは難しい、しかも相手は‘木’、こちらは‘火’、魂玉相手でもその上下関係は変わらない。

龍奴の攻撃は火の弾によるもの、隆徳は木の甲羅、当たれば燃えてしまふ、甲羅は体全体を覆っているので体全体が火元となり焼けるのは必然だ。

奴は隆徳の周りの地形が変わる程撃ち続けた、土煙の中から顔を覆いながら隆徳がゆつくり歩いて来る、撃たれて燃えた所は剥がれ落ち、後ろから新しい甲羅が出てくる、思わず龍奴は撃つのを辞めた。

「クソが、Funnyだろ、そんなのありかよ？」

龍奴が撃つのを辞めた瞬間、経は飛び出した、魂玉は真つ赤に光出して、経は両手で棍を持ち、左上から叩き付けようとした時だった、木で防がれ一瞬動きが止まる、隆徳は指の骨を鳴らして拳を作った、経の腹めがけて拳が飛んできたが、隆徳の体ごと吹っ飛んだ、経の目の前には方膝についてショットガンを両方突き出した龍奴がいた、龍奴は迷わず経の顔を殴る、経は尻餅もついてその場に倒れた。

「何するんだよ!？」

「Cool downしろ!頭に血が昇り過ぎだ!相手は明らかにゼロ距離タイプだ、考えも無しに突っ込んでたら勝てるものも勝てない」

「じゃあどうすれば良いんだよ!？」

龍奴は経に耳打ちをした、経も龍奴に殴られて多少頭の血が抜けたらしい。



経は口角を上げて歯を剥き出しにした、不適な笑を浮かべて龍奴と拳を合わせる。

経は左手を地面に着き、龍奴は照準を合わせた、先に経が飛び出して振り被る、隆徳は左手を前に突き出して、右手を腰のあたりまで引く、経が振り下ろす前に横には龍奴がいた、隆徳はバックステップで避けようとしたが、ダイヤモンドの壁に阻まれて止まる、それと同時に経の振り下ろされた棍が視界いっぱいに広がった、隆徳は両腕でそれを防ぐが、腹に龍奴の銃口が突き付けられている。

「THE END」

龍奴は躊躇なくショットガンを連射した、全てが一点に集中する、ショットガンというのは散弾するために距離を取れば取るほど威力は減る、しかし逆を言えばゼロ距離で撃てば威力は絶大、それを連射したら常人なら跡形も残らないだろう。

隆徳は吐血しながら耐えている、隆徳はダイヤモンドの壁によりダメージは100%自分の体に反映される、ダイヤモンドにヒビが入った瞬間に龍奴は魂脈を逆回転させた。

「灼熱炎舞！」  
しゃくねつえんぶ

炎は隆徳を包んで巻き上がり柱と化した、物凄い音をたてながら炎はだんだん白くなる、白い炎というのは赤い炎よりも青い炎よりも温度が高い、鉄すらも溶かす温度だ。

経はその横で左足を上げて、左手を下、右手を上にして手を付ける、棍をクルクルと回してバッティングフォームを成した。

「4番バッター経、そのバッティングは岩をも砕く、今俺のバッドが快音を響かせる！」

経は隆徳をフルスイグして、吹っ飛ばす、隆徳は火の玉となって飛び、木を何本も折って地面をえぐりながら停まった。

「ホームラン！」

「V e r y   g o o d ! 名球会入りだな」

ハイタッチをして隆徳の方を見た、隆徳は全く動かない、経と龍奴は死んだと判断して、近寄って隆徳を覗き込んだ。

そこに転がってるのはただの炭、真っ黒になって煙を上げている、辛うじて分かるのはそれが人の形をしている、ただそれだけだ。

「うわぁ、真っ黒だな」

「……………ヤバイ」

「はっ？何がだよ、明らかにコレはあのマツチヨだろ」

「臭いがおかしい、これは人が焼けた臭いじゃない」

龍奴は炭を踏みつけると、簡単に砕けた、中は肉ではなく木。

いつから変わった、いつから俺達は騙されてた、そんな思考が二人の頭を駆け巡る、しかし答えが出る前に二人の背中に強烈な衝撃が走り、二人はボールのように吹っ飛ぶ。

今まで経と龍奴がいた所には隆徳が立っている、二人は後ろにいる隆徳に全く気付いていなかった、そして後ろから蹴られて、受け身を取れないまま飛ばされていた。

「……………クソが、いつから騙してた？」

龍奴は口から流れる血を手で拭いながら立ち上がった、経も立ち上がり血の混ざったツバを吐き出す。

「属性攻撃をしてからだ」

「やっぱりな、どうりで木の焼け方がレアなわけだ、普通ならアッシュになっても足りないくらいなんだがな」

「しかし儂も危なかった、少々ダメージを喰らいすぎたようだな、遊びは終わりにしよう、殺し合いだ」

「テメエはいちいちム力つく奴だな、二対一の時点でテメエの負けは決まってるんだよ！」

飛び出そうとした経の肩を龍奴が掴んで制止した、龍奴は睨み付ける経を無視して耳打ちをする。

「それホントか？」

「本当だ、俺の理論が間違ってるなきゃな」

「龍奴を信じるよ」

経は棍を地面に突き立てた、龍奴は手を前に突き出して、経の魂玉に手の平を向ける、手の平から炎が出て魂玉に当たる、龍奴の火がなくなっても経の魂玉は燃えている。

隆徳はそれを見て目を丸くしている、経と龍奴は感心しながら経の魂玉を眺めた。

「成功だ！」

「流石だな……」

「貴様ら、何をした！？そいつは岩のハズだ、岩が燃えるわけないだろ！？」

龍奴はチツチツチツと人指し指を左右に振った、不適な笑を浮かべて上目使いで隆徳を睨む。

「残念ながら経の魂玉はダイヤモンドなんだよ、ダイヤモンドってのは炭素から出来てるんでね。あと火が燃える条件は二つ、炭素と酸素、酸素は空気中に嫌になるほどある、炭素も十分過ぎるくらいだ。これで経の攻撃は格段に上がる、迂濶に受けよう物なら亀の丸焼きになるぞ」

経は棍を右手で地面に水平に突き上げて隆徳に向ける、龍奴は経と背中合わせになり、左手のショットガンを隆徳に向ける。

「擦り潰されたいか……」

「アッシュ（灰）に成りたいか……」

「どつちか選べな！」

経は左手でガッツポーズをして、決まったと言、耳打ちした時に打ち合わせしたらしい。

隆徳は菌茎を露にして怒りを剥き出しにした、地面から隆徳の倍近くありそうな杭が出てきて、隆徳は肩に担ぎそれを投げた、龍奴が横に行き全てを撃ち壊す、屑となり、火の粉となった埃の中から経が出てきた、経は横薙に振るが、隆徳は体制を低くして避けて経を

殴った、当たる前に龍奴が拳を撃ち、腕は大きな弧を描き隆徳の背中に当たる。

経は勢い余って後ろまで回った時に、遠心力を殺さずに下から叩き上げる、上空に上がるとその上には龍奴がいた、龍奴はショットガンで隆徳を撃つと勢いよく地面に落ちる、地面に着く前に経が隆徳を突く。

今回は逃げる暇は無く、全てをまともに喰らった、体は人形のように力無く地面に叩き付けられながら、バウンドしながら止まった。

「まだ死ななそうだな」

「アイツクソみたいに頑丈だからな、これくらいで死んだらEasyなんだけどな」

案の定隆徳は立ち上がってきた、先程よりも体はボロボロだが、鎧はすぐに新しいのに変わる、しかし何も無い顔は擦りきれて血が流れている、一回吐血した途端に物凄い殺気を放ち始めた、経と龍奴が今まで感じた殺気が気休めに感じるくらいの殺気、冷汗で体がビショビショになる、息が詰まる程の殺気、心臓を鷲掴みされているかの如く、死の方が楽に感じていた。

「貴様ら！生きて帰れると思うな！血の一滴すらも残さねえ、儂を傷付けた罪、死を持って償ってもらおう！」



## 第二十二陣

隆徳の魂脈のスピードが更に速まる、殺気と魂脈の流れの反応だけで、息が止まりそうだ。

空気はビリビリと揺れ、二人の体は冷汗が止まらない、全ての気を越えて邪気を放ってるが如く、気自体が意思を持ち、二人に襲いかかってくるような感覚に襲われた。

隆徳の体は鎧が剥がれては再生、剥がれては再生を繰り返している、口からは牙が生えて、二本足から四本足へ、そして唸る様に鳴いた時だった。

「隆盛！状態霊亀！」

隆徳の体は異常なくらい大きくなり、体は完全に亀と化した、甲羅の端はノコギリの刃の様にギザギザで、大きな牙が二本、爪も鋭く地面をエグっている。

二人は見上げながら、呆気にとられ間抜けな顔でそれを眺めている、人間の面影など毛ほど無い、それはさながら……………。

「ガ〇ラだ」

二人がボケてるのなどおかまい無しに、隆徳は前足を振り上げて二人に振り下ろした、二人は間一髪で左右に避けるが、手足・頭・尻尾を甲羅に収めて高速回転して二人を吹き飛ばす、何とか魂玉で防いだが派手に転がる。

先に立ち上がったのは経だった、経は立ち上がると大きくジャンプして、隆徳の上まで上がった、甲羅に棍を振り下ろすが全く効かない、隆徳は甲羅に乗ってる経もろとも引っくり返った、経は甲羅の下敷きになり、隆徳は逆さま、龍奴は経を助ける前に隙だらけの隆

徳の首元に銃口を突き付けた、しかし隆徳は再びひっくり返り龍奴を払い飛ばす、下にいたハズの経は鋼鉄とダイヤモンドに守られて何とか生きている。

経はとりあえず龍奴の隣に行き、隠れて作戦会議、二人が思ってた以上に強い、しかも攻撃が無茶苦茶だ。

「なんだありゃ」

「Funny過ぎるだろ！何だよあのクソ亀！？」

「キモ過ぎる、もうただの下手物退治じゃねえかよ、あんなの倒せたらウルトラ○ンなんかいらないじゃん！」

「とりあえず、アイツを殺す事を考えるぞ」

草の陰に隠れて反応を押し殺しながらの座談会の結果、馬鹿みたいに強い事しか分からなかった。

隆徳は公園の真ん中で待機している、隆徳の我慢にも底がある、地を這って唸るような声が響いた。

「貴様ら、いつまで隠れてるつもりだ？それとも怖くて出てこれないのか？」

二人は抑えて隠れている、そして唸るように笑い始めた、地震の様に地面が揺れる。

「なら良いことを教えてやろう、十子と政音の事だ」

経の顔がひきつる、龍奴は経を押さえながら隆徳に勝つ策を練っていた。



「あの姉妹は馬鹿だな、まあ子供だからしょうがないんだろうが、儂が連れて行く時『経ちゃん、経ちゃん』って二人共泣き叫んでた、でも儂が一言『お父さんとお母さんを生き返らしてやる』って言うたら素直に着いて来やがった。でもまだガキだ、弱くて弱くて、信征様の命令だからしょうがなく鍛えてやったんだが、泣くは泣く、泣き止まない時はぶん殴ったっけな……」

経は立ち上がって隆徳な言葉を遮った、龍奴はまだ隠れ続けて練っている、隆徳は喋るのを辞めようとはしない。

「辞めろって言うてるだろ！」

「政音の方は殴り過ぎて片目が潰れてな……」

「姉妹の愛つて凄いな、何故か十子の方まで潰しだしてよ……」  
「頼むから辞めてくれ」

「何回か死にかけたけど何とか今は使い物になるがな」

「うわあああがああぎやあああやあああ！」

経は頭を押さえて蹲りながら叫び出した、気が狂いそうな声で、頭を地面に打ち付けながら、龍奴の制止をふりきって無言で立ち上がった、目には涙を浮かべて、声は叫び過ぎて渴れている、目は虚ろで何も見てないようだ。

す殺す殺す殺す殺す」

経は気が狂ったようにひたすらその二文字を唱え続けた、そして経の魂玉が弾け飛んだ、龍奴は危険を感じて遠くに離れる。

隆徳も龍奴も感じていた、経の異常な魂脈の流れの速さに、そして魂玉に呑み込まれるような、魂玉を纏うようなこの感覚、龍奴は最悪の結果を想像した、‘取り付かれる’もしかしたら経の精神が崩壊するのではないか。

経の足元から這うようにダイヤモンドが上がってきた、経は微動だにせずダイヤモンドに呑み込まれてく、経は全身がダイヤモンドに包まれた。

龍奴は取り付かれたと判断した、隆徳も同じだ、隆徳の低く唸るような笑い声が龍奴の耳には入らない、しかし地響きのような音共に経を包んでたダイヤモンドが砕け散った。

「弁慶！魂玉段階終式！金剛武僧！」  
こんごうのぶそう

龍奴と隆徳は一斉に経を見る、ダイヤモンドが粒子状になり経の周りを舞っている、キラキラと光るダイヤモンドの中から頭から首元にかけて白い布を巻き、武僧の格好をした経が現れてた、肩には身の丈以上の斧が担がれている。

二人はその光景が信じられなかった、装備型が適合者の姿を変えるなど聞いた事がない、しかも式式より上があることも知らなかった。

「殺す」

それだけ言つと経は地面を蹴った、そのスピードは義経の魂玉の時と変わらない、通常岩の魂玉というのはスピードは速くて亜音速までしかあがらない、しかし今の経は音速、もしかしたら亜光速まで達してるかもしれない。

隆徳は視覚的には捉えられたが反応速度が遅く反撃はできなかった、甲羅に乗っている経の斧は真っ赤に染まり、そのまま甲羅に打ち付けた。

「ぎゃあああああ！！」

斧は甲羅にめり込み隆徳は苦しんでいる、経は甲羅の1ブロックをそのまま剥がして降りようとした、しかし地面に着く前に尻尾で弾かれる、経は軽々と受け身をとって再び斧を担ぐ。

龍奴は経の隣に来て、もがいてる隆徳を見た。

「経、多分甲羅を剥がした所は軟弱だ、そこで俺が全力でぶちこむ、援護してくれ」

「分かった」

龍奴は跳び上がり背中に乗る、しかし隆徳は回転して龍奴を振り落

とそうとする、経は斧を甲羅の端に刺して踏ん張って止めようとするが、そんな簡単に止まるようなものじゃない。

「龍奴！少し踏ん張っててくれ！」

「吐かない程度にな」

経は斧を抜いて、今度はザクザクと次々と甲羅に斧を刺す、そしてある程度切れ目が出来たところで地面に斧を突き刺す。

「金剛槍林・枷「こんぎやうりん・かせ」！！」

地面からダイヤモンドが突きだし経が付けた亀裂に突き刺さる、痛み等で止まった隆徳の背中では龍奴が構えていた。

銃口を先程経が剥がした所に向ける、そして魂脈の流れを逆回転させる。

「爆砲「ばくほう」！」

撃った瞬間に反動で龍奴の体が上空に吹っ飛ぶ、龍奴は先程攻撃した所を見るがそれほどのダメージはない、甲羅一枚だけではまだ生身には届かないらしい、龍奴は着地すると横に経が来た。

「どうだった？」

「全然だ、ふざけてやがる、一つ作戦が無くは無いんだが……………」

「何だよ？早く言えよ」

「アイツの口の中に直接ぶちこむ、いくらなんでも中身から撃てば

焼き亀になるだろ」

「じゃあ俺が口をこじ開ける、それまで悟られないように適当に挑発しててくれ」

「OK！」

経は隆徳の正面へ、龍奴は後方へ、龍奴はある程度の距離を取りながら撃ち続ける、足元中心に撃って相手の動きを徐々ににぶらせる、しかし尻尾が横から飛んでくる。

「グフッ！」

龍奴の横っ腹を直撃するが、龍奴はそのまま掴んでゼロ距離で射撃する、それなりに効果があるらしく大きな唸り声を上げている。

経は若干口が開いたのを確認してそこに向かって跳ぶ、牙に捕まることが閉じてしまい無理矢理こじ開けようとした時だった、前足が上から降ってきて地面に落とされる、肩には爪の傷がありそこから血がとめどなく流れ出す。

龍奴は尻尾につかまっていたがそれがあだとなり地面に何度も打ち付けられる、力がなくなり放してしまい宙に放り出された、地面に落ちると尻尾が降ってくる、ともに腹にくらい激しく吐血する。

経は再び跳び上がる、今度は牙目がけてではなく頭めがけて、頭の上に乗ると大きく振り被った。

「これは政音の分だ！」

右目を斧で潰した、同じように左目も潰す、一旦下に降りて口が開いたのを見計らい口の中に飛込んだ、斧をつつかえ棒にして口を閉じれないようにした。

「龍奴！来い！」

龍奴は骨折だらけの体を無理矢理起こして隆徳の口の中に飛込んだ、龍奴は銃口を喉の奥に向ける、魂脈の流れを高速で逆回転させた。

「うわあああ！爆砲連弾！！」

物凄い爆発の連弾が隆徳の口ので起こる、経は斧を手で支えて片足で龍奴が飛ばない様に押さえる、そして目の前が明るくなって地面に叩き落とされる、首と胴体は爆発で千切れ、隆徳の頭だけが吹っ飛んだ。

二人は頭という筒の中で喉とい窓から胴体だけの隆徳を見上げた、別れた体と頭は同じタイミングで砂と化す、二人は砂山の中から頭だけをだして更に大きい砂山をみる。

「勝ったよな？」

「嘘っぱいけど、クソクソ大勝利だな」

「なにそれ？」

「別に。ってか帰れるか？」

「やられたのは鎖骨だけだからなんとか」

「じゃあ送って行ってくれない？俺もう歩けねえ、内蔵も一つくらい逝ってそうだし」

「血が付くけど我慢しろよ。後、安全運転出来るほどピンピンして

ないから」

そういつて経は砂山からでる、龍奴を砂山から引きずり出して肩に担ぎ、その場から消える。

残ったのは大きな砂山と荒れ果てた公園だけ。

## 第二十三陣

巴嘩が泣き、それによって静まりかえる三人、そしてそこに場違いなアニメの騒がしい音、全てが場違いで、全てがふさわしい。

しかし更に場違いな者が部屋に土足で入ってきた、空間に出来た亀裂から眼帯を付けた二人の少女。

一人は身震いをするような殺気を放ち、一人は花が咲いたような笑顔。

小さい方の女の子は目付きが悪く、髪の毛を後ろで一つに束ねてる。美しい大人っぽい女の子は、髪の毛を簪で一つにまとめて、着物を着ている、典型的な和美人。

二人を見た途端に一番表情が変わったのは巴嘩だった、四奈は苦笑し冷汗が垂れている、次郎と晴季は状況が理解出来てない、しかし一つだけ分かる事がある、この二人は適合者で信征の傘下ということ。

「トコちゃん、政音、来ちゃったんだ」

「冥界からの使者です、素直に死んでくれないかな、いちいち雑魚を殺すのは疲れるんだよね」

「政音ちゃん、久しぶりに会った親友に向かってそれはなんですか？」

十子の方は笑顔を崩さずに京都弁で淡々と話す、政音の方は闘志剥き出して歯を剥き出しにしながら待っている。

「来ちゃったんだ、ゴメンね、今は経ちゃんいないから、私しかないんだ」



「まったく、巴姉のお人好しも治<sup>とも</sup>ってねえな。大丈夫だ、経兄のほうは隆徳の爺が今頃殺してるから」

その場に極度の緊張が走る、経と龍奴は自分では回復出来ない、かと言って今この場で誰かが行ける程の余裕はない、二人の力を祈るしかなかった。

「みなはん、私らの仲間になるなら良し、敵になるなら、残念どすが死んでもらいます」

「トコちゃんと政音こそ、こっち側に来る気はないの？」

「「ない」「」

即答の一言、表情一つ変えずに十子と政音は答えた、巴嘩以外は全員黙っている、感動の再会とは言えないこの状況に入る術は持ち合わせてないらしい。

「殺し合うしかないの？」

「巴姉は甘いんだよ！！うちらと経兄・巴姉はもう敵、どちらかがどちらかの屍を踏むまでは終わらないんだよね。分かるでしょ！？」

「でも……………」

「巴嘩ちゃん、もう無理だよ、弥益姉妹は敵、殺さなきゃ経さまが殺されちゃうんだよ」

「わかつてはるやないか四奈、裏切り者の言うことは違いますな」

「巴嘩ちゃんどうするんだよ？俺は巴嘩ちゃんが何と言おうが二人を殺すよ」

「巴嘩さん、私にはまだ分からないですけど、そこにいる二人が敵ということは分かります」

巴嘩は自分が置かれてる立場で揺れていた、大事な幼馴染みは手の届く所にいる、しかし二人は敵、殺さなきゃいけない敵。

「ゴメンね、トコちゃん、政音、私達の前に立ち憚るのは全て敵、たとえそれが幼馴染みだったとしても」

「分かってるう！じゃあココじゃ狭いから場所移そう」

「それじゃ、お先に」

十子と政音は亀裂に消えて行った、次の瞬間遠い所に二人の反応が現れる、巴嘩が皆の方に振り向くと巴嘩は泣いていた。

「大丈夫か？ダメなら俺達だけでやるけど」

「それじゃダメ、過去にけじめをつけないと前に進めないよ、辛いけど頑張る」

「巴嘩ちゃん、二人は強いよ、少しでも迷いがあつたら死ぬよ、それでも行くの？」

巴嘩は力強く頷いた、それが合図となり四人は十子と政音の元に向かった。

巴嘩達と行き違いになるように経と龍奴が帰って来た、二人は肩を落としてその場に倒れる、いつ帰って来るか分からない奴らを、ただひたすらに痛みに耐えて待ち続けるしかない。

学校が取り壊された大きな空き地に十子と政音はいた、そこは山の上で誰も近寄らない、瓦礫が多少残っている、その瓦礫の上に足を組んで政音が座ってる、隣で凜と立っている十子。

四人が現れると政音が立ち上がった、肩を回し屈伸をする、そして軽く二回ジャンプすると魂脈の流れが速まる、政音は口を大きく開ける、犬歯が一際大きいのが目立つくらいに。

「政宗！状態青龍！」

犬歯が伸びて牙となる、手の爪は鋭くなる、しかし他の馮位合体ほど体の変化はない。

伊達政宗、奥州藩の若き藩主、独眼竜といわれ、眼帯をつけていた、常に先をみていて後少し早く生まれていれば天下を取っていた逸材、死装束を着て徳川に頭を下げてを藩を守った。

それを合図にしたかの様に全員が魂脈の流れを速める、全員短期決戦を望んでいるがために急速に上がる。

「十兵衛、魂玉段階式、傘沙針雨<sup>さんさしんづ</sup>」

十子は日本古来の傘を担いでいた、鮮やかな朱と白で染められたいたって普通の傘、武器としての使い道は鈍器のみに見える。

柳生十兵衛、江戸時代に柳生新陰流の使い手、幼い頃から徳川家の剣術指南役として過ごしていた、宗家の柳生宗矩に命を狙われる不運な人生を歩んだ。

「巴！魂玉段階式式！枯雀桜刃！」

「次郎！魂玉段階式式！神牙凍刃！」

「晴明！魂玉段階式式！六芒邪符！」  
ろくぼうじゃふ

「四郎よ、我が刃となりて聖ひつじを持って咎人に裁きを下せ、死の旋律は血の戦慄によって奏でたまえ。属性馮位、聖ひつじの舞」

晴季の手には壱式とさほど変わらない呪符が握られていた、巴嘩は花が咲いたような薙刀、次郎は猫の眼のような長刀、四奈は白い球体を取り巻いている。

全員が臨戦体制にはいった、四奈は自分の球体に乗る、晴季は鷹に乗り空へ飛び上がる、地上にいるもの達は全員構えた。

「スゲエ、飛んでるよ、四奈も考えたな」

「よそ見していると危ないよ、君の相手は俺と晴季なんだから」

次郎は政音がよそ見をしてる間に斬りかかる、しかし簡単に目の前から消える、気配をたどり気づいた時は背中に爪を突き立てられていた。

「遅い、つまらない」

「ちょっと油断しすぎたかな」

次郎が頭を掻くと上から呪符が飛んできて政音に当たる、大きな爆発と共に政音は吹っ飛んだ。

「サンキュー、晴季」

「大丈夫ですか？」

「晴季のお陰でね」

次郎は手を振って政音に視線を戻す、政音は埃一つ付けずに立っていた、変わっている点といえば殺気くらい。

「それっぽちかよ？がっかりだ、面倒だからちやっちやと行くぜ」

政音は地面を滑るように走って来る、いや、実際に滑っている、政音の属性は水、足元を凍らせるくらい朝飯前だ。

次郎は液体の刃を放つが意味がない、政音の間合いに入ると両手の爪で攻撃された、次郎は何とか避けるがこっちは刀一振り、相手は両腕がある、明らかに劣勢だ、しかし上空には晴季がいる、晴季は政音の背中めがけて呪符を数枚なげる、それらは全てが刀となり政音に襲いかかる、政音は体を横回転させて全てを叩き落とす、そして右腕を大きく引く、次郎の方に突き出すと腕は龍の形となり次郎めがけて襲いかかる、次郎は何とか受け太刀するが龍の腕は刀を掴んで引き寄せた、次郎の体は簡単に浮き上がり政音の方へ飛んで行く、政音はすれ違い様に左の爪で次郎の腹を切り裂く。

「グワハ！」

そのまま政音は上空に跳び上がった、晴季に向かって上昇する、次郎はすぐには立ち上がれない。

「終わりだ」

「貴方がね」

晴季は腕を広げると政音の周り全てに刀が現れる、この状況で避けることは不可能、晴季は腕を抱くように振った、その瞬間全ての刀が政音めがけて襲いかかる、政音はいくつかは叩き落とせたが体にもいくつか当たった。

地上にドスンと落ちると体中が傷だらけで脇腹に一本だけ刀が刺さっていた、それでも政音は立ち上がる、次郎も裂けた腹を押さえながら立ち上がった。

「ハア…ハア…、まあまあだな」

「君の方が圧倒的に不利なのが分からないかな？」

政音の眉尻がピクンと動く和不敵な笑を浮かべた、歯を剥き出しにして笑う政音、それが理解出来た頃には遅かった。

巴嘩と十子は無言で向き合っている、どちらも動かない、巴嘩に關しては動けないという表現の方が妥当かもしれない、十子は傘をさ

してるだけにも関わらず隙がない。

そんな沈黙を破ったのは四奈だった、球体を刀の形に変えて次々と飛ばす、十子は一步も動かずに全てを受ける、時には傘を畳み、時には傘を広げ、まるで花火が咲き乱れるかのように傘を操る。

巴嘩は十子の後ろに自分の分身を作った、巴嘩の分身は薙刀を振り上げるとそのまま止まった、数秒すると分身は砕け散る、巴嘩は間髪入れずに斬りかかる、巴嘩の横薙が十子に当たる瞬間に金属と金属が激しく当たる音が響く、巴嘩の薙刀を止めたのは小刀、傘の持ち手には小刀が仕込まれていた。

「仕込み刀!？」

「攻撃手段は一通りじゃおまへん」

十子は巴嘩のを受け太刀している間も四奈の攻撃を全て傘で弾く、体にかすりすらしない。

巴嘩は何度も斬りかかるが全て弾かれる、さすがに止まって受け太刀するのは無理らしく、その場で回転しながら防ぐ、巴嘩は一度間合いを開けて体勢を立て直す、四奈も白い刀を球体に戻して、球体は体の周りを回り始める、十子は小刀を傘に戻す。

「ト」ちゃんやるわね」

「相手を誉める暇がありはるんなら、勝つ算段でもしたらどうですか?」

「巴嘩ちゃん、どうするの?」

「いつするの」

巴嘩は地面に薙刀を突き刺す、それと同時に地面から100振り近くの薙刀が飛び出す、まるで一面に桜の花が咲いたようだ。

「舞い散れ、花達よ」

桜の刃は乱れ散る、風に舞うように浮遊して十子を包囲する、十子は笑顔を崩さずに周りを見渡す、そして何事も無かったかのように視線を巴嘩に戻す。

「大変どすな」

言葉とは裏腹な表情、それが諦めでは無い事は一目で分かる、桜の刃は桜色に輝き、時より太陽に反射して銀色に輝く。

「桜の花びら達よ、その桜色の美しい身を、朱に染めよ！桜吹雪・阿修羅の舞！」

桜の刃は一瞬で切っ先を十子に向けて飛んで行く、十子が見えなくなった瞬間に金属音と共に刃が飛び散る、十子の周りにはいくつもの刃が地面に突き刺さっている、しかし十子に触れたものは一つもない、着物の裾すら無傷だ。

「嘘でしょ？」

「巴嘩ちゃん、しっかり！」

四奈の声で我に帰った、巴嘩の喉元には十子の小刀が当てられている、巴嘩の命は十子の気分しだい。

「巴嘩ちゃんって経の事好きでっしゃろ？」



「だったらなに？」

「若いどすなあ」

「何が言いたいの？」

「会いたいでっしやる？ココで私を倒したら会えまへんよ、経はこの世にはおらへんのやから」

巴嘩は嘲笑うかのように口角を上げる、そして魂脈の流れを逆回転させる、十子が気づいた時には巴嘩ごと十子が木の根で串刺しにされていた、巴嘩はそのまま地面に消えて行く。

「それは私の分身よ」

地面が隆起してそこから巴嘩が出てきた、しかし串刺しになった十子は水と化して消えた、十子は反対側に現れる、十子の袖には穴が空いていて、ギリギリで避けたのが分かる。

「危なかったどすな。まったく気付かなかったわあ」

「避けたトコちゃんも凄いと思うよ」

「おおきに」

十子は一礼すると、仕込み刀を抜刀する、そして傘の方を空に向かって投げる、傘は高々とあがり、空中で開いた。

「まずは弱いお人から死んでもらいます」



## 第二十四陣

十子が上空に投げた傘は、骨組みの先端から大量の針が出てきた、暗器で使われる針、急所を的確に刺せば死に至る、逆に急所に当たらなければ殺傷能力はゼロに近い。

針は上空で鷹に乗っている晴季めがけて飛んでく、晴季は政音に集中して気付く気配がない、数百本の針は完全に晴季を包囲した。

晴季がそれに気付いた時には晴季は落下していた、晴季がいた針に包囲されてる中央には次郎がいる。

次郎は晴季を針が包囲する前に気づき、自分が侵入し晴季を落とす部分だけ刀で弾き、晴季の足を掴んで地面に向かって投げ飛ばした。次郎に針を避ける術はなく、全てが命中した、次郎は針で作った人形のようになって地面に落ちた、そこにあるのが次郎だとは思えない、触れるスぺースすらない。

「次郎さん！次郎さん！！」

晴季が呼びかけても返事はない、晴季と次郎の周りは白い球体で包まれる、晴季が振り返るとそこには四奈がいた。

「まだ死んでない！晴季ちゃんも何か蘇生術は無いの？」

晴季の耳に四奈の声は届かなかった、次郎に刺さっていた針は徐々に抜け落ち次郎の素肌が見えてくる、息していない、生きてるようには思えない。

「刺される前に氷で体を覆ったから致死の急所は避けたみたい、でも運が良いのか悪いのか、今は仮死の急所にいったみたい、そんなのがあるのかどうかは分からないけど、砂にならないから死んでは

いないよ」

四奈が次郎の手当てをしてる時、十子と政音の前に巴嘩が立っていた、うつ向いて顔は見えないが頬を涙がつたってるのは分かる。

「巴姉、一人で二人を相手にするつもり？」

「……………」

「降参してこっちに来はりますか？」

「……………」

「巴姉、黙ってたら分からないだろ、死ぬかそこにいる奴らを裏切るか、簡単な事だろ」

巴嘩は顔を上げてうるんだ瞳で二人を睨む、その時始めて巴嘩が殺気を放った。

「四奈、晴季と次郎を守り抜いて」

「巴嘩ちゃん！？」

四奈は何故か出ていく気にはなれなかった、次郎がいるとはいえその気になれば助けにいける、だが巴嘩の殺気がそれをさせない。

巴嘩の魂脈の流れが急激に速まり薙刀が弾けて消えた、十子と政音はその状況が理解できなかった、辺り一帯に桜の花びらが舞い始める、そこには桜どころか木すら見当たらなく、桜の花びらが舞うはずがない。

そして無風なのに全ての花びらが巴嘩の周りで渦を巻き始める、徐

々に渦が小さくなり、完全に巴嘩を覆った。  
暫くの静寂の後、強い光と共に桜の花びらが弾け飛ぶ。

「巴、魂玉段階終式、桜森巫女」  
おうしんのみ

十子と政音が目を開けるとそこには着物姿の巴嘩がいた、巴嘩の髪の毛と瞳は桜色をしている、武器と思えるものは何も無く、佇んでいるだけ。

「桜森」  
おうしん

巴嘩が囁くように言うと、そこは桜の森が出来た、十子と政音はあまりの光景に驚き、辺りを見回し巴嘩に目を戻すとそこに巴嘩はいなかった。

「巴姉は？」

「さあ」

「巴姉！怖くて逃げたのか！？この桜はただのフェイクかよ！？」

政音は森全体に響き渡る大声で叫んだ、しかし反応は無く静寂が支配する。

政音はイライラして木に寄りかかった時、後ろから巴嘩が現れた、手には小刀が握られ喉元に刃が突きつけられている。

「な、何だよこれ？」

「コレ、なんて酷い、巴嘩だよ」

「巴嘩ちゃん！？ホンマどすか？」

「酷いなあ、幼馴染みの顔も忘れたの？」

顔は変わらない、変わったのは瞳と髪の毛の色と服装だけ、しかし巴嘩の現状に問題があった、桜の木から上半身だけ出している、木から体が生えている。

「良いこと教えてあげる、私の魂玉は装備型、本来は薙刀の形をしてる、でも今はこの森全てが私の魂玉、そしてこの森全てが私、私と魂玉は一つになったの」

「でもそこから出てるのは生身でっしやる！？」

十子は言葉と共に巴嘩に向かって針を放った、巴嘩は小刀で針を弾く、それを見計らって政音は巴嘩の手を払い抜け出した。

巴嘩は再び木の中へと消え、再び身を隠した。

「出てこいよ卑怯者！」

“ 次に出る時は殺すわよ ”

森全体から巴嘩の声が響き渡る、声だけでは相手の居場所は分からない。

「出てこないんなら隠す所を無くしてやるよ！」

政音は体制を低くした、魂脈の流れが速まり爪と牙が伸びる、体には徐々に鱗が付き始め瞳は縦に割れた、高く響くような声で鳴く。

「政宗！状態応龍！」

光と共に政音は完全に龍になった、空を飛び上空から桜の森を眺めている。

十子は木の無い所に立ち、傘をさして周りに意識を集中する。

「桜もろとも凍れ」

透き通るような声が降り注ぐ、政音は口を大きく開けると口から冷気を放った、しかし桜の花びらが集まり盾となり冷気を防いだ。

政音は尻尾で森を薙払おうとした、木を2・3本折ると悲鳴に似た叫びと共に止まった。

「何しやがった！？」

政音の尻尾には所々ピンク色に染まっている、染めているのは桜の花びら、政音に桜の花びらが刺さっている。

“言ったでしょ、桜達は魂玉だ、って。桜の花びら一枚一枚が全て刃よ”

「政音、近づかんといて！」

「けど……………」

「ええから！」

十子は森の真ん中で巴嘩の気配を探す、しかし森全てが巴嘩故に気配に包まれている、十子は辺りを見渡す。

“トコちゃん、桜は枝や花びらだけじゃないよ”

「えっ？」

十子の足に何かが絡まる、十子の足には地面から突きだした木の根が絡まっていた、木の根は十子を逆さまに持ち上げ、そのまま地面に叩き付ける。

「ガハッ!!」

「十姉!？」

十子の悲鳴と叩き付ける音しか聞こえない政育、不安と苛立ちだけが溜まるが成す術はない。

十子は何度か地面に叩き付けられ木に向かって投げられた、木に叩き付けられるとそこには巴嘩がいる、喉元に刃をつきつけられ逃げ出せない。

十子の命を握っている巴嘩は泣いていた、手元に力を込めれば幼馴染みを殺せる、そうなってしまった事に泣いていた。

「殺しなはれ」

「こつち側に来る気は無いの？来れば生きれるんだよ？」

「もう戻れないんどす」

「なら次郎の苦痛をあじわって死んで」

巴嘩は十子突き飛ばして木から出る、巴嘩の瞳は冷たく悲しい、目の前にいる幼馴染みは自分が殺す。



巴嘩の髪がなびき木がざわめく、巴嘩が大きく目を見開くと花びらが一斉に舞い散る、その様は上空からでもハッキリと確認出来た。

「桜の花びらは美しき凶器、目の前に立ち憚る者をつんざく狂気。美しく散れ、朱の桜」

花びらは渦を巻き十子に近づく、十子は避けることもせずただ座り続ける。

十子は目を瞑り覚悟した、轟音と共に近づく花びら、それが体に当たり身が切れる音、飛び散る血霧が体を朱に染める、辺り一面は桜の花びらと血で染められた。

しかし十子の体は傷一つない、十子の感覚は何かの液体に濡らされた生暖かい感覚のみ、痛みはない。

恐る恐る目を開けると十子の周りは龍で覆われていた。

「政宗!？」

「……………十姉、…ゴメン……………」

政宗は体が人間に戻った、体の花びらは抜け落ちたが体中に切傷がある、とめどなく血は流れ十子の着物を染める。

「何で助けはつたんや!？何で死にはるんや!？」

「……………何で…だろうな……………何か、眠い……………起きたら……………また、戦うから……………待って……………」

「ま、政音?政音、起きてえな……………、政音!！」

政音は十子の腕の中で息絶えた、十子が流す涙は顔に付いた血を流

し、頬を落ちる頃には真っ赤に染まる。  
二人の光景を巴嘸は無表情で見つめる、流れる涙は無く、虚無の器と化した。

「巴嘸ちゃん、もうダメ、殺して」

「……………」

「殺してよ」

「……………」

「殺せゆとりますやる！！」

巴嘸の瞳が僅かに動く、今度は確実に二人を見ている、その瞳に未だ感情はなく、目の前の光景をそのまま捉える事しかできなかった。

「消えて、もう殺したくない」

「私に生きる言いはるんどすか？」

巴嘸は無言で頷く。

「もう生きたくない、殺さないんなら死ぬ」

十子は傘から仕込み刀を抜き出し喉元に突き付ける、目を瞑り僅かに微笑む、しかし亀裂から手が伸びて小刀の刃を掴んだ、血が滴り落ち刃を伝う、無理矢理引き離し掴んだまま亀裂から出てきた。  
髪が極端に長く艶やか、顔は中性を通り越して美しい女性と見間違えうくらいの青年、それが蘭。

笑顔を崩さずに小刀を投げ捨てた、傷口を舐めて血を拭き取り呆気にとられてる十子を立たせる。

「十子さんは生きてよ、僕が悲しいだろ」

「でも……………」

「帰るよ、信征様も待つてるし」

蘭は巴嘩の事を全く気にせずに話を進める、巴嘩はさすがに嫌気がさしていた、十子がこの場からいなくなるのは良い、でも連れていかれるのは嫌、蘇った感情は矛盾していた。

「貴方誰？」

「あらら、初対面なのに漢字三文字で済ましちゃった、怖いなあ」

「話をはぐらかさないで」

「あはっ、怒られちゃった……………」

頭に手を当てて舌を出すと、一瞬巴嘩の視界から消えて至近距離に顔がある、角度によつては顔が触れ合うくらいだ。

「僕は蘭、よろしくね巴嘩ちゃん」

「何で私の……………んむっ！」

蘭は左手の親指で唇を押さえ、右手の人指し指を立てて左右に振る。

「別に可愛い娘の名前くらいは知ってるよ」

「それはとんだ変態さんなのね」

「そんな事言つとチューしちゃうよ」

「ふざけないで!」

巴嘩は蘭を思いっきり突き飛ばす、あまりの力によるけながら後退した、蘭は胸を押さえながらむせる。

「痛いなあ、でもそんなツンツンした娘も嫌いじゃないよ。次に会う時は笑ってね、僕は怒ってる顔よりも笑ってる顔の方が好きだから」

蘭は巴嘩に背を向けながら一人で話す、十子を抱き抱えてそのまま亀裂に消えていく。

巴嘩は森を消して今までの姿に戻るとそのまま倒れた、地面につく前に四奈の球体に持ち上げられる、上空には白い平な板の上に三人がいる。

巴嘩を乗せるとそのまま飛行して行った。

## 第二十五陣

四奈が家に戻ると玄関には血まみれの経と痣だらけの龍奴が倒れていた、二人は気を失っていてかなり危ない状態、次郎の治療を終えていた四奈は直ぐ様二人の治療に移った。

暫くの間治療を続けると二人の傷と痣は消えた、ピクリと瞼が動き先に起きたのは経の方だ。

「四奈か、ありがとな」

「それよりこの傷は？」

「信征の刺客が来た、それより他の奴らは？」

四奈は顔を背ける、龍奴も起き上がり見たものは四奈の泣きそうな顔と経の不安そうな顔だった。

「おい、二人ともどうしたんだよ？」

「それは俺が聞きたい、巴嘩は大丈夫なのかよ!？」

経は四奈の肩を強く揺すって問掛ける、その問いには少しだけ頷く。

「巴嘩ちゃんはショックで気を失ってるだけ。でも次郎が………」

「死んだのかよ？」

「分からない、砂にはなっていないから生きてるけど意識は無い」

「巴嘩は何で？」

四奈は今までの事を全て話した、家に十子と政音が入って来た事、次郎が晴季を守った事、巴嘩が政音を殺した事。

話を聞いた経の顔は絶望に満ちていた、自分達が倒れてる間に大変な事が起きていた。

「政音が、死んだ？」

「巴嘩ちゃんが一人で殺したのよ、終式とかいうので。しかも相手は四聖獣、傷一つ負わずに圧倒的な力だった」

経は少なからず悔しさを噛み締めていた、こっちは終式つてのを使っても二人がかりでやっとだったのに、巴嘩は一人で二人を相手にして圧勝。

しかし何よりも一番驚いたのは巴嘩も終式を使っていた事、しかも巴嘩の場合は‘武器’、という概念を大きく脱した形。

「実は経も終式を発動してるんだよ、でも普通に姿と武器が変わっただけ、巴嘩みたいに色んなものを無視した変化じゃなかった。経の場合は武器と身体能力の強化、それだけ」

「経さまの終式は足りない物を補うタイプ、巴嘩ちゃんの場合は攻撃に徹するタイプ」

「巴嘩のは防御と攻撃を兼ね備えてないか？」

「私が見た限りだと木自体は自然のそれと大差は無かった、桜の花びらが刃なだけ。だから属性が‘火’の相手には逆に不利よ、森を

燃やされたら逃げ場が無くなる上に武器まで奪われる」

「脆刃の剣って事か」

二人の会話についていけなくなった経は、その場を逃げるように退散して、巴嘩の部屋に向かった、多分巴嘩が一番辛いと思うし、巴嘩の苦しみが分かるのも自分だけだと思ったから。

四奈と龍奴の熱い討論会は終わる所を知らない、二人の議論は毎度の事ながら誰も介入は出来ない、今回の会場は玄関にて。

「俺が思うに終式の発動条件には感情の高騰が関係あると思うんだ。経の場合は幼馴染みを傷付けられた怒り、巴嘩の場合は仲間が傷付けられた怒り、必ずしも怒りが条件だとは思わないけど今回はそれだった」

「姿が変わるのは？」

「うーん、シンクロじゃないか？」

「シンクロ？」

「俺はあんまり歴史には詳しくは無いけど経の姿は弁慶の格好だと思っ、魂玉とのシンクロ……つまり同調が力を増強したんじゃないか？」

「今はそうとしか考えられないわね、まだ情報が足りなすぎるけど、あれだけの力があれば信征達に勝てるかもしれない」

その頃晴季は涙と声が渴れ、ただ次郎の側にいることしかできなかった、自分の不注意で次郎は動かなくなった、あの時自分が気付いていれば次郎は無傷で済んだかもしれない、そんな後悔しか頭にはよぎらない。

「次郎さん、起きてよ、兄だけじゃなくて次郎さんまでいなくなったら私、もう嫌だよ」

当然次郎からの返事が返って来る事はなく、人形のように眠り続ける。

しかし顔は無表情でも苦悶でもない、何故か穏やかな顔をしている、それが晴季を守れた自己満足からくるのか否かは誰も分からない。

経が巴嘩の部屋に入ると寝ながら苦しがる巴嘩がいる、経は慌ててベッドの横にいき巴嘩の体を揺する。

「どうした！？巴嘩、苦しいのか？」

「う、ううん」

巴嘩は静かに瞼を開けると視界いっぱい経の顔があつた、驚くと同時に顔が真っ赤になる、経は巴嘩が起きて思わず笑みが溢れた、その笑顔が巴嘩の心臓を直接掴んではなさない。

「良かったあ、おはよ」

「か、顔が近い」



「悪い悪い」

経はそのまま巴嘩のベッドに腰掛けた。

「全部聞いたよ」

「……………ゴメン」

「何で謝るんだよ？今はもう幼馴染みじゃないんだぞ、悔しいけど今は敵になっちゃったんだよな。それと、十子さんと政音を連れて行ったハゲは俺が殺しといた」

経は終始笑顔で話した、完全にはないが多少は巴嘩の気持ちも楽になった。

「それに巴嘩に死なれたら俺が困るし」

「えっ？」

「だから、十子さんや政音が死ぬよりも巴嘩が死ぬほうが俺は何倍も苦しいって事」

巴嘩の心臓は破裂せんばかりにポンプ運動を繰り返す、経には自分がどれだけの凄い事を言ってるのか理解出来ていない、馬鹿の愚かさを最大限にだしている。

「どうしたの？そんなに顔を真っ赤にして」

「経ちゃん、経ちゃんは何で戦ってるの？」

「狙われてるから？」

「それだけ？」

「十子さんとか政音も理由の一つだけど、やっぱりそれかな」

経は天井を見上げながら淡々と喋る、巴嘸はそんな経の横顔を見ると安心出来た。

決して頼れるというタイプの人間ではない、だけど巴嘸の目には誰よりも大きく見えた、幼い顔立ちも頼れる顔に見える。

「いつかは終わるよね？」

「終らせるよ、もう巴嘸を苦しめたくないし、傷付けたくない」

「経ちゃん？」

「俺さあ、巴嘸が悲しい顔したり苦しい顔したり、ましてや傷付いたりするだけで苦しいんだ。変だよな、俺の事じゃないのに」

「変じゃないよ」

それと同時に巴嘸は経の隣に座った、肩があたりくらいの近さでも二人は居心地が良かった。

「私もだもん」

「……………嘘？」

「嘘じゃないよ、今の私の夢は王妃だもん」

「王になれたらな」

「なれるよ、違う、ならなきゃ」

巴嘩は経の肩に頭を置く、経はそれを悟ったのか巴嘩の肩を抱き寄せる、巴嘩は細身ながらに筋肉のある経の腕が逞しく感じた。

「巴嘩、近いうちに信征どもを潰そうと思う、巴嘩はどうする？」

「どうするもなにも行くよ、変態歳那にも借りは返してないし、トコちゃんも返って来ると思う」

「でも分かってるよな、十子さんが目の前に現れたら説得しても良いど、断ったら本気で殺せよ」

「分かってる」

経達は後戻り出来ないところまで来てしまった、今回の次郎は軽傷と考えなければ耐えられない戦い、こちら側に死人を出さない方法は相手を殺す事、それが出来るか出来ないかが生と死の境界線。経は巴嘩のタメなら修羅に身を染める決心はついていた、巴嘩のタメなら親でも殺す覚悟が出来ていた。

## 第二十六陣

あの戦いから一週間が過ぎた、次郎ピクリとも動かずに未だ人形のように眠っている、変わらぬ微笑みで夢に落ち、そこには魂は無いのではないかと錯覚する。

湯煙に包まれた風呂の中で湯煙同様に晴れない顔をした晴季、あれから一週間でやつれ、いつもの元気は全くない、ため息ばかりをつきいつもどこかを見つめている、心ココにあらずといった感じた、そんな姿が誰にも痛々しくみえた。

「晴季、大丈夫？」

「……………大丈夫です」

「大丈夫じゃないよ、こんなにやつれて。あれからほとんど寝てないでしょ？」

「……………だって、次郎さん起きないんです、……………動かないんです！」

晴季はそのまま両手で顔を押さえて泣いてしまった、晴季の泣き声は反響して悲痛な和音を奏でる。

そんな晴季を見かねて巴嘩が近寄り、抱き寄せた、晴季は巴嘩に抱きつきそのまま大声で泣いた、巴嘩は晴季の頭を撫でながら背中をさする、撫でる度に短い髪の毛から水が霧となり飛び散り髪の毛だけは晴れていく。

そんな静寂を破るように馬鹿が一人堂々と風呂に入ってきた。

「おい！ずい、ボフツ！」

入って来た瞬間に四奈が近くにあった風呂桶を経の顔に投げた、経は見事に顔面でキャッチをして後ろに倒れる。

「経さま最低！せめてドアを閉めてドア越しに話して！」

顔を真っ赤にして四奈が叫ぶ、晴季は良くも悪くも経のせいで泣き止んだ、巴嘩は拳を握り、裸で無かったら今頃経は放送規制がかかるくらいの顔になっていただろう。

経はドアを閉めてドア越しに話だした。

「次郎が起きたぞ！今出るから早く来いよ」

それと同時に脱衣所のドアが閉まる音が聞こえた、晴季は巴嘩をふりほどき走って風呂を出る、巴嘩と四奈も後を追って風呂を出る。晴季は体もろくに拭かないで、バスタオルを巻いただけで脱衣所を出た。

「晴季！服！」

「ダーリンへのプレゼント？」

「また寝ちゃうわよ」

二人は和やかに談話しながら急いで着替える、晴季の着替をもって二人も走って脱衣所から出た。

次郎の部屋の前には顔を真っ赤にした経と呆れながら頭を掻いて座ってる龍奴がいる、恐らく晴季の格好を見て慌てて飛び出してきたのだろう。

「頼むから服ぐらい着させろ、あんな格好で来られたらおちおち話してられねえ」

「あれバスタオル一枚だよな？何も着てないよな？」

覗きをしたくせにうろたえてる経を後目に巴嘸と四奈は次郎の部屋に入った。

部屋にはバスタオル一枚の晴季が次郎に抱きついていて、何も聞かずにこれだけ見たら怪しい二人にしか見えない。

「良かった次郎さん！」

「晴季ちゃん、寝てる間に過激になったね」

晴季の頭にはクエスチョンマークが浮かんで、そして自分の体を見てフリーズした、徐々に顔が赤らみ、最終的には目の下のハートが消えるくらいに真っ赤になった。

「晴季、服持つてきたから着替えてきなよ」

「……………はい」

晴季は走って部屋を出て自分の部屋に入って行った、舞い上がり過ぎて自分がどのような格好をしているか自覚が無かったらしい。

「何か晴季ちゃんやつれてたね、俺のせいでしょ？」

「否定はしないわよ」

「みんながいるって事は勝ったんでしょ？」

「トコちゃんには逃げられちゃったけど」

「みんな元気なんだからそれで良いよ」

「晴季ちゃんが元氣の間違いでしょ？」

次郎は苦笑いを浮かべてその場を流した。

再び走って晴季が入って来た、今度はダボダボのシャツにデニムのミニスカート、いつもの格好だ。

晴季は次郎のベッドの下に座って、寝ている次郎と視線を合わせた。巴嘩と四奈は氣を使って部屋を出た、外にいる二人を退けるついでに。

「ゴメンね晴季ちゃん、悲しい思いさせちゃって」

次郎は晴季の頭を撫でながら言った、晴季はその大きな手をずっと待っていた、そして晴季のハートの上を一筋の涙がつたう。

「あれ！？泣かしちゃった？」

「違うんです、嬉しくて」

「なら泣かないでよ、可愛いハートが台無しだよ」

「はいっ！！」

次郎はベッドから降りて晴季の前に座った、久しぶりに動いたからかきこちない動きだ。

「な、何ですか？」

「ちょっと風呂入ってくる、一週間でしょ？汚いからさ」

次郎はタンスから自分の服を取り出して腕に乗せた。

「ちょっと待っててね、まだ色々話したいから」

「はい」

次郎はそのまま部屋を出た、一人取り残された晴季は体を洗う意味を考えていた、別に話すだけなら良いんじゃないか？

「もしかして、エッチな事とか！？いや、それはダメですよ、間借りしてる身、それに昼間の情事はいけません」

勝手に妄想を膨らませ勝手に顔を真っ赤にしている晴季、次郎が純粹に風呂に入りたいとも知らずに、晴季は顔を真っ赤にしながら自分の妄想癖と戦っていた。

「次郎さんいけません、まだお昼です。……………え？はい、カーテン閉めてくれるなら、……………優しくして下さい」

ついに現実と妄想の区別がつかなくなった、晴季の意外な妄想癖につつこむ人は誰一人としていない。

一人で顔を真っ赤にして、一人で恥ずかしがってる晴季を見つめる



風呂上がりの次郎、晴季は次郎に気付くと湯気が出んばかりに顔を赤くした。

「可愛い趣味があるんだね」

「いや！それは違います」

「そっか、俺の勘違い？」

「は、はい！」

「そう。……………あとパンツ見えてるよ」

ミニスカートで座ってたから見えたらしい、晴季は破裂しそうな心臓との格闘に追われて、隣に次郎が座った事に気付かなかった。

「元気になった？」

「はい」

「良かった、顔色も良くなったし」

次郎の笑顔をみて何故か晴季は罪悪感にさいなまれた。

自分のせいで傷付いたのに未だに自分の事を心配してくれる、そんな守られてばかりの自分が嫌だった。

「次郎さん、ごめんなさい。私のせいでこんな思いをさせちゃって」

「別に良いよ、俺も晴季ちゃんもこうやって生きてるんだから。それに晴季ちゃんにまで死なれたら、悔やんでも悔やみきれないよ」

「私もです、兄も次郎さんもいなくなったら、私、私……………」

次郎は90度向き直って晴季を抱き締めた、晴季の本日二度目の相手は次郎、巴嘯よりも堅い胸板、でも何よりも大きく包み込んでくれる、晴季は次郎の腕の中で自分の居場所を見つけた。

「俺はもう晴季ちゃんを悲しませないよ、だから晴季ちゃんも無理しないで。晴季ちゃんが辛かったように、俺も晴季ちゃんに何かあったら辛いから」

「約束ですよ」

「うん、約束」

晴季は強く抱き締められた、次郎の心臓の音が聞こえる、次郎が生きてる音が聞こえる、晴季も次郎の大きな背中を小さな腕で出来る限り引き寄せた、空白の一週間を埋め合わせるように。

## 第二十七陣

次郎も意識を取り戻し、日常は平穩へと戻った、平穩過ぎるくらいにあれから何も無い、その異常に気づいたのは龍奴ただ一人だけだった、四奈や次郎も違和感はあったが頭の中で現状に甘んじて思考を制止していた。

いつものようにアニメを見ている四奈の横で新聞を読む龍奴、その表情が心なしかイラついて見える、貧乏揺すりも酷くそれに四奈が気付かない訳がない、チラチラと龍奴を気にしながらテレビの画面だけを見続けた。

龍奴は新聞をクシャクシャにして机に投げ捨て、代わりに財布を取ってソファアを立つ、四奈はテレビを机の上のリモコンで消し、龍奴を見たときにはリビングを出ていた。

四奈が龍奴を追って玄関に行くのと靴を履いてる龍奴がいた。

「何処に行くの？」

「何処でも良いだろ」

「私も行く！」

龍奴が靴を履き終る頃に四奈は靴を履き始め、龍奴が玄関を出た頃に四奈は靴を履き終った。

龍奴は足早に門を出る、四奈は小さい体のために小走りになりながら龍奴の後ろを追う、龍奴は歩くのが速いために四奈が歩調を合わせるかと小走りになる、他人から見たら怒った親を追う娘に見える。

龍奴は四奈の事を避けるように足を速める、四奈は耐えかねて走って龍奴の腕を掴んだ、しかし龍奴は振り向き様にふりほどき怒りに充ち溢れた眼で四奈を睨んだ、四奈は一步退いて龍奴から視線を反

らした。

「何で逃げるの？怖いよ」

「うるせえな、ついてこなきゃ良いだろ！」

「何で怒ってるの？」

「分からねえのかよ！！？」

龍奴は前のめりになりながら怒鳴りつけた、四奈は顔を背けて目に溜った涙を拭い震える。

「分からないよ」

「分からねえなら教えてやるよ！」

次郎は四奈の胸ぐらを掴んで目線を合わせた、四奈の目に写ったのはいつもの龍奴ではなく、怒りに感情の全てを任した龍奴が目の前にいる。

決して口喧嘩になっても手を出さない龍奴が今は四奈の胸ぐらを掴んでる、どんな事があっても冷静を崩さない龍奴が、今は冷静さなど感じられない。

「おかしいと思わないのかよ！こんだけクソみたいに時間が経ってるのに何も無いんだぞ、普通なら一週間もしないうちに何かしらの攻撃を示す奴らが、今はクソみたいに何も無いんだぞ！何でそんなにヘラヘラしてられるんだよ、戦力を蓄えてるかも知れないんだぞ！」

四奈はついに泣き出し、頬をつたう涙を手の甲で拭うが、拭いきれなかった涙が龍奴の手に落ちる、しかし龍奴はそんな四奈を前にしても怒りはおさまらない。

「泣いてどうにかなると思ってんのかよ!？」

「ち、違うよ。龍奴怖い」

龍奴は舌打ちと同時に四奈を突き放した、四奈は尻餅をついて龍奴を見上げる、龍奴は肩で息をしながら四奈から遠ざかっていく、四奈は走って龍奴を背中から抱きついた、あまりの出来事に龍奴は振り払う事ができなかった。

「みんな不安なの、もしかしたら大切な人が死ぬかもしれないんだよ」

「俺には関係ない」

「関係ある!」

四奈が始めて強い口調で言い放った、龍奴は徐々に平静を取り戻して来た。

「俺には大切な人なんていない、大切にしてくれる……」

「私がいるよ、私は龍奴がいなくなったら悲しいよ」

「それは仲間としてだろ、経と俺は違う」

「そうね、私は経さまの駒、経さまへの気持ちは愛じゃなくて忠誠

でしかない。でも龍奴は違う、信征の傘下にいた時からいつも龍奴は私を助けてくれた、半哉と戦った時も、信征と戦った時も龍奴は私を助けてくれた。私、そんな龍奴が側にいるだけで幸せなの、だからいなくなったら悲しい」

龍奴は黙ったまま動かなくなり肩が震えている、四奈は龍奴の背中に顔を埋める。

「……………四奈」

「だから行かないで」

「だからってあいつらを野放しにできない、俺の目的は馴れ合いじゃない」

龍奴は四奈の腕をほどいて振り向いた、龍奴の目には眼を真っ赤に腫らして不安な顔をしてる四奈が写った、体は震えて瞳は虚無を写す。

龍奴は気持ちが揺らぐ前にその場を離れようとした、しかし四奈は龍奴の前に立ち、龍奴の行く手を阻む。

「頼むからどいてくれ」

「やだ！龍奴一人じゃ行かせない、龍奴は死んじゃダメだよ」

「今でも遅いくらいなんだよ、でも早いうちに手をうつとかないと」

「なら私も行く、龍奴一人でなんか無理だよ」

「死ぬのは俺一人で十分だ、四奈は家でみんなに言っとけ」龍奴は

怖じ気付いて逃げた』って」

その瞬間、四奈は龍奴の頬を叩いた、龍奴は斜め下を向きながら頬を押さえて呆然としている、今度は四奈が怒りを露にする。

「馬鹿じゃないの！一人で正義ぶって、一人で死ぬなんてずるいよ！仲間を信じようよ、私に話してよ……………！？」

四奈は話してる途中に体を包まれた、四奈は龍奴に抱き締められていた、龍奴の体は小刻みに震えている、四奈の心臓は人生で一番のポンプ運動を繰り返し、その音が聞こえてないか不安になりつつ、四奈は龍奴に支えられていた。

「もう分かったから、でも俺が死なないからってお前が死んで良いわけじゃないからな」

「分かってるよ。もう帰ろう、帰って龍奴が思ってる事伝えようよ。いつも私と龍奴が話して終りでしょ、話せばみんな分かってくれるよ」

「怪力家政婦、お気楽スモーカー、ダボダボ貧乳、クソ馬鹿（巴嘸、次郎、晴季、経の順）、約一人を抜いて話せば通じるからな」

四奈は経の呼び方と自分の呼び方が気になってしょうがなかった、苦笑している四奈を後目に龍奴は元来た道を歩いていた、四奈は後から追って龍奴の腕を掴んだ、龍奴は歩調を遅めて歩いた。

## 第二十八陣

経はいつものように部屋で雑誌を読んでいる、ベッドの上で横になり雑誌を天井に向け。

巴嘩は洗濯物の山が入った籠を持ちながら経の部屋に入ってきた、経はそれに全く気付かず雑誌を天井に向け続ける、巴嘩は経の横に立ち雑誌をとりあげた、しかし経は微動だにせず腕を上げ続けた。巴嘩はゴキブリを潰すように雑誌を丸めて経の顔を叩いた、経はやっと反応をしめして目を真ん丸にして巴嘩を見つめた。

「何考えてるか分かんないけど、洗濯物干すわよ」

「四奈に頼めよ、アイツならテレビ見てて暇だろ」

「四奈はいないよ、それに経ちゃんの方が暇そうなんだけど」

「でも……………」

巴嘩は片手で籠を持ち、片手で経を担いで部屋を出た、経はジタバタして離れようとするが、巴嘩の力に経が敵うはずがない。

屋上に上がると経は投げられた、そして目の前に洗濯物の山が置かれ、見上げると満面の笑があった。

「干すよ」

「……………」



経はあぐらをかいて、明後日の方を見て無言で拒否する、しかし襟元を掴まれそのまま持ち上げられ、視線が同じ位置まで持ち上がる。

「干すよね？」

笑顔の中に般若が隠れてる、経はそれが痛いくらいに分かった、それに逆の手は腰のあたりでボキボキと骨を鳴らす。

「干させてください」

「よろしい」

ドスンという音と共に経は巴嘩の手から落ちる、経は尻をさすりながら洗濯物を干し始めた、経はこんな具合で巴嘩に強制されたため洗濯物を干す手際が良くなっている。

二人でやったために洗濯物の山があつという間になくなった、経は終るとその場に倒れこみ空を見上げる、屋上なので風が澄んでいて経はこの風が好きだった。

巴嘩はいつもならそのまま下に降りるのだが、今日は何故か経と一緒に空を見上げた。

「気持良い」

「なあ、何かおかしいと思わないか？」

「何が？」

「分かんない、だけど何かが引つ掛かるんだよな」

経と巴嘩は空を見上げたまま考えた、経の直感というか野生本能が感じたらしい、龍奴が抱えてる不安と同じものを。

「……………分かんね!」

経は上半身だけ起き上がり頭を掻きまくった、久々に頭を使ったせいか急速に疲れたらしい。

「経ちゃん、私が死んだらどうする?」

「何だよ急に?」

「今度の戦いでみんな無事に帰ってこれるとは思えないから。もしかしたら私が、って事もあるじゃない」

「巴嘩が死んだら…………、とりあえず殺した奴を死にたくなるくらいボコる、それでから殺すかな」

巴嘩はその人のためにサクリと殺してやろうと、エグい事を考えてたりする、経も巴嘩も行き着く先は同じ、殺さなきゃ死ぬ世界に踏みいれている、巴嘩は内心押し潰されそうな不安にさいなまれてた。

「それ以前に巴嘩には死なせないけどな」

「頼もしい」

「マジだからな、巴嘩だけは絶対を守る、だから巴嘩も絶対に諦めるなよ」

経は巴嘩の頭にポンと手を置いて笑ってみせた、巴嘩は経の発言に鼓動が高鳴って聞こえてないか不安だった。

「トコちゃんはどうするの？」

「殺す、説得してダメならな。言っちゃ悪いけどもうアイツは俺らとはもう違う、敵でしかないんだよ」

「多分トコちゃんは戻らないよ」

「第一次郎をあんなにしてお晴季を泣かした、それだけでも死に値するの、巴嘩を悲しませた、いくら幼馴染みでも許容範囲ってものがある、十子さんには悪いけど俺には仇に値する」

経は自分の中で割りきれていた、猪突猛進の経には自分達にたてつけば敵、それだけはハッキリしていた。

しかし情に流されやすい巴嘩は、全てを受け入れるには少々思い入れが強すぎた。

「巴嘩、割りきれ、幼馴染みの十さんはあの時に死んだ、俺らが殺すのは敵だ」

「分かってる、分かってるけど……」

巴嘩は言い終わる前に経の胸の中にいた、経の胸は大きく、不安や悲しみが涙へと昇華され溢れだした、巴嘩は経の服をしっかりと握り、経を離さなかった。

「ゴメンな、こんな戦いに巻き込んだじゃって」

「大丈夫、でも大事なもので失いそうで怖い」

「大丈夫だ、もう失うものなんてない、これ以上苦しむ事はなくなるよ」

「でも私怖い、トコちゃんと戦ったら、トコちゃんを殺すより自分の死を……………！」

巴嘩が言い終わる前に経が自分の唇で巴嘩の唇を塞いだ、巴嘩は突然のキスに驚いたがすぐに受け入れた、そして少し長めのキスの後、涙を拭って笑顔見せる。

「コレが終わったらまたキスして」

「分かった約束する」

## 第二十九陣

龍奴と四奈が帰ってくると、全員リビングに招集された、経達の中ではココが食堂兼作戦会議室になっている。

先に次郎と晴季が降りてきて席に座った、暫くしてから経と巴嘩が座る。

全員が揃うと龍奴は腕を組んで背持たれに身を預けた、龍奴の真剣な表情から全員がただ事では無い事は察していた。

「お前ら、何かおかしいとは思わないか？」

「何かが引つ掛かるけど、その何かが分かんないだよな」

「私は経ちゃんに言われてもピンと来なかった」

「私も分かりません」

全員が首を横に振る中一人だけ険しい顔をしている、龍奴はそれを見逃さなかった。

「次郎なら分かるだろ」

「静か過ぎるんでしょ？」

「そうだ、クソ信征達の攻撃がピタリと止んだ、今までこれでもかとはかりに攻撃してきた奴らが、今は何もしてこない。俺の考えとしては、戦力を大幅に削られたアイツらは戦力強化してるんじゃないかと思う」

龍奴が淡々と話していると、次第に全員の顔が険しくなってきた、自分達が知らない間に大変な事が起きていた。

「でもそれだけじゃ無いんじゃない」

「じゃあ他に何かあるんだよ？」

「こっちは考えられないか？アイツはいつも攻めて来て失敗してる、それなら俺らがシビレを切らして攻めて来るのを待ってる、言わばこの平穩は餌つても考えられるだろ」

龍奴は悔しがりながらも納得した、二人の説はどちらにしても攻めこまない事には始まらない、特に龍奴の説が正しかった場合は今すぐにも攻めなければ危険である、しかし次郎の説が正しかった場合は作戦が必要になる、動きにくい状態になってしまった。

「とりあえず、こっちの戦力と向こうの戦力を把握しておかないとな。」

こっちはココにいる六人だけだ、経の両親はあてにならないからいないもの考える。

次に向こう側の戦力は、信征、信征の女、十子、十子を助けに来た蘭、歳那、勇治、総羅、人数的に見ても圧倒的に不利だ、それにまだ蘭、信征、その女の戦力は未知数だ、アイツらは仲間に自分の能力を見せないらしい、だから四奈が知らないのも納得出来る。

今俺らが勝つには、一人が二人殺す、もしくは事前に一人を殺しておく、後は一対全員、だが最後のが一番効率が悪い、連携なんてとれないし疲れが溜まる一方だ、一対一が理想的なんだが勇治は次郎でも刃がたたなかった、スピードが速い経をあてたいんだけど、ココで経を使うと後が辛い経と勇治の相性は悪い、一度四聖獣を倒した巴嘯も却下だ、奴らは三人一組で動いてる、巴嘯の技は馬鹿デ

カイから全員を飲み込む、そうすると総羅がいるから圧倒的不利な立場になる。

そこでだ、四奈の魂玉の檻に三人一気にぶちこむってのはどうだ？  
四奈の檻は生粋の魂玉だから壊すのは経だけにしか出来ない、それで四奈は自分を守る事が出来る、更に形成逆転の利もある、向こうの残りは四人なのに対してこっちは五人だ、だけど……………」

「生存率が大幅ダウンでしょ」

龍奴が言葉を濁したところで次郎が横から入ってきた、全員の希望の光が若干薄くなった。

「四奈は最高の回復要員だ、それが動けないとなると回復出来る奴がほぼ皆無に等しい、巴嘯は回復出来るけど戦力として必要不可欠だ、晴季の回復は時間がかかるから戦場向きじゃない、それに晴季の場合は援護要員として必要だ、四奈の場合防御と回復を両方兼ね備えてる。

つまり、四奈がいないと死ぬ確率は40%以上上がる、四奈がいれば腕一本くらいで済むだろうがな」

その場の空気が重くなる、晴季に至っては目に涙を溜めている、あの龍奴ですら生きて帰る気になっていたのに、この状況だと全員が生きて帰れる確率はほぼ皆無。

「考えててもしょうがない。明後日攻める、場所は把握済みだ、今から逃げてても誰も咎めない。ただし生半可な気持ちで行っても死ぬだけだ、行きたい奴だけ来い」

その言葉を聞くと一目散に次郎が立ち上がった、リビングから出る次郎を晴季が追って行く。

経はため息と共に立ち上がり巴嘩を見る、巴嘩も立ち上がり経と一緒にリビングを出た。

残された龍奴と四奈はいつものようにソファーに座ってアニメを見ている、いつも見ているアニメでも四奈は楽しめない。

「みんな来るかな？」

「分からねえ、来て欲しいってのと、来ないで欲しいってのが半々なんだよな」

「何で？」

「一人だった俺にやっと出来た仲間だ、アイツらに死なれると辛い、誰も死なない手を何百回も考えた、でも四奈だけが確実に生き残る術しか浮かばない。私情で作戦決める策士って最悪だよな」

龍奴が笑っている、四奈は今日始めて龍奴の笑顔を見た、あまり笑う事がない龍奴が四奈の事で笑う、それが四奈にとっては嬉しかった。

「今なら次郎が何もしなかった理由が分かる、今後悔してるんだ、このままみんなで逃げたい」

「大丈夫だよ、みんな無事に帰って来れるよ」

「絶対に死ぬな」

龍奴は四奈を抱き締めた、抱きしめながら考えていた、もしかしたらこれが最後になるかもしれない、龍奴にもやっと思えるべき者が見つかった。



次郎と晴季は次郎の部屋にいた、ベッドに身を預けて次郎はタバコを吸っている、晴季は涙を堪えながらうつ向きで動かない。

「逃げてもいいよ、正直俺は晴季ちゃんに戦って欲しくないから」

「大丈夫です、覚悟は出来てます」

「いや、俺が出来てないんだよね、今回の戦いは100%晴季ちゃんを守るか、って言われたら‘うん’とは答えられない、だから晴季ちゃんを失う覚悟が出来ないんだ」

「大丈夫です、次郎さんのタメなら死にません、いや死ねません」

晴季は小さくガッツポーズをしながら言い放った、そんな晴季を見て次郎の頬に涙がつたう、拭おうともせずに天井だけを見上げて泣き続けた。

「どうしたんですか？」

「晴季ちゃんは強いなあ、って思ってた」

次郎は起き上がると同時にタバコの火を消した。

「俺なんて怖くてしょうがないのに、押し潰されそうなのに」

「もう泣かないでください」

晴季は次郎をそっと抱き締め、次郎の大きな顔を胸に埋めて、次郎は力無く晴季に身を預けて続けた。

経と巴嘩はいつものように屋上にいた、快晴で風も強く最高のひなたぼっこ日和なのに、経の顔は曇り続けている、いつになく落ち込んでいる経を慰める術を巴嘩は持ちあわせていなかった。

「巴嘩、守れなかったらゴメン」

「大丈夫、経ちゃんに守ってもらうほど弱くないから」

「そっか、そうだよな」

「経ちゃんは自分の事に集中して、それで余裕があったら他の事を気にして」

経は何も言えずにただただ空を見上げるばかりだった、そして頭を掻いて立ち上がった、その表情は心なしに晴々して見える。

「もうごちゃごちゃ考えない！守りたい者は守る、敵は殺す、それだけだ！」

「経ちゃん」

「巴嘩、俺の守りたい者はお前だ、絶対に死なせないからな」

「期待してるよ」

経は手を差し出して巴嘩を立ち上がらせた、それと同時に自分に引き寄せ抱き締めた。

### 第三十陣

経達は今、辺りに何もない丘の上にポツンと建っている大屋敷に呆気をとられていた、経の家の2倍以上あるつかという屋敷、1階建てなので屋敷でおさまるが、2階3階と続けば城と言われても否定は出来ない。

そしてそれ以上に目を引くのが大量の適合者、お世辞にも強そうには思えないが、下手な鉄砲数撃ちや当たる、これだけいれば傷くらいは負う、体力の消耗も激しい。

次郎はタバコに火を付けて紫煙を吐いた、龍奴はため息と同時に頭を掻いて、一歩前に出た。

「俺と次郎でクソ共は片付ける、すぐに追い付くから行ってる」

「そうそう、こんなの準備運動だよ」

「なら俺も……」

「経と巴嘩は戦力だ、四奈は否が応でも行かせる、晴季は援護のタメに欠かせない。残るは俺と次郎だけ、大勢相手なら俺ら二人の方がやりやすい」

「分かった、すぐに来いよ！」

経は巴嘩達を引き連れて屋敷の中に入って行った。

二人はそれを見守ると意識を適合者達に向けた、二人は魂脈の流れを速めた。

「龍馬！魂玉段階式！砲散火千！」

「小次郎！魂玉段階式！神牙凍刃！」

二人は魂玉を開放して龍奴は右手のショットガンを脇に抱えて、右手を上げた、次郎は右手だけで刀を持って左手を上げる。

「タイムリミットは？」

「15分くらいじゃない」

「それじゃVery easyだ、10分」

「了解」

二人はハイタッチをして左右に散った。

次郎は敵の真ん中に飛び込んで、踵を軸にして一回転をして液体の刃を巻き散らす、傷口から凍って一列目の適合者が碎け散る。

しかしその後ろの適合者達が氷と化した適合者を踏み潰し、波となつて襲ってくる、次郎が地面に手を当てると氷の棘が適合者を串刺しにする。

ひやひや  
「氷刺舞曲」

次郎が地面に刀を突き刺すと地面から氷の棘が次々と出てきた、棘はもぐら叩きのように出ては消え出ては消えを繰り返す。

近距離に寄って来た者は直接斬り、中間距離にいる者は液体の刃で凍らせる、遠距離にいる者は氷の棘で串刺しにする。

しかしどれだけ圧倒的な力を見せても、怯む事なく適合者達は立ち向かってくる、それに加え何処から湧いて来るのかと聞きたくなるくらいの量。

龍奴は歩きながら距離をとってショットガンを乱射する、最前列にいる者は蜂の巣になり倒れる、しかしその後ろから溢れるように適合者がやってくる。

その時だった、後ろから適合者が龍奴に斬りかかって来た、龍奴は半身になりながら左手のショットガンの銃身で適合者を殴った、銃身は当たった瞬間に爆発をして適合者はバラバラになる、手薄になった右側からは上段に構えた適合者が走ってきてる、龍奴は手首を少し上げて顔を撃ち抜く、がら空きになった後方から来た適合者は顔面に回し蹴りをいれた、クリーンヒットと同時に足は爆発して顔が無くなる。

「雨火散々（うひさんざん）」

龍奴が地面にショットガンを突き刺して引金を引くと地面から弾が出てきた、そのまま龍奴が連射すると適合者に当たり、体はバラバラになり地面に転がってるのは死体ではなく肉塊、まさに地獄絵図そのものだ。

しかし龍奴はその肉塊を見て顔色が変わった、一步後退して次郎の方を見て確信した。

「次郎！」

「分かってる！」

龍奴が次郎を呼ぶと、次郎は龍奴と近寄り背中合わせになりながら二人は遠距離攻撃を放ち続ける。

「これはヤバすぎるぞ！」

「そうだね、コイツら……」

「取り付かれてる」

次郎と龍奴はどれだけ殺しても生き返る、次郎はこのような奴と戦った事がある、その時は経がいたから勝てたが、今はいない。

「どうする！？」

「コイツら細胞単位で殺さないと生き返る、だから動けなくするくらいしか出来ない」

「次郎は出来るか？」

「俺のはもって一時間だ、時間が足りなすぎる」

「俺は一体ずつなら出来るけど、これだけの人数はキツイな」

「ってか何でこんなに取り付かれてるんだよ！？」

「王には魂を無理矢理魂玉に変える力があるって聞いた事がある、多分このために作った傭兵だろ」

龍奴と次郎の額には汗がにじんできた、しかしいきなり適合者達は遠ざかって行った、丘をぐるりと囲むように並び止まる。

次郎と龍奴は理解出来ずに周りを見回していると空間に亀裂がはいる、中からは3人の男が出てきた。

「おい龍奴君、策士策に溺れるとはこの事だな」

「ココまで計算が狂うと泣きたくなるな」

龍奴と次郎の前に現れたのは勇治達だ、一対一でも勝てないのに三対二なのど自殺行為に等しい。

歳那は周りを見渡して巴嘩がないことにあからさまにショックを受けた、勇治は殺気を放ち臨戦体制っていった感じだ、総羅に至っては地面に座って放棄しはじめた。

「何だ、二人だけか!？」

「そつだよ、だから逃してくれないかな？」

「無理ですね、巴嘩さんと呼ばば考えても良いですが」

「クソが、新手のリンチだろ」

「経がない。勇治、僕は経を捜すから勇治と歳那で相手してて」

「それは名案ですね、私も巴嘩さんを捜しに行つて来ます」

「それはさせないよ」



歳那と総羅の前に信侍と謙恋が立ち塞がる、勇治達は驚きを隠せないようだが、更に驚きを隠せないのが次郎と龍奴だ、あれだけ行かないと言い張ってた二人が助けにきている。

「どいてよ、邪魔」

「それは無理だ、息子にはやらなきゃいけない事がある、それを邪魔するなら僕が君を殺すよ、総羅君」

「これはこれは、また美しい人が、私はこれで満足です」

「あらあら、美しいだなんて、お世辞でも嬉しいわ」

龍奴と次郎は今の光景に呆気をとられていた、ただしこのままできっと自分達が四聖獣を相手にしなければいけないことになる。

「何でココにいるんだよ、あんたら逃げたんじゃないのかよ？」

「それは君達の甘えを無くすためだ、最初から見捨てるわけないだろ」

「ねえ勇治、このおじさん退けて、僕は経を捜す」

「総羅、超大物が連れたぞ、そいつは風林火山の信侍だ、メチャクチャ強いぞ」

「ホントに！おじさん強いの！？」

「少なくともこの中で一番だな」

総羅は無邪気に飛び跳ねて喜んでいる、それを見て龍奴と次郎は本格的に四聖獣が見えてきた、今このまま逃げたい思いでいっぱいだった。

「謙恋さん、四聖獣対決するのはどうですか？」

「白虎さんですかあ」

「駄目ですよ、貴方は私の相手です」

龍奴と次郎は重いため息をついた、そして二人で聞こえないように逃げる算段を考えている。

しかし背を向けてしゃがんでる二人の間に勇治が割り込み、肩を組んで顔を出した。

「どうした？二人でも良いぞ」

「わわ！何だよテメエ」

「いやあ、総羅も歳も消えちまったから暇でさあ」

龍奴と次郎が後ろを向くと既に誰もいなかった、龍奴は頭を抱えてうなだれる、次郎はタバコの火を消して、新しいタバコに火を付けてため息混じりの紫煙を吐いた。

「龍奴君、どうする？」

「早くしなを助けに行きたいんだよな」

「お、お前四奈の男か!？」

「それは俺も初耳だよ」

「否定はしねえよ」

「四奈にもやつと男が出来たのか、あのガキも女になったんだな」

「龍奴君、祝いの一服する？」

「俺はタバコはやらねえ」

「あんたはどうする？」

「じゃあ一本だけ」

勇治は次郎からタバコを受け取り火を付けて貰った、一気に吸い込み一気に紫煙を吐いた、……………。

「……って、おい!!」

3人は一気に間合いをとった、一瞬場が和み過ぎてお互いの関係を完全に忘れていた。

しかし何故か3人とも笑っている。

「何か戦いたくねえな」

「しょうがねえだろ、俺らは敵だ」

「3人共生きてたら飲みに行こうよ……………」

「  
「  
「  
3人共生きてたんな  
」  
」  
」

### 第三十陣（後書き）

ついにラストスパートです、これからは殆どの話にアクションシーンが入ると思うので、作者自身かなりの消耗作業です。最後まで読んで頂けたら光栄です、コメントなどいただけるとありがたいです。

### 第三十一陣

経達は屋敷の中に入っていた、中はいたって普通の居住スペースとなっていて、普通の和室があるだけだ。

四奈はその中の一つの部屋の前で立ち止まった、4枚の障子で仕切られている和室、四奈は障子を左右に動かしている、経と巴嘩と晴季にはその行動が理解出来ずにいた。

暫くするとカチツ、という音と共に畳が不自然な移動を繰り返し、畳の下から地下に続く階段が現れた。

「からくり屋敷だ」

「経さま気を引き締めて、ココからは敵の巢窟よ」

4人の間に緊張が走る、四奈を先頭に全員が地下に入って行った。

そこは岩が掘っただけの簡単な穴になっている、しかし無数に枝分かれしていて、案内人がいなければ確実に迷うくらいだ。

四奈は躊躇無くひたすら進み続ける、しかし全員の足が一つの扉の前で止まった、そこから反応がある。

「トコちゃん？この扉の向こうにトコちゃんがいる」

巴嘩は吸い込まれるように入ろうとした、だが経が後ろ手を掴み止まった。

「経ちゃん何するの？」

「巴嘩には分からないのか、この殺気に。多分今の十子さんは説得出来ない」

「それなら私がこの手で殺す」

「巴曄には無理だ、優しすぎる」

「私が行きます」

晴季が扉の取っ手に手をかけた、晴季も同じように殺気を放っている。

「この人は次郎さんを苦しめた、だから私はこの人が許せない、巴曄さんには悪いですけど私が殺します」

「出来るのか？」

「やります」

「分かった、絶対に死ぬなよ」

「頑張つて晴季ちゃん」

晴季は扉を押して中に入って行った。

四奈はそれを見て再び走り始める、先程の晴季の殺気で3人の緊張感はピークに達していた。

それに加えて徐々に強まるえたいの知れない禍禍しい反応、全員は薄々気づいていた、この反応が信征の物だという事に。

ある程度走った時だった、急に反応が背後に現れた、全員が振り向くとそこには蘭が立っている。

「迷ったら調度こんな所に出ちゃった、ラッキー」

「……………蘭」

「ああ！四奈ちゃんだ、久しぶり。それとその女の子は……………、政音ちゃんを殺した人だね」

今まで笑っていた蘭が巴嗶を見た瞬間、殺気の満ちた険しい顔になった、ビリビリと震えるような殺気、生半可なものでは無い。

「君をこの手で殺したいのは山々だけど、僕はやっぱり四奈ちゃんと戦いたいなあ」

再び笑顔に戻る、しかし女の子のような笑顔の中に押し潰されそうな殺気がある、それに気付かない者はいなかった。

「でも私は貴方にかまってる暇は無いの」

「何で、調度3人じゃん、後は信征様と秀美さんだけだよ、僕と戦わないで誰と戦うの？」

蘭は顎に人指し指を当てて首を傾げた、その瞬間に3人の背筋は氷ついた。

「どういう事！勇治達はいないの!？」

「勇治さん、歳那さん、総羅君は一目散に外に出ていっちゃったよ」  
3人は確信した、龍奴と次郎の絶対的な死を、作戦が失敗した上に圧倒的劣勢に立たされた事を。



「なら良いわよ、蘭を殺して上に加勢に行く。経さま、巴嘩ちゃん、信征と秀美は任したわよ」

四奈は蘭に先導されるがまま、近くの部屋に入って行った、その瞬間経は壁を思いっきり叩き悔しさを露にする、巴嘩が声をかけようとした瞬間に凄まじい殺気を放った。

「誰も死なせない」

経はそう言つて、巴嘩でも追いかけるのがやつとの速度で走りだした、信征の場所は目を瞑つていても分かる、異常なまでの反応が道しるべとなっていた。

巴嘩は経の背中を見ながら恐怖すら感じていた、今まで感じた事が無いくらいの経の狂気、その証拠に経の周りで乱気流が発生している、魂脈が抑えきれずに暴発し始めた。

そして一際大きな扉の前で二人は立ち止まった、そこからは信征の反応が溢れ出ている、経は躊躇なく蹴破った。

大きな扉が軽々と開き、中には椅子に座った信征とその隣で凜と立つ秀美がいる、経が手を上げて手の平を信征達に向けると風の刃が飛んだ、刀も無しに風の刃を放った、信征は人指し指を突きだした、風の刃が当たった瞬間、風の刃は何事も無かったかのようにただの風と化した。

「何を焦る？」

「早くお前らを殺して次郎と龍奴を助ける」

信征は鼻で笑い、高らかと声をあげて笑いだした。

「死ぬのに助けられる訳ないだろ、それともこの私を殺すというの

「は本気なのか？」

「本気も本気、大マジだよ」

「それなら秀美、邪魔は連れてけ」

はい、と言言つと信征の隣から秀美が消えた、次に現れた時は巴嘩の腕を握っていた。

巴嘩は力ずくで振り払い一本後退する、秀美はその間も不気味な笑を崩さず巴嘩を睨み続けた。

「ココでは信征様に迷惑がかかります、そちらの部屋へ」

秀美が指した先には扉がある、経が巴嘩を見ると巴嘩の手は震えていた。

「巴嘩、すぐに助けに行くから心配するな」

「大丈夫、こんなおばさんに負けるのは、歳と無駄な色気だけで十分」

秀美の額に青筋がたっている、秀美は怒りを抑えながら部屋に入って行く、巴嘩もその後を追って部屋に行った。

残された信征は椅子から立ち上がり、ポケットから黒い玉を取り出した、それを指で遊びながら経を睨んでいる。

「これが何だか分かるか？」

「知るかよ」

「外にいた私の傭兵を操作している物だ、奴らは全員取り付かれているが故に、私がこのように操作しなければ暴れて無差別に殺しを始める」

その瞬間信征は玉を人指し指と親指で握り潰した、経でもそれが何を意味するか分かった、時間が経てばココまで適合者が流れ込んで来る。

「お前、仲間が死んでも良いのかよ!？」

「コレで死ぬような駒ならいらぬ、それに奴らは仲間ではない、傭兵の一部でしかない」

「ふざけるな！テメエは絶対に許さねえ！この場で殺す」

経の魂脈の流れが急速に速まる、密閉状態で風など入って来ない部屋の中で、暴風が吹き荒れる、バチバチと空中で静電気が暴れる、岩の壁は所々に風で切られた傷がつく、信征はそれら全てを手前で消し去る。

暴風が徐々に縮小され経の周りに集まる、そして経の上で雷が発生し経に当たった。

「義経！魂玉段階終式！遮那天狗！」  
しゃのてんぐ

埃が晴れ、そこから出てきたのは平安時代の貴族の衣装に顔の側面に天狗の面、髪の毛は伸び後頭部で結んでいる経、右手には薙刀のような形状をしているが柄の所に刃がついている、一つの柄の両端に刃がついた武器だ。

「コレが終式か、始めて見た。シンクロとはよく言ったものだ、丸

つきり遮那王、いや、牛若丸、源義経と言った方が分かりやすいな」

「ごちゃごちゃうるせえな、死ぬ前に博識をアピールしてんじゃねえよ」

「それくらいで私に勝てると思ったか？」

信征の魂脈の流れが一気に速まる、そして徐々に信征の体が上空に浮き上がり手を広げた。

「信長、私の前で汝の力を示せ、我が肉体を媒介とし魔王の力を示せ。漆黒の闇に染まりし我が血肉、敵の血で洗い流せ。属性馮位、闇の僮」

## 第三十二陣

謙恋は歳那に先導されながら歩いていて、歳那は歩いてる時に、チラチラと笑顔で振り返る、しかしその中には殺気が満ちている、謙恋はそれを笑顔で受け止め、笑顔と共に殺気を返す、この二人の笑顔だけで小動物がショック死するくらいだ。

歳那はある程度歩くと足を止めて振り返った、その瞬間に二人の魂脈の流れが速まる、無言の内に戦いは始まっていた。

「歳三さん、我の水刃となりて敵を美しく散らせ、目の前に立ちばかる醜き肢体を華麗なる水氷が蒼く染めるだろう。属性馮位、水の輪廻」

歳那の足元は水浸しになり体の周りに水の柱が渦巻く、前よりも格段に魂脈の流れが速まり、魂脈を逆回転させずにこれだけの水を発生させられる、それだけで驚異だ。

「謙信、状態朱雀」

謙恋の背中から真っ赤で大きな翼が生え、謙恋は上空に飛び上がった、羽は一枚一枚が燃えていて、羽ばたく度に火の粉が飛び散る。

上杉謙信、戦国時代に軍神と呼ばれ、毘沙門天を深く信仰する戦いに長けた天才、武田信玄とはお互いを認め合ったライバルでもある。

「美しいですね」

「ありがとう」

謙恋は言葉を放つと共に、翼を大きく羽ばたかせた、翼からは無数

の火の粉が飛び、全てが歳那に襲いかかる、火の粉は歳那に当たる前に、歳那を覆った水の柱に当たり消えた。

歳那が柱を5本に別けて体の周りを渦巻いた時、柱と柱の間から謙恋が現れ鋭い爪を振り上げた、歳那は間一髪の所で避けたお陰で切れたのは服髪の毛だけ、謙恋が口を大きく開けると口から火を噴いた、歳那は水で防いだが所々に火が付いてる。

蒸発して薄くなった柱を一つにまとめ、謙恋に放った、謙恋は体を翼で覆い、柱は当たった瞬間に全てが蒸発して消え去った。

翼を広げた時、謙恋は無数の水の柱に取り囲まれていた、柱は一斉に謙恋に襲いかかり、謙恋が防御するには時間が足りなかった、全てをまともに受け、謙恋は地面に落とされる。

「ボロボロですね、その傷付いた体も美しい」

「す、少し、ナメすぎた、みたいですね」

謙恋の服は原形を留めていない、スカートは短くなりやつとその役目を果している、上は殆どゼロに近い、下着姿と言っても過言ではない。

「こんな姿で女性を放置するのは紳士として許せません、死ねば羞恥心も無くなるでしょう、さようなら」

謙恋の周りに水が渦巻き、全てが謙恋に収束した瞬間、謙恋の体は大きく燃え上がり、凄まじい蒸気を上げて水は消えた。

蒸気で辺り一面が真っ白になる、気温は一気に上がり視界はゼロ、そして謙恋の羽はたく音と共に水蒸気が晴れた。

「謙信、状態鳳凰」

水蒸気が完全に晴れた時、上空には大きな鳳凰もとい謙恋がいた、真つ赤な火の羽が全身を覆い、太陽のように輝いている、尻尾の羽は虹色に輝き虹色の炎が巻き散る。

「なんと美しいのだろう、鳳凰とは」

「さようなら」

心に直接入り込むような高い声で喋った、先ほどと同じように翼を羽ばたかせた、翼から出た火の粉が歳那を襲う。

「しかし考えが浅はかだと美しくないですね」

「それは貴方ですよ」

歳那は水で体を覆った、火の粉は水に当たると、ジュツという音と共に火は消えたが中から羽が現れ、歳那の体をつんざく。

そして謙恋は口から火を吹くと、地面は燃え上がり歳那を取り囲む、歳那は水で応戦するが全てが無に帰す、火は歳那へと移り歳那は片膝をつきそのまま倒れた。

謙恋は殺しはしなかった、元の姿に戻り火傷をした眺めて泣いた。

信侍はスキップをしている総羅を呆れながら追っていた、無邪気にはやしゃぐそれはただの子供にしか見えない、とても戦いを好むようには思えない。

信侍は複雑な気持ちで目の前の少年を見ていた、信侍も父親だ、息

子よりも小さい子供はこれから自分と殺し合いをする、複雑な気持ちで歩いていた。

総羅はある程度行った所で止まった、それに合わせて信侍も止まる。

「総司！三炎天鵲！」

「おいおい、気が早いな」

総羅は刀を引きずりながら信侍に近寄って来た、ある程度近付くと素早く動き信侍に斬りかかる、信侍は間一髪のところでは避けた。

「早くしようよ」

「はあ、しょうがないな」

信侍は頭を掻いて大きく深呼吸した、息を吐きながら目を閉じて、数秒止めて目を見開いた。

「信玄！風林火山！」  
ふうりんかざん

信侍の右手には軍配が握られていた、極普通の軍配に「風林火山」と書いてある。

武田信玄、甲斐の虎と言われた戦国時代の将軍、武田の騎馬隊は戦国最強と呼ばれ、織田信長に負けるまでは無敗だった、家臣に情が厚いのも有名な。

「手加減しないでよ！」

総羅は10m以上離れた場所から一步で間合いをつめた、総羅は素



早い攻撃を連続で放つが全て防がれる、総羅は脇腹に蹴りを入れるが信侍に片手で掴まれ、そのまま後方に投げられた。

総羅は木を何本か折りやつと止まった、しかし何故か投げたハズの総羅が後ろにいる、信侍は軍配で薙払うと、総羅は歪み消えた。

「残念でした」

本物の総羅は後ろにいて刀を振り上げている、信侍は避けきれずに肩口を少し斬られ前方に逃げた。

総羅は刀を引きずりながら笑っている。

「幻影か」

「大正解、おじさんって弱いね」

「本気出したら君死んじやうよ」

「大丈夫だよ、僕も本気出すから」

総羅の手元から魂玉は消えた、総羅の足元は燃え始め、手元には火が集まっている。

「総司！魂玉段階式式！三影蜃鵲！」

信侍はめんどくさそうに魂玉を消した、風が吹き荒れ、砕けた地面が舞い上がる、木の葉が舞い、半分が火の粉と化した時、全てが信侍の右手に集まった。

「信玄！魂玉段階式式！嵐森炎岩！」  
らんしんえんがん

信侍の手には、嵐が青、森が緑、炎が赤、岩が茶で書かれた黒い軍配が握られていた。

総羅は信侍が開放すると同時に一瞬で間合いをつめた、信侍に向かって半身で突くと刀は空を斬った、総羅が気付いた時には背中に軍配が当てられていた。

「嵐の如く」

嵐の文字が光ると、圧縮された風が一気に放出されて総羅は人形のように吹っ飛んだ。

信侍は総羅が地面に着く前に軍配を地面に当てた。

「森の如く」

総羅が吹っ飛んだ先には大木が現れた、大木は大きくしなり総羅を薙払う、総羅は野球ボールのように信侍の元に戻って来た。

信侍は体制をそのまま、総羅が寸前に来るまで堪えた。

「岩の如く」

信侍の手前まで吹っ飛ばされた総羅は、地面から隆起した岩で上空に飛ばされた、信侍は総羅が上昇するのより速く上昇する。

「君を殺したくない、だから寝ててくれ」

信侍は上昇してきた総羅の腹に軍配を押し当てた、総羅は辛うじて意識が残っている、何とか刀を握っている状態だ。

「炎の如く」

軍配から火柱が出てきて総羅を直撃する、総羅は火柱ごと地面に叩き付けられ、吐血して意識を失った。  
信侍は総羅のすぐ横に着地して肩に担いだ、目には涙が浮かんでいる。

「謙恋ちゃんは無事かな」

「勇！状態麒麟！」

勇治は麒麟になった、最初から開放していた次郎と龍奴は構えた、二人共この戦いに勝てるかどうかは不安だった、唯一の願いが信侍と謙恋、二人が早く勝って助けに来るのを願うのみ。

「クソが、いきなりMaxかよ」

「しょうがない、龍奴君、あれをいくよ！」

「OK！」

次郎は手の平を勇治の上に向けた、次郎の手からは茶褐色の液体が出てきて、勇治の上で何かに当たったかのように雨と化した。  
勇治が茶褐色の液体でビショビショになった時、龍奴はシヨットガ

ンの銃口を勇治に向けた。

「直通、アッシュ行きだ」

龍奴はショットガンを連射した、勇治の体に当たった瞬間に全身に火が燃え移り、勇治は全身が火に包まれた。

「水は水でも可燃性の水だよ、若干しぶといやつね」

「麒麟の丸焼きになりな」

「甘い、甘過ぎる！」

勇治は後ろ足だけで立ち上がり、地面に前足をたたき付けると同時に吠えた。

その瞬間体の炎は飛び散り、焦げてすらいない体が露になった。

「あの体毛防火性らしいよ」

「馬鹿だろ」

「今度はこっちからだ」

勇治が地面を一蹴りすると、地面は大きくえぐれ凄まじい勢いで二人に近づく、二人は間一髪で両方に別れた。

勇治は着地した前足を軸に龍奴の方を向いた、次郎は薙払うように振られた尻尾を防御しきれずに吹っ飛ぶ。

龍奴が次郎に気を取られていると、薙払うように勇治の前足が飛んできて、次郎と同じ所に吹き飛ばされた。

「おかえり」

「ただいま」

「俺は肋骨を三本ほど」

「俺は肩を20針くらいかな」

龍奴は切れた肩に手を当てた、ジュツという音と共に傷口が焼けていく。

「クツ」

止血は完了したがあまりの痛みで意識が飛びかけた。

次郎は龍奴が落ち着いたのを見計らって勇治の顔に飛込んだ、口元めがけ薙払う、しかし次郎の刀は勇治に噛まれて止まった、その瞬間に勇治の顔の中央に龍奴が飛び乗り銃口を向ける、勇治は顔を大きく振って二人を落とすと、落とした所に前足を叩き付ける。

前足を上げた時には既に二人の姿は無く、右側に龍奴、左側に次郎がいた。

龍奴はショットガンを連射して次郎は液体の刃を放ち続けた、勇治は顔色一つ変えずに大きく吠える、その瞬間に地面から岩が隆起して、二人は上空に吹き飛ばされた、勇治は龍奴の方に前足を振り上げる、龍奴は前足に向かって銃口を向けてショットガンを連射した、ショットガンの反動を使い前足を何とか避けた。

勇治の尻尾は次郎を薙払おうとする、しかし次郎は体を氷で覆い尻尾を滑らしていなした。

二人は再び一ヶ所に集まり勇治と睨みあう、三人とも息が上がり始めていたその時、次郎が後ろに反応を感じて反応を薙払う、まっ二つになったのは適合者だった、後ろからは更に取り付かれた適合者

の群れが来る。

「おい勇治！このクソどもはどういう事だ！？」

「知らねえ、コイツら無差別に襲ってやがる」

二人が勇治を見ると取り付かれた適合者達は、勇治をも襲っていた。

「どういこと？勇治の言う事なら聞くんじゃないの？」

「ストライキか？」

「馬鹿か！勇治、取りあえず休戦だ！」

「ああ。もしかしたら信征様が放棄されたとか？」

「どういうことだ！？」

三人は適合者の群れを排除しながら話している、しかし全力で戦った後なので三人とはいえ苦戦を強いられている。

「俺らはある玉を持つてるからコイツらに命令出来る、その大元を持つてるのが信征様だ」

「もしかしてクソ信征はそれを放棄、又は壊したとか！？」

「恐らく、そうなたらコイツらに誰も命令出来ない、ただの無差別殺人マシーンだ」

「クソ信征は仲間を裏切ったのかよ！？」

「そうだな。それより、この事を他の奴らにも知らせる、俺の背中に乗れ」

次郎と龍奴は一度顔を見合わせ、勇治の背中に乗った、勇治は前足を大きく薙払い、近くにいた適合者を一掃してその場から消えた。

### 第三十三陣

信侍は総羅を担ぎながら歩き続けた、僅かに反応がある謙恋と歳那の元へ。

謙恋と歳那の反応が薄いという事は、謙恋は勝ったのだと信侍は確信していた。

信侍と謙恋は無闇やたらに適合者を殺さない、ただし圧倒的力を見せて、今後の戦闘意欲を削ぐ、今までずっとそういう戦い方をしてきた。

信侍が謙恋を見た時、驚きの次に恥じらいが襲ってきた、下着姿と差ほど変わらない謙恋が歳那の隣で座っている。

信侍は総羅を歳那の隣に寝かせ、自分の上着を謙恋に渡した。

「お疲れ」

「信侍さん、肩の傷は大丈夫？」

「謙恋ちゃんよりはね」

謙恋は笑いながら信侍の上着を着た、信侍は謙恋の傷を見て悲しみがこみ上げてきた。

しかし一つの巨大な反応が二人の感慨を払拭した。

「この反応は！？」

「信玄！魂玉段階式式！嵐森炎岩！」

信侍は魂玉を開放して軍配を構えた、その先からは凄まじい勢いで



走って来る麒麟、もとい勇治。

「炎の」……」

「ちよつと待てえ！」

勇治は寸前で横になりながら止まると、勇治の背中から次郎と龍奴が降りて来た、信侍と謙恋はその光景が理解出来ずにいた。

「おい二人！説明してる時間はねえ！風林火山は俺と来い、朱雀はその二人とそこでへばってる二人を回復させる！」

「いやあ、僕にはいまいちこの状況が理解出来ないんだけど」

「とりあえずクソヤバいんだよ！百聞は一見にしかずだ、見てこい！」

龍奴が怒鳴るように後ろを指すと信侍は嫌々走って行った。

それを確認した途端、次郎と龍奴は緊張の糸が切れ、その場に倒れた。

「大丈夫！？」

「いや、軽く限界かも」

「俺も焼いたは良いが、死にはしないけど意識がヤバイ」

「謙信！状態鳳凰！」

謙恋は鳳凰になって4人の上に飛び上がった。

「せいえんいゆ聖炎慰癒」

謙恋が羽ばたくと、虹色の火の粉が舞い散る、それが体に当たるとジユウという音と共に傷が消えていく。

全員の傷が完治すると、総羅と歳那が起き上がった、総羅と歳那は3人を見た瞬間、距離を取り魂脈の流れを早めた。

「おい、ちょっと待て！今は休戦だ！」

「そんなの信じられると思ってるんですか？」

「なら何でお前らを回復した？それにコレを見ろ、勇治から預かった」

龍奴はポケットから黒い玉を取り出した、それは取り付かれた適合者達を操る玉、総羅や歳那も同じ物を持っている。

「もしかして勇治を？」

「馬鹿か、あんな化け物倒せるわけないだろ。反応を探れ」

歳那と総羅は集中して勇治の反応を捜す、勇治の反応は強弱してる事から戦ってる事が分かる。

「どついう事ですか？」

「お前の傭兵が暴走しはじめた、恐らく信征が操作を放棄したらしい、このままだと俺らもお前らも全滅だ、だからそれをお前らに食い止めて欲しい」

「君達は？」

「大事な人を守る」

歳那と総羅は笑いながら歩きだした、そして龍奴と次郎とすれ違う時に拳を合わせて消えた。

「謙恋さんも行って下さい、流石にあの量はキツそうですから」

「無事に帰って来るのよ」

「当然だろ」

3人はその瞬間別々の場所に消えた。

信侍は勇治に先導されて走り続けた、そして信侍の目に入ったのは大量の暴走した適合者達、これらが全て取り付かれるとなると信侍と勇治でもキツイ。

「信征様が操作を放棄しやがった、コイツらを放っておくとお前の息子もその仲間も、俺らの仲間も全員殺されちまう」

「それならしょうがない。でも他の奴らには誰が説明する？説明しないと普通に殺し合うぞ。もし説明出来ても言うこと聞くか？」

「恐らく殺し合いしか道は無いだろうな、俺や歳、総羅は戦う事だけを目的に信征様……、信征にヘイコラしてた、でも下にいる奴らは信征崇拜者だけだ、寝返りは無いだろ」

二人は話ながらも凄まじい勢いで傭兵を倒し続ける、二人の力ではこれくらいの敵を倒すのは息をするより容易い事、しかし無限となると話は別だ、時間との勝負になる。

「ねえ、これどうかならないのかな？」

「無理だな、取り付かれた者を救えるのは王のみ、他力本願だが経に任せるしかない」

「息子に頼る親つてのも情けないね」

かなりの時間戦い、二人共息があがってきた。

二人の反応スピードが落ち始めた時だった、適合者の群れに氷の雨が降る、適合者は串刺しになり一瞬動きが止まった、その瞬間に地面に炎が走り適合者が燃え上がる。

「勇治さん、助けに来ましたよ」

「お助け隊」

「歳！総羅！丁度良かった、さすがに疲れた」

「僕も、バトンタッチだね」

「お二人共休んで下さい」

勇治と信侍が下がると総羅が群れの中に飛込んだ、総羅は凄まじい勢いで適合者を斬り落としていく、それを後ろから援護する歳那、力は勇治と信侍には劣るが連携がそれを上回る。

歳那と総羅が戦っている時は、勇治と信侍は謙恋の回復で休憩、逆に勇治と信侍が戦っている時は、歳那と総羅が回復、これで無限の敵に無限の連鎖で対抗し続けた。

## 第三十四陣

晴季は大きな扉をくぐると、広い空間の中に凜と佇む十子がいた、十子は晴季に笑顔を見せると晴季は怒りの表情で返す。

「巴嘩ちゃんがきはると思ったんやけど」

「私じゃ不満ですか？」

「はい、死にかけたお人やからな」

「卑怯な手を使わなきゃ人を殺せないような人には殺されません」

晴季は笑顔を作った、二人の笑顔は表面的なもので、本意には殺気がこもっている。

「口だけは達者なんだすなあ」

「お互い様」

二人の笑顔が徐々に崩れてくる、顔の筋肉はこわばり痙攣を始めた。二人の笑顔は限界に達して表情と殺気がシンクロした、その瞬間に二人の魂脈の流れは速まり、十子の周りには針のような雨が降り手に集まる、晴季の体は梵字が走り体を覆い尽くす。

「清明！魂玉段階式！六芒邪符！」

「十兵衛！魂玉段階式！傘沙針雨！」

二人は同時に魂玉を解放した、晴季の手には数枚の呪符が、十子の

手には傘が握られている。

晴季は5枚の呪符を上投げると5体の鷹が現れ、手に持った呪符を刀へと変える。

先に5体の鷹が一斉に十子に襲いかかる、十子は自分の手前で鷹達を針で射抜く、針が当たった鷹は爆発して目の前の視界を皆無にする。

晴季は爆風の波に乗って十子に斬りかかった、十子は傘で防御すると傘の柄から仕込み刀を引き抜き斬りかかる、晴季は左手に呪符を持ちそれを小刀に変えて逆手で持ち、十子の仕込み刀を防いだ。

「やりますなあ」

「当然です、真っ向勝負なら負けません」

「そう………」

十子は晴季の目の前で水と化し消えた、晴季が次に反応を感じたの自分の背後だった、晴季は前方に逃げたが、逃げ切れず肩口に切傷を負った。

「甘いどすえ」

「やりますね、気を抜いたら危ないですね」

晴季は肩に呪符を当てると一瞬で止血された、晴季は右手には刀を持ち、左手には逆手で小刀を持った、十子は右手に逆手で仕込み刀を持ち、左手には傘を持っている。

「震えてはりますよ」

「笑ってるのよ、貴方が弱すぎて」

「なら笑って死んでや」

十子が飛び込んで来ると、晴季は右手で呪符を投げた、十子は傘で呪符を防ぐと当たった瞬間に爆発する、十子は煙の中から現れ仕込み刀で斬りかかる、晴季は小刀で防ぎ刀を振るが傘で止められてしまった。

二人はその状態で停止すると、晴季の口から呪符が出てくる、呪符は上の歯に付き牙へと変わった。

晴季は小刀と刀で十子の腕を大きく弾く、そのまま晴季は十子の肩口に噛みついた、十子とはっさにバックステップで避けるが、肩口を大きく牙で切り裂かれる。

晴季はその場で立ち止まり牙を解除した、口に付着した血が十子の恐怖をかきたたせる、晴季は呪符で血を拭くと遠くへ投げた。

「獣どすな」

「大切なモノを守るタメなら獣にも鬼にも悪魔にもなります、……  
………なんなら死神にでも」

晴季は手に持っていた刀と小刀を解除した、そして違う呪符を持つとそれは大鎌と化す、晴季の体に不釣り合いな大きさが不気味さを際立たせる。

「陰陽師は本来鬼を退治する者、なんなら鬼神にでもなりましょうか？」

「私には般若にしか見えへんのですが？」



「そう、般若がお好みで」

晴季は両手で鎌を持ち大きくジャンプする、十子の前方で一回転して遠心力を殺さずに十子を薙払った。

十子は何とか受け身をとって晴季を見ると目の前にいた、晴季は上段から斬りかかるが十子は何とか避ける。

手に持っている鎌の刃を上に向け、刃と棒の結合部分を地面に叩き付ける、叩き付けた反動を利用して、大鎌の柄で十子を上空に打ち上げた。

反動が有り余り地面に突き刺さった大鎌を踏み台にして晴季も飛び上がった、晴季は手に持っている呪符を紐に変えて十子の足に絡み付けた、晴季は紐ごと十子を投げ飛ばす、十子は強く地面に叩き付けられ、紐は呪符へと解除された。

「どうですか、般若の力は？」

十子は片膝をつきながら立ち上がった、口から唾混じりの血を吐き出して、体の埃を払い落とした。

「まだまだ可愛い般若どすな」

「何がですか？」

「すぐに気が緩むところどす！」

十子は一瞬にして晴季の目の前まで移動してきた、仕込み刀による素早い一閃を、晴季は十子の頭の上を通り避けた。

十子は傘を上投げると傘から大量の針が出てきた、その全てが晴季めがけて襲いかかる、晴季は両手に刀を作りいくつか針を打ち落とすが、数本は体を貫通した、どれもが急所を外しているが、動け

なくするには十分だった。

晴季はその場に崩れ、立ち上がるのもやっとの状態だ、十子も然り、肩からは血が流れ、骨は何本か折れている、二人共立ち上がるのがやっとだった。

「お互いボロボロだな」

「そうですね」

「でも貴方は動けない、私は動け………！」

十子は体を動かそうとするが、何かに縛られているかのように体が動かない、体が動かないだけではなく、魂脈の流れの制御も出来ない。

「ハハ、アハ、アハハハハハハハハハ！」

「何をしはった！？」

「五芒星発動」

十子が地面に手をつくると、大鎌、血を拭った呪符、刀だった呪符、紐だった呪符、そして晴季の足元の呪符、全てが光り、線で星の形を成す、星を囲むように正五角形が頂点を結び、更に円が囲む、その中央にいるのが十子。

「今までののは全てが囷です」

「離しなはれ！卑怯でっしゃろ！」

晴季は指を絡ませて日本語とも捉えられない不思議な言葉を発し始めた。

その瞬間に線は強く光り始め、呪符からは光の槍が現れた。

「離せ！離しいや！」

晴季は全く聞く耳持たず、否、話せる状況下にいない。

「頼んます！離してえや！もう貴方達には手を出しまへんから！……  
……頼んます……」

十子は涙を流しながら十子に助けを求めた、しかし晴季は顔色一つ変えずに唱え続ける。

「もしかして何も喋れへんとか、そこから動けないんとちゃいます？」

晴季の表情が微妙に変わるが唱え続けた、しかし十子はその一瞬を見逃さなかった。

「凶星どすな、ほならコレで」

十子は口から針を出した、そしてその先は晴季の心臓に向いている、このまま十子が針を吹けば良くて相討ち、最悪の場合は晴季のみの死が待っている。

「さいなら」

針は真っ直ぐと晴季の心臓めがけて飛ぶ。

「（大丈夫、後少し、私は助からないかもしれないけど、この人は殺せる。ごめんなさい次郎さん、約束守れませんでした）」

針は晴季まで1mの所まで来ている、晴季は目を閉じて唱え続けた、最後の最後に浮かんだ顔は次郎だった。

「っ！」

針は刺さった、とめどなく血が流れる、貫かずに途中で止まっている。

「晴季ちゃん、大丈夫だよ」

晴季が目を開けると次郎がそこには立っている、針は次郎の腕に刺さり骨に当たって止まっていた、晴季はあまりの事に一瞬口が止まった。

「大丈夫だよ、続けて」

晴季は無言で頷くと再び唱え始めた、次郎は壁に体を預けて腕から針を抜いた、十子は絶望感から涙も渇れ、うなだれている。

「五芒槍星！」

呪符から現れた5本の光の槍は、十子めがけて真っ直ぐと飛んでいく。

「経ちゃん、巴嘩ちゃん、ゴメンね」

十子の最後の言葉は経と巴嘩に対する謝罪だった、槍は十子の体を貫くと、真っ赤な血と共に最後の一粒の涙が流れた。

十子は数秒経ってから砂と化した、その瞬間に晴季はその場に倒れた、体からは血で真っ赤に染まっている。

次郎が晴季の元に駆け寄ると、晴季は次郎に呪符を渡した。

「次郎さん、この呪符を傷口に……」

「分かった、でも……」

「服の上からじゃなくて地肌をお願いします」

晴季は体を起き上がらせ、真っ赤に染まったシャツを脱いだ、その

下は下着のみ、次郎は顔を真つ赤にしながら傷口に呪符を貼っている。

「後ろにも」

晴季は力なく次郎に倒れこんだ、次郎は晴季を抱き締めるように後ろ側に呪符を貼っていく、晴季は力は無いが致命傷も無い。

次郎は晴季に呪符を貼り終わると、自分の上着とシャツを脱ぎシャツを晴季に着せた。

「こっちの方が良いでしょ？」

「ありがとうございます」

晴季は後ろに倒れそうになるが、今度は次郎が受けとめた、次郎は覆うように晴季を抱き締めて目を閉じた。

「次郎さんに助けられてばかりですね」

「晴季ちゃんを守るって言ったから」

晴季は笑ってそのまま目を閉じる、二人は目を閉じてお互いが生きている事を実感していた。

### 第三十五陣

四奈と蘭は部屋の中央で立ち止まった、蘭は振り返り、前屈みになりながら四奈の顔を覗きこんだ、四奈はそれに笑顔で答える。

無邪気な蘭の笑顔は女性そのもの、顔立ちも全てが男性と言われなければ気付かないくらいだ。

四奈には時間が無かった、四奈がいかに早く助けに行くかで生存率は大きく変わる、それ故に四奈は焦っている部分もあった。

「四郎よ、我が刃となりて聖<sup>ひつ</sup>を持つて咎……………ん！」

四奈が魂玉を解放させようとした時、蘭は四奈の両頬を挟み、そのままキスをした、四奈は驚きのあまり一瞬止まったが、蘭を突き飛ばしそのまま間合いを取った。

「何するの!？」

「四奈ちゃんがいつもやってた事でしょ?こんな風に」

蘭は一瞬で四奈の目の前から消え、再びキスをした、今度は四奈の唇を割って舌が入って来た、四奈は突き飛ばそうとしたが、強く抱き締められそれが出来ない。

四奈が解放された時、四奈の目には涙が浮かんでいた、四奈は涙を拭いた後、自分の唇を袖で拭った。

「最低」

「何で?敵には出来て僕には出来ないの?」

四奈には以前と違い大切な人がいる、故に以前の感情とは違うモノがあった。

「僕ね、四奈ちゃんの事大好きなんだよ、もう君の事をこの手でメチャクチャにしたいくらい、誰よりも四奈ちゃんの事を愛してる。だから四奈ちゃんをこの手で殺したいんだ、誰かのモノになる前に、誰かに苦しめられる前に、僕の前で最高に苦しんで死んで欲しいんだ。ダメ？」

「却下ね、今のキスで私のビンゴブックの断トツトップ、最優先抹消人物に見事なりました。……さようなら」

四奈は殺気と魂脈の流れが高まる、蘭は全く怯まずに笑顔を崩さず魂脈の流れを速めた。

「四郎よ、我が刃となりて聖ひじりを持って咎人に裁きを下せ、死の旋律は血の戦慄によって奏でたまえ。属性馮位、聖ひじりの舞」

四奈の周りには球体が現れ、四奈の周りを取り巻く、蘭が笑顔で拍手をしていると、蘭の身体中に電気が走る、電流は地面を叩き地面を砕く、蘭が左手を上げると電流は弧を描いた。

「蘭丸！魂玉段階式！雷射嵐貫！らいしゃらんかん」

蘭丸の左手には大きな弓が握られている、全体が刃になっていて、役割は弓だけではない。

森蘭丸、織田信長の小姓であり織田信長の寵愛を受けていた、甲斐武田氏の死後、美濃国岩村城の城主に任じられる、信長に命じられ本能寺に火をつけ、本能寺の変で戦死した。



「本気なのね」

「当たり前でしょ、四奈ちゃんは誰にも渡さないよ」

蘭は四奈の目の前から消えて、四奈の背後に現れた、弓を引き矢を放とうとした時、横から来た球体を避けたため射損じた。

蘭は間合いをとり矢を放った、蘭が放った矢は電気を運び、スピードが増している、矢は白い壁に当たり落ちた。

壁があり蘭を見失った四奈の横に弓を振り上げた蘭がいた、蘭が振り下ろすと真つ白な刀をに当たり、弾かれる。

蘭がバックステップで避けた所に白い球体が飛んで来た、蘭は自分と球体との間に空気のかくを作し、体を滑らせるようにいなした。

蘭は着地した瞬間に消え、四奈の背後に周りこむ、射抜くと壁に当たり矢は地面に落ちた、矢が地面に落ちると同時に四奈の肩が切り裂かれた、蘭は弓を横に構え、2本同時に放ち、一本は四奈の背後、一本は四奈の肩を狙っていた、四奈は背後の方だけしか反応できずに、肩は当たってしまった。

「四奈ちゃんの血だ、真つ赤だなあ」

「当たり前でしょ、赤じゃない方が問題があるわよ」

球体は四奈の傷口を覆い、傷を癒し始めた、四奈は攻撃的なモノは低い、回復しながらでも戦えるので長期戦になれば勝ち目はある。

「四奈ちゃんが死ぬ前にその血をすすれたら満足なのにな」

「血ならいくらでもあげるわよ、だから死んでくれない？」

「やだあ」

無邪気な笑顔を崩さずに四奈を僅かな希望を打ち崩した、四奈は苦笑いを浮かべながら、肩から球体を引き離した、傷は完治していて切れているのは服だけ。

「穴だらけにすればいい血が出るよね？」

蘭は5本の矢を構え放った、しかしどれもが四奈に向かっていない、蘭は同じように様々な方向に矢を放った、矢は部屋中の壁に当たり、何度か方向を変えたのち、全てが四奈に向かっていて、全方向から飛んでくるタメに逃げ場はない、四奈は球体を集め、自分の周りで大きな球体を作った、矢は球体に当たり全てが地に落ちる、大きな球体は各々に別れて四奈の周りを回りだした瞬間、蘭は横薙に弓を払い四奈の脇腹を切り裂いた、怯んだ四奈は片膝を付いた時に折り返して四奈の肩口を切り裂く。動けなくなった四奈の前に蘭が現れ、肩の傷口に口を当てると、傷口から四奈の血を吸った。

「美味しい」

「最悪の、趣味ね」

「拷問マニアに言われたくないな」

四奈は鼻で笑うと、球体を床にして宙に浮き上がった、そして魂脈の流れを逆回転させる。

「茨の祝福」

蘭は危険を感じて飛び上がると、部屋全体が茨に包まれた、蘭は足一つ分の棘と棘の間に立つと笑顔で四奈を見上げる、何とか立てるが倒れれば地獄が待っている。

「やっぱり四奈ちゃんも悪趣味だ」

蘭は再び矢を5本射ったが、茨に刺さり呑み込まれてしまった、蘭は困った顔を作り、顎に人指し指を当てて首を傾げた。

「これじゃ勝てないよ」

「蘭に勝ちは無いわよ、死んでね」

蘭は再び笑顔を作り、魂脈の流れを逆回転させた。

「らいらん雷嵐」

その瞬間四奈の周りを風が取り巻き、静かに静電気が起こり始めた、静電気は徐々にに強まり小さな雷と化す。

蘭は笑うと無数の矢を放った、雷の竜巻の中を大量の矢が走り回っている、その矢は一本ずつ四奈に向かって飛ぶ、四奈は球体で何とか防いでいたが、完全には防ぎきれずに何本か体を霞めていた、その間にも蘭は矢を放ち続ける。

「いつまで持つかな？」

「不本意だけど、これを使わなきゃいけないなんて」

蘭は不思議そうな顔をして首を傾げた、四奈の口角が上がり、白い歯が見えた。

「ホーリーシエル！」

四奈の周りにあった球体は四奈の周りで大きな球体と化した、四奈は完全に球体に覆われ。

「それ知ってるよ、完全防御と回復、更に攻撃を兼ね備えた最強の形態。だけど……、それを発動したら力の使いすぎで気絶するんだよね？この状況でそれが何を意味するか分かるでしょ？」

この状況で気絶して地面に落ちれば茨に刺さり確実に死ぬ、例えば蘭を殺せても四奈は死ぬ。

「道連れよ」

「怖い怖い」

四奈を覆った球体から無数の白い矢が放たれた、矢は全てが蘭を襲う、蘭は矢を打ち落とし、落としきれなかったのは避けていたが量の前では限界がある、避けきれなかった矢は体を引き裂き、蘭の体力を確実に奪っていく。

蘭の体は四奈の矢でつんざかれ、体を貫通してる部分もある、体力もそこを尽きかけたその時、着地に失敗して足を滑らせた。

「あら？ダメだ、僕、死んじゃうね」

最後に満面の笑を浮かべた瞬間、棘に刺さると同時に大量の矢が降って来た、体は貫かれ即死、蘭は最高の笑顔と共に砂と化した。

「（勝った、でも、もう体力が、ゴメンね龍奴、私、愛してるから）

「

四奈の球体は消え去り、気を失った四奈は頭から茨に向かって、この状態で落ちれば即死は免れない、四奈が死ぬまでの距離、それは1m。

「四奈！！」

龍奴の叫びと共に四奈の体は串刺しから免れた、龍奴はギリギリで四奈をキャッチしたために肩を大きく切った。

龍奴は壁の茨の棘の隙間を蹴って入口に飛込んだ、四奈を抱き抱えるように背中から落ちた。

「クソギリギリセーフ」

龍奴は体を起こそうとしたが背中に痛みを感じて諦めた、入口から出る時に茨にかすっただけらしい。

「死なねえけど、……………イテエ」

龍奴は四奈の顔を見ると笑を浮かべた、腕の中で眠るのは幸せ、早く起き上がって助けに行かなくてはいけないが、体言うことを利かない、龍奴は苦笑いを浮かべて目を閉じた、四奈を強く抱き締めたまま。

### 第三十六陣

巴嘩が秀美に連れていかれた部屋は先ほどの部屋と同じで無駄に広い、巴嘩は地下に下りた時点で分かっていた、室内では終式は発動出来ない、馬鹿デカイ巴嘩の終式は室内では逃げ場を与えるだけ、そんな不安と戦っていた。

秀美は10mほど先で止まり振り返った、巴嘩はその立ち方、振り返る時の髪振り乱し方、全てにみとれていた、その美貌だけで日本を落とせる、そんな冗談が頭をよぎるくらい秀美は美しかった。

「信征様に手を出さないと約束するなら何もしないわよ」

「無理ね、私は経ちゃんを助けなきゃいけないの」

「愛する者を守りたい、そこだけは同じなのね。ならどちらがファーストレディにふさわしいか、決めなくてはいけないわね」

「ファーストレディ？馬鹿馬鹿しい、経ちゃんは王になるタメにココに来たんじゃない、貴方達が気に入らないから来たのよ！」

巴嘩は魂脈の流れを速めた、本気は出せずとも、接近戦でも巴嘩の力は絶大。

巴嘩の周りに桜の花びらが舞い始め、足元には草花が生い茂っている、桜の花びらが手元に集まると細長く渦巻く。

「巴！魂玉段階式！枯雀桜刃！」

数枚の薙刀の刃が円を描いている薙刀、刃は桜色で見るも美しい。

秀美の周りには木の根が突きだし、秀美の体を覆い始めた、そして二本の根が大きくしなり、秀美の背中と腰を叩いた。

「秀吉！魂玉段階式！樹鬼猿刃！」  
ききんじん

背中に小刀が一本、腰に小刀が一本鞘に納まっている、小刀の柄は指が軽く入るくらいの輪がある。

羽柴秀吉、戦国時代に天下統一を成し遂げたただ一人の武将、織田信長を強く崇拜していて、忠誠心があつかった、身軽な事からサルという愛称が名付けられていた、藤原氏一族で関白になったのは秀吉ただ一人である。

「私の二つ名知ってる？」

「モンキーババア」

「バっ！？まあ良いわ、猿飛びくノ一、理由はこれよ」

秀美が地面手を付くと部屋全体が木で覆われる、そしていつの間にか巴嘩の上にいた、巴嘩はその木を思いっきり殴ると木は簡単に折れた。

「さすが剛腕ね」

「猿並に木登が好きって事？」

「それでも良いわよ」

秀美は巴嘩の前方に立つと、いたる所に自分と同じダミーを出芽させた、巴嘩は鼻で笑うと同じ事をやって見せた。



「無駄よ」

「そうみたいね、でも力だけじゃ私には勝てないわよ」

秀美は木と木の間を飛んで巴嘩に近付く、飛び下りると同時に右手で斬りかかるが巴嘩は薙刀で受け太刀する、しかし秀美は左手の小刀で斬りかかろうとした、寸前までくると巴嘩の薙刀の刃が一枚飛び、小刀を弾いた、巴嘩は空いている右手の指の骨を鳴らしボディーをいれようとしたが丸太に当たった、丸太は碎け散り秀美は木の枝に足でぶら下がっている。

「さすが猿ね」

「怪力よりはマシよ」

「それより、そんな所にぶら下がってないで降りてきなさいよ！」

巴嘩は右手で木の裏を掴むとそのまま後ろに倒した、落ちてきた秀美に上段から斬りかかるが、秀美は左手の小刀を逆手に持ち防ぐ、しかし巴嘩の力押しに右手の小刀も添えた、秀美が受け太刀した瞬間、薙刀の刃は回転して秀美の防御を強制的に打ち崩した、秀美は避けようとするが、肩口を浅く斬られた。

秀美は傷の事など気にせずに、小刀の柄の輪に中指を通した、両手の中指を軸に回転する小刀。

秀美はそのまま巴嘩の懷に潜り込み、右手を引いた、巴嘩は逆手による横薙の攻撃と予想して防御の体制に入った、しかし秀美が小刀を握ったのは逆手ではない、それに加え横薙の攻撃ではなく突き、巴嘩はギリギリで避けたが脇腹を斬れた。

巴嘩はバックステップで避けようとしたが、秀美に追い付かれ逃げ

るどころか防戦一方となつてしまった、秀美のイレギュラーな攻撃に防御するだけで精一杯、寸前で見極めなければいけないので攻撃に転じる余裕がない。

秀美は一度右の小刀を納刀すると、そのまま横薙に払った、巴嘩は受け太刀して攻撃に転じようとしたその時、受け太刀したハズのものには刃ではなく鞘、秀美は納刀したまま攻撃をした。

小刀は鞘から抜けて巴嘩の胸を浅く切り裂いた、刃が邪魔して十分な鞘滑りが得られずに、失速して斬撃に力が入りきらなかった。

「大きな胸が台無しね」

「ホント、最悪」

「大丈夫よ、胸だけじゃなくて全身をズタズタにしてあげるから」

「それは貴方でしょ？」

巴嘩は地面に薙刀を突き刺した、全体が突き刺さると同時に、地面・壁・木、いたる所から薙刀が生えてきた。

巴嘩が腕を大きく開くと、刃は宙に舞い散る。

「桜の花びら達よ、その桜色の美しい身を、朱に染めよ！桜吹雪・阿修羅の舞！」

巴嘩が体を抱き締めると刃は一齐に秀美に襲いかかる、秀美は顔色一つ変えずに自分の分身を出芽させた、秀美は自分の分身を盾にしつつ、余った刃は全て自分で打ち落とした。

刃は全て地面に落ち、秀美は無傷のまま立っている。

巴嘩は苦笑いを浮かべると近くにあった刃に柄を生やす、桜色の薙刀の刃は二振りの刀と化した、巴嘩はそれを逆手で持ち構える、普

通の人ならば重くて振るのがやっと、だが巴嘩の力の前ではゴミ同然だった。

「考えたわね」

「これで対等、いや、私の方が上ね」

「どうかしら？」

秀美は一步で間合いを詰めた、秀美の横薙の攻撃を巴嘩は軽々と止める、もう片方で攻撃しようとした秀美を巴嘩は、受け太刀した片手だけで軽々と吹っ飛ばした。

巴嘩は追い討ちをかける、秀美は防ぐだけで精一杯で体制を立て直す暇すらない、後退しながら受け太刀していた秀美は木に阻まれ後ろが無くなった、巴嘩はそれを見計らって殴るように斬りかかり、受け太刀をした秀美もろとも木を折って吹き飛ばした。

「大した事ないわね、弱い」

土煙の中から出てきた秀美の表情は怒りに満ちていた、既にそこに美貌は無く、全てを怒りが浸食している。

「貴方に負ける訳にはいかないの、信征様にふさわしい女になるタメには強くなければいけないの！」

「それなら安心して、信征は経ちゃんの手で殺されるから」

「仮にそうだとしても、私は命に変えても信征様をお守りする、信征様は私の全てなの！」

「なんでそこまでアイツに肩入れするの？死んだら愛せなくなるのよ」

「そんなの構わない、私の身も心も全てがあの人モノ、死ねと言われたら死ぬわ、殺せと言われたら殺す、それが私の愛の証になるのなら何でもする」

「それなら愛の証、ココで潰してやるわよ」

巴嘩は地面を思いつき蹴った、秀美の懷に潜り込むと素早い連撃を浴びせる、秀美は力に加えスピードの加わった巴嘩の攻撃を受けるので精一杯、一瞬の隙を狙って待つ事しか出来ない、しかしそんな間にも巴嘩の連撃は止むところを知らず、手が痺れて小刀を落とすのも時間の問題だった。

巴嘩は秀美の一瞬の隙を見逃さなかった、右手の刀を逆手から持ち変え、ボディーを殴るように斬りかかる、秀美が受け太刀したのと同時に巴嘩の手から刀が飛んだ。

巴嘩は右手を腰の辺りまで拳を引いた、秀美は右手の小刀で横に薙払おうとした時、目の前から消え秀美の腰の辺りまで屈んでいた、巴嘩は全体重を乗せて秀美のボディーを全力で殴った、秀美はボールのように吹っ飛び、壁により止まる。

秀美は完全に意識が飛んでいて、口からは血が流れだしている。

「顔は女の命、お腹で勘弁してあげる」

巴嘩は殺さずに部屋を出た、経の加勢をするために刀を逆手に持ち。

### 第三十六陣（後書き）

最終回に近付いて来ました、遂に経対信征が始まります、評価やコメント、アドバイスなど頂けるとありがたいです。それと新しい作品も只今執筆中です、今度のキーワードは‘神’です、どうぞ良かったらそっちも読んでください。

## 第三十七陣

「信長、私の前で汝の力を示せ、我が肉体を媒介とし魔王の力を示せ。漆黒の闇に染まりし我が血肉、敵の血で洗い流せ。属性馮位、闇の儘」

信征の周りには四奈と同じように黒い球体が回っている、漆黒のよどんだ球体が妖しさを増させる。

織田信長、戦国時代に他の武将から恐れられた武将、荒い気性故に残虐無比、策士でどれだけ劣勢な戦でも勝利を手中に納めてきた、自らの事を第六魔王と名乗っていた、明智光秀の謀反により本能寺で自害した。

「では始めよう」

「ああ」

経は一瞬で消えた、今の経のスピードについていけない、信征は辛うじて目で捉えられたが、攻撃をしても当たらない、今の経には全てが止まって見える。

経は素早い動きにのせて斬撃を放つ、信征はギリギリで防ぐと再び経は光速で移動を始めた。

経は移動しながら風の刃を放ち、移動し別方向から風の刃を放つ、さながら全方向から一斉に風の刃が放たれているかのような状況だ。

「なかなかやるなあ」

「「負け惜しみなら聞かないぞ」」

移動速度が速いために色々な方向から声が聞こえる、耳で経の居場所を捉えられない。

「飛び回るのも飽きたな、真っ向勝負といくか」

「無理に手加減しなくても良いぞ、どうせ死ぬのだから」

経は信征の前に現れた、その瞬間経は信征の懐に潜り込み素早い斬撃の連打を入れる、信征は球体を使いギリギリのところで弾く。

経の素早くイレギュラーな攻撃は舞っているかのように軽やか、体全体を使い遠心力で勢いをつける。

経は上段から斬りかかると球体に防がれる、しかし経は柄の刃でそのまま下段から切り上げる、こちら止められ経は刀を支柱のようにして信征の腹を両足で蹴り飛ばす、信征は吹っ飛ばすと追い討ちをかけるように刀が飛んでくる、刃を素手で掴みそのまま投げ捨てた。刀の柄には鎖がついていて経に戻っていき、経が持っている刀の柄に繋り元の形に戻った。

「ビックリしただろ、こんな事も出来るんだぞ」

「大した事は無い」

信征の手からは血が流れ落ちる、経の刀を防ぐ時に付いた傷、経はそれをみて鼻で笑った。

「いっぱいいっぱいじゃねえか、余裕なふりしやがって」

「私が本気を出していればな」

「どういう事だ？」

「少々買い被り過ぎたようだな、馬鹿には説明が必要か」

信征が鼻で笑うと経は怒りを露にした、凶星だ、経に比喻や遠回しな表現は通じない、頭で考えるより行動するタイプだからだ。

「私は力を100%出していない、3割だ、今の私の力は本来の3割」

「何%？」

経の頭の悪さは信征の想像を絶するものだった、経は理解出来ずに、信征は呆れて動けなくなつた、冷めた空気が室内を支配する。

「ま、まあいい、死ぬことには変わらない」

「今馬鹿にされたのだけは理解出来た」

「よくできました、それなら多少力を出してやるか」

信征は近くにあった球体に手を触れた、全ての球体は信征の血を吸い赤みを帯てくる、全てが赤黒くなると信征は腕を振った。

球体は四方八方から経に襲いかかる、しかし今の経にはどのようなスピードも通じない、軽々と避ける、球体はバウンドして方向を変えながら経を襲うが全てが当たらない。

経は楽しみながら避けていると一つの球体が避けきれずに刀で打ち落とした、その後徐々に避けきれなくなり、刀を使いながら防ぎはじめた。



「何で避けられない、俺のスピードは落ちてない、球体のスピードも上がってない、なら何が違うんだよ」

「ヒントをやるう、一つを見るな、全体を見る」

経大雑把に全体を見回した、さすがの経で理解出来た、最初と今の違いに、そして圧倒的劣勢に。

「増えてる！？」

「そうだ、四奈の魂玉は時間がたつと肥大化して、ある程度の大きさになると分裂する、防御タイプの魂玉だ。しかし私のは衝撃で肥大化し、分裂する、完全攻撃タイプだ、壁に当てたのはバウンドを利用するためではない、衝撃を与えるためだ」

「ありえねえ」

経が一瞬気を抜いたその瞬間、経の肩に球体が当たり体制を崩した、それを皮切りに何発もの球体が経の体を殴り、経が片膝を付いた時、一斉に上から経めがけて球体がつてきた。

「うわああああああ！」

球体は山のようにになると、信征のもとに戻って行った、経の体はボロボロになり倒れている。

数秒たつと経は起き上がり始めた、多少フラフラになりながらも立ち上がる。

「よく生きていたな、誉めてやるう」

「こんなもの大した事ねえよ」

経は力なく再び片膝ついた、肩で息をしている経に信征は近付いていく、今の経には信征を睨む力しか残っていない。

信征は経の顎を掴み、そのまま高々と持ち上げた、そして手が黒く光り始める。

「殺すには惜しい人材だ、私の下で働いてもらう」

「やだね、お前に使われるなら、死んだ方がマシだよ」

「そっいうな、永遠の命だ、受け取れ」

信征は黒く光った手を経の胸に押し当てた、経は力なく気絶し、信征に手を離され人形のように地面に落ちた。

それと同時に巴嘩が扉を開けて入ってくる、それを見て信征は秀美の死を確信した、しかし悲しみの表情はなく、無表情のまま巴嘩を睨んだ。

「経ちゃんに何をしたの!？」

「駒になってもらった、そろそろ起きるころだろう」

その言葉に触発されたかのように経は立ち上がった。

「経ちゃん!」

経は生気の無い目で巴嘩を見る、その目は冷たく、経が巴嘩に向ける始めての目だった。

そして経は後ろにいる信征を見ると片膝についてひざまずいた、巴

嘩はその光景が理解出来ず、涙を堪える事しか出来ない。

「そこにいる女を殺せ、私に忠誠を示してみろ」

「はい、信征様」

「経ちゃん！どうしたの！？」

「黙れ、女」

経からは巴嘩に対する殺気が放たれていた、そして解除された魂玉を再び解放するべく、魂脈の流れが速まる、巴嘩は目の前の光景に涙を流す事しかできなかった。

「義経、疾風双刃」

経の手には刀が二振り握られている、巴嘩の手にも逆手に二振り。

「まだ力は上手く使えないか」

信征は観察するように言い放った、経はそんな事などお構い無しに巴嘩に斬りかかる、巴嘩は状況が理解出来ずに受け太刀する事しか出来ない、ただ一つ理解出来たのは、経の巴嘩に対する殺意。

「経ちゃんどうしちゃったの！？」

経からの反応はない、むしろ戦いに夢中で耳に届いていない、経は巴嘩を殺す事を本気で楽しんでいた。

「おい、一つだけ良いことを教えてやろう。コイツの自我は既に崩

壊した、コイツは俺に忠実な殺人マシン、簡単に言えば取り付かれてる」

巴嘸は自分の耳を疑った、誰よりも強い心を持っている経が、取り付かれている、つまり巴嘸の事は覚えていないどころか信征の言うことしか聞かない傭兵と化した。

「まだ慣れていないのか、多少動きがぎこちない、それに魂脈の流れも不安定だ」

信征は経を観察していた、経の動きはたまにぎこちなく、斬撃の瞬間に手が震える事もしばしば、魂脈の流れも不安定でお世辞にも強いとは言えない。

しかし巴嘸は何も手が出せない、相手は仮にも経だった存在、自我を失っていても経は経、その考えが巴嘸を邪魔して攻撃を出せないでいる。

経の動きは更にイレギュラーになってきた、素早い動きをしたと思えばぎこちない動きになったり、しかし戦い方は経にそっくり。

経は左手で右から横薙に斬りかかると巴嘸は受け太刀をした、経はそのまま回転して巴嘸の後ろに周りこむと、襟元に右手を軽く当てた、その瞬間に巴嘸は糸が切れた操り人形のようにその場に座り込んだ。

「えっ？何コレ、体が動かない」

「ほほう、取り付かれてるにしては考えたな、雷電を利用して体の電気信号をいじったのか。そのままその女を殺せ」

経は右手の刀を振り上げた、巴嘸は体を動かす事が出来ずに、涙を流し経の冷たい目を眺める事しか出来ない。

経は口角を一瞬上げると、不気味な顔で刀を振り下ろす。

「いやあああああ!!」

飛び散る赤い血、血がその場を朱に染める。

### 第三十八陣

経の刀が肉を貫く、血が飛び散り服を真っ赤に染める、血は刃を伝い地面に滴り落ちた。

経の顔は達成感に満ちている、巴嘸は力なく瞼を開けた、巴嘸の目には笑っている経、そして想像を絶する光景。

経の右手は振り上げられたまま、そして右腕は刀によって貫かれて  
いる、刀を握るのは経の左手、経は自分の右腕を止めるために刀で  
自分の腕を突き刺した。

「ハアハア、大丈夫、だな」

「経ちゃん、何で？」

「ちょっと邪魔されて遅くなった、ほら、あと少しすれば巴嘸も動けるようになる」

「経ちゃんの傷は？」

「痛みはシャツトダウンした、だから大丈夫だ」

巴嘸の感覚は戻ったが、まだ体は上手く動かせない、経の傷は痛覚をシャツトダウンして止血した。

意識を完全に取り戻した経は信征に向き直った、その表情は怒りに満ち溢れ、強い殺気を放っている。

信征は驚きを隠せないでいる、取り付かれて自我を取り戻した者など皆無、しかし経はそれをやったのけた。

「何故だ！何故自我を取り戻した！？」

「根性！プラスお前への怒り」

「馬鹿な、そんな事が出来るハズがない」

「出来ちゃうのが俺の凄いところ、凄い奴に殺された方がお前も満足だろ？」

「馬鹿にするな！」

信征は怒りを露にした、今まで余裕の表情だったが今はその片鱗もない、経も怒りを隠せなかった、自分に巴嘩を襲わせた怒り、そして巴嘩を襲った自分への怒り。

「何かお前に変な事されてから力がみなぎるんだよ」

「無駄な事だ」

「試してみるか？最強の適合者の力を」

経は片手を地面に水平に上げた、強い風が室内に吹き荒れる、そして風は徐々に縮小され、手のひらに納まる風の球体と化した。

左手を水平に上げると地面から金剛石の柱が隆起する、経がそれに触れると柱にヒビが入った、柱が砕け散ると手の平には金剛石の球体がある。

経はその二つを胸の前で合わせた、凄まじい暴風と金剛石の砂塵が舞う、そしてそれが縮小されて経を完全に覆った、強い光りを放つと爆発に似た暴風が起こる。

「義経！弁慶！魂玉合体！武僧遮那<sup>ぶそうのしやな</sup>！」

砂塵から現れたのは京帷子きょうつかたひらを来た経、背中に二振り、腰に二振り、腕に二振り、股に二振り、計八振りの刀を纏っている。

「魂玉合体だと？そんな事が有り得るのか？」

「ごちゃごちゃうるさい、遺言なら聞いてやる」

「吠えてろ」

経は鼻で笑うと腕の二振りを抜刀した、刀の刃はダイヤモンドで出来ていて、鏑はない、刀は真っ赤に光り始めた。  
経は一瞬で信征の懷に潜り込む、斬りかかろうとした時、球体に阻まれた、球体は刀に当たった瞬間に球体は砕け散る。

「なっ！」

「驚いてる暇は無いぞ」

経の連続攻撃を球体で防ぐ度に球体は砕け散る、信征は球体を増やしながら防いでいるが確実に間に合わない。

経は地面を強く蹴ると信征の目の前から消えた、経は信征の横を通り後ろに行くと、球体を利用して折り返す、そして勢いを殺さずに振り向いた信征の顔面を蹴り飛ばした。

「グフッ！」

信征は軽々と吹っ飛ぶと壁に叩き付けられ止まった、経は笑を浮かべながら力なく座り込む信征を眺める。



「私に一撃を与えた事は誉めよう」

「じゃああと百発くらいでもあててやるつか？」

「その言葉、そっくりそのまま……、その女に返してやるよ」

信征の球体は巴嘩の方に飛んで行った、巴嘩は感覚が戻ったばかりなので、思うように体が動かない。

「卑怯だぞ！」

「知らぬ、どちらにしろ死ぬのだ、今か後かの差だ」

経は巴嘩の方に跳んだ、何とか間に合ったが、刀で弾くだけの体制を整える余裕がない、経は背中に球体を当てて巴嘩を守った。

「ガハッ！」

「経ちゃん！」

「大…丈夫」

「ハハハ！自分が盾になるとは、つくづく馬鹿だな」

信征の球体は止まらず、経の背中を何度も殴る、経の口からは血が流れ、巴嘩に滴り落ちる、巴嘩の頬は涙と同時に経の血が伝っている。

経が倒れた時、巴嘩はやつと動けるようになった、経を葉で覆い回復させる、巴嘩は両手に刀を逆手で持ち立ち上がる。

「お前が戦うのか？」

「時間稼ぎなら私でも出来る」

「お前じゃ不可能だ」

「試してみなきゃ分からないじゃない」

「なら死んでみる」

巴嘩は強く地面を蹴ると信征の方へ飛込んだ、右の刀を横薙に斬りつけようとする、信征の球体が邪魔をした。

「はああああああ！」

巴嘩は力ずくで球体を地面に叩き落とし、信征に斬りかかった、信征はギリギリのところ避ける、巴嘩は落とした球体を持ち上げ無理矢理信征に投げつけた。

「なんて無茶苦茶な戦い方なんだ」

「この無茶苦茶な戦い方が貴方の恋人を倒したのよ」

「恋人？秀美の事か？アイツもただの駒にすぎない、恋心が一番操りやすい感情だ」

「……………酷い」

巴嘩はうつ向き、肩を震わせながら涙した、巴嘩には敵ながら秀美の気持ち痛いほど理解出来る、その気持ちを知った時の秀美が可

哀想に思えてきた。

「あの人は貴方の事を本気で愛してた！」

「駒が主君に恋愛感情を抱く事は少なくない、それを利用するのも一興だ」

「人を大切に出来ない人に上に立つ資格はない！」

「資格など必要ない、必要なのは絶対的な力と従順な駒だ、勝てればそれが全てだ」

巴嘩は怒りに溢れた表情で信征を睨んだ、信征の表情は嘲笑うかのような冷ややかなモノ、巴嘩はその顔にある種の恐怖を感じた、人の心を知らない悪魔の顔、それが目の前にある。

「貴方は悲しい人ね」

「だとしたらどうなる？」

「人を守りたいと願う強さを教えてあげる」

「それは楽しみだな」

巴嘩は信征めかけ飛込んだ、斬りかかれれば球体に阻まれ、球体は阻めば叩き落とされる、しかし着実に信征に近付いている。

信征の懐から一つの球体が飛んできた、巴嘩は左の刀で防いだが、力で押されて半身になった、しかし巴嘩はそのまま右の刀を切上げ、信征の脇腹を斬る。

信征と巴嘩は間合いをとり、再び睨み合った、信征は脇腹を押さえ

怒りに満ち満ちた表情をしている。

「まぐれだ、図にのるな」

「何も言っていないうちから言い訳とは、見苦しいわね」

「馬鹿にするな！もう手加減はしないお前もろとも全員殺してやる！」

信征の体に球体が集まり始めた、体が徐々に見えなくなり、真っ黒な球体と化した、球体は浮き上がり上空でボコボコと変形しはじめる。

巴嘩は不気味なものを見るような目でそれをながめていた、球体から手足のようなものが生え、黒い羽のようなモノも生えてきた。

体の骨格が完全に出来上がると最後に頭が出てくる、鬼のような顔をしていて信征の原形は無い。

「うわぁ！何だこの化け物！？」

「経ちゃん！」

経が起き上がって最初に見たものは不気味な信征の姿だった、そして下手物を見るように舐め回した。

「これが私の魂玉の最強の段階だ、まさに魔王」

「普通自分で魔王って言うか？それに魔王ってよりその下っぱAって感じだぞ」

「何とでも言え、時期に強さが分かる」

信征はその場から消えて経の前に現れた、経は油断していて一瞬見失ったが、何とか反応出来て爪を防いだ、経は防いだまま斬りかかったが、大きな羽に防がれた。

経はバックステップで間合いをとり両手の刀を投げつける、刀は信征の体をかすったが信征は全く動じずに突っ込んでくる、経は股の刀を抜き信征の蹴りを防ぐ、しかし力で押しきれそのまま吹き飛ばされた。

経が突っ込んだ瓦礫の砂塵の中に経はいなかった、そして巴嘩が見たのは信征の後頭部の所にいる経、信征の身長はこの状態だとゆうに2mを越えている、故に跳びながら横薙に斬りかかるモーシヨンとっていた、しかし信征は振り向かず翼で薙払おうとする。薙払った翼は巴嘩が受け止めていた、経はそのまま背中を大きく切り裂いた。

「巴嘩、ありがとう」

「私も戦えるわよ」

「そつだな」

経と巴嘩は並んで構えた、信征の怒りは頂点に達している、翼を羽ばたかせ宙に舞い上がる信征、そして手を上げると無数の黒い球体が発射された。

「巴嘩、この量はヤバくない？」

「チョットね」

二人は構えて防ごうとしたその時、経と巴嘩の周りは白い何かで覆

われた、黒い球体は白い経達を覆ったモノに弾かれ、信征の手元に戻った。

「経さま、二人だけで戦ってる訳じゃないのよ」

「クソ苦戦中らしいな、何か相手が化け物がいるし」

「経の姿も変わってるね」

「私も大丈夫です」

扉の所には四奈・龍奴・次郎・晴季が立っている、巴嘩と経は安堵に包まれ、信征は圧倒的劣勢に立たされた。

経は不適な笑を浮かべて、右の刀の切っ先を信征の顔に向けた。

「終幕への特別列車、片道直通快速急行、料金はタダだ、感謝しろ」

### 第三十九陣

信征は怒りで顔を歪めた、目の前には経と巴嘯の他に四奈・龍奴・次郎・晴季がいる、これが示すのは二つ、一つは信征は劣勢に立たされた、もう一つは信征以外の死、この四人がココに来れるのはそれしかない。

経と巴嘯は完全に回復して構えた、経は左手を信征に向け右手は引いて切っ先は信征、巴嘯は逆手に持った刀を両方とも肩に添わせた、四奈は真っ白な刀を正眼で構える、龍奴は銃口を信征に向け、次郎はタバコに火を付けて背中刀を担いだ、晴季は大鎌の刃を上に向けて地面に当てた。

「クソ兄貴もここまでだな」

「過去にさようなら」

「元カノの無念、晴らさして貰うよ」

「兄の苦痛、貴方で償ってください」

「政音とトコちゃんを奪った罪、高くつくわよ」

「そういうことだ、王の陥落劇、俺に目を付けたのがそもその間違ったんだよ」

信征が一步後退したのを龍奴を見逃さなかった、龍奴が一気に連射すると信征は横に避けた、しかし避けた先には四奈がいる、剣撃と同時に白い矢が信征に襲いかかる、信征は何とか翼で防御して後ろに避けるが次郎にまわり込まれ、切上げられ上空に飛ばされる、晴

季は上空の信征を鎌でひっかけ、そのまま地面に投げつけた。

落下地点には巴嘩がいる、巴嘩は全体重を乗せて腹を殴った、そして経が素早い一閃で斬りつけた。

信征はボロボロになり倒れている、それを取り囲むように全員が円を作る。

「クソ、わ、私をナメるな！」

信征の体からは4つの黒い球体が放出され、四奈・龍奴・次郎・晴季に向かっている、経は素早く刀を投げ球体を1つ一振りずつ壊した。

しかし経達が信征から目を離れた瞬間、巴嘩の悲鳴と共に巴嘩は信征の腕の中にいた。

「ハハハ、貴様ら、離して欲しかった魂玉を納めろ、それが出来ないんならこの女を殺す」

「クソが」

「そこまでアンタが腐ってるなんて思わなかった」

「これはちょっとヤバめだね」

「悔しいです」

「早くしろ！」

「……………経ちゃん」

経以外は魂玉を納めた、しかし経だけはうつつ向いたまま動こうとし



ない、ただ拳を握って震えているだけ。

「おい貴様！この女がどうなっても良いのか！？」

「……………納刀」

刀の一本が信征の背中を切り裂き経の背中の鞘に戻った、そして経は消えて信征の腕から巴嘯を奪い取り、信征の翼ごと壁に突き刺した。

「本気でお前ム力つく、誰にも殺させない、俺が殺す」

経は鞘を5つ体から取り、全員の前に放り投げた。

「俺が傷口を作る、合図したらそこに穴を体側に向けて刺してくれ、それまでは自分の身だけを守れ」

経はそれだけ言うと消え、次に現れた時は信征の後ろにいた、後頭部を思いつき蹴り飛ばし、信征は顔から地面に突っ込んだ、経はそのまま背中に刀を突き刺し傷口を作る。

「おい、アイツあんな事言ってるけど良いのかよ？」

「俺は経を信じるよ」

「私事です」

「経さまは負けないよ」

「私も信じたい」

「しょうがねえな、たまにはクソ応援団にまわるか」

信征は立ち上がり振り向き様に爪で経の頬を切った、しかし経は気にせず信征の懷に潜り込む、信征の攻撃を避けながら相手の出方を伺っている。

信征の爪が地面に刺さった時、経は地面を蹴って信征の肩に乗った、そして肩に傷口を作るとそのまま信征の頭を蹴り飛ばす、信征が地面に倒れるより先に経はまわりこみ、脇腹に傷口を作り間合いを取った。

「もう少しで幕引きだ、遺言なら聞いてやる」

「まだ私は死なない！」

信征の翼が大きく羽ばたき、経の脇腹を切り裂いた、しかし経は一瞬顔を歪めたがそのまま逆の肩に傷口を作った。

そして怒りに狂い突進してきた信征を回転して避け、背中合わせのような状態ですれ違った時、背中にもう一つ傷口を作った。

既に立っているだけでフラフラな信征の目には、大きな傷を作りながら無表情で立っている経が鬼神に見えた。

「最後だ」

経は信征の懷に潜り込み脇腹に一つ傷口を作りそこに鞘を刺した。

「今だ！鞘を刺せ！」

経がそういうと信征は経を掴み壁に投げつけた、それと交代に全員

が傷口に鞘を刺す、刺した瞬間に隙が出来るために、全員体に付いた虫を払うように投げ飛ばされる。

経は血がとめどなく流れる脇腹を押さえながら立ち上がった、そして口角を上げて信征を睨む。

「集え！刀達よ！納刀！」

経が投げつけて壁や床に刺さった刀が信征に向かって飛んでいく、そして体を貫き鞘に納まった。

そして手に持った刀を信征の顔と心臓めがけて投げつけた、刀は軽々と信征の頭と心臓を貫き壁に刺さる、信征は人形のようにその場に倒れると元の姿に戻り砂と化した。

「勝った、んだよね？」

経も魂玉を納めて倒れた、すかさず四奈の球体が経を覆って回復を始める。

「経ちゃん！」

「大丈夫よ巴嘩ちゃん、血が足りないだけだからすぐに良くなる」

「勝ったんですね？」

「そうだね、俺達勝ったんだ」

「お前らクソ馬鹿か！？上ではまだ戦ってたんだよ！経を早く叩き起こして助けに行かないとさすがにヤバイぞ」

次郎以外の顔はポカンとしている、そう、今上がどのような状況に

なっているのか知っているのは龍奴と次郎だけだからだ。

経は龍奴の怒鳴り声に目を覚ますと四奈の球体から抜け出した。

「大丈夫？経さま」

「ああ、それより龍奴、説明よろしく」

「上の奴らが暴走して今は食い止めてもらってる、でもそれが破られるのも時間の問題だ、経しか奴らを倒せないんだよ、奴ら取り付かれてる」

経はその言葉を聞いて口角を上げた、不謹慎だが経には何か策があるらしい。

「王の力って凄いんだな、信征から受け継がれたよ、これなら上にいる奴ら救える。行くぞ！」

「ねえ、まだ帰って来ないの？ 僕疲れたんだけど」

「そうですね、さすがに疲れました」

総羅と歳那は既にフラフラになりながら戦っていた、後ろで休んでいる信侍と勇治は既に倒れている、倒れては回復を繰り返し4人も限界に達していた、謙恋も連続回復により体力はギリギリ。

「総羅、歳、交代だ」

「すみません、私は限界です、これで最後みたいです」

「謙恋ちゃん！」

謙恋は元の姿に戻り倒れた、誰よりも力を酷使していた謙恋は限界だった。

「しょうがねえ、二人だけで食い止めるぞ」

「そうだね、死ぬかもしれないけど、息子達のために頑張るか」

勇治と信侍は群れの中に突っ込んだ、既に戦う体力はなく、気力だけで体がうごいている、一撃一撃に力はなく、はねのける事しか出来ない。

「目の前が歪んできた」

「しっかりしろ、俺もギリギリだ」

「ゴメン、僕一抜けね、ふがない親だつたな」

信侍はその場に倒れた、そして近くにいた適合者が信侍に向かって刀をふりかざした時、適合者の頭は吹っ飛んだ。

「もしかして!？」

「やっと来たよ」

「ちょっと遅いですね」

一目散に経は群れの中に飛び込み適合者の首元を掴んだ、そしてそのまま何かを引き抜くと、適合者はその場に倒れた。

「経か何をした？」

「俺も聞きたい事が山ほどあるけど、まあいいや。今コイツから魂玉を取り出した、これなら死なずに力と魂玉に関する記憶だけを無くせる、これも「王」の力」

経は次々と適合者から魂玉を取り出していく、経の素早い動きはこの程度の適合者では追いつけない。

四奈は5人の回復を最優先にしている、傷こそ少ないが、体力は限界に近かった、四奈はここまで弱った勇治達を初めてみた。

全員の魂玉を取り出すと、そこには人の山が出来ていた。

「疲れた」

「お疲れさま、経ちゃん」

「どうも、四奈それが終わったら帰ろう、今日はパーティーだ！」

四奈は回復しながら喜んだ、いち早く回復が終わった勇治は歳那と総羅を不安そうな顔で見ている。

その両隣に次郎と龍奴が腰を下ろした、次郎は自分のタバコに火を付けると勇治にもタバコを渡す、勇治は次郎から火を借りてそのまま腰を下ろした。

「勇治だっけか？このままバツクレようとか思っていないよね？」

「覚悟は出来てる、殺したきゃ殺せ」

「何か勘違いしてない、勇治君？約束忘れてないよね？」

「約束？」

「帰ったら3人で飲み会だ、酔い潰れもん勝ちだ」

「了解」

そこに以前のいがみ合いは無く、穏やかな空気がある、戦いは終わった、経達は再び平穏な生活を取り戻した。

## エピソード

「王様、私と愛の契を！」

右で王に誘惑をかける四奈。

「王様！僕と勝負しろ！」

左で王の腕を引っ張る総羅。

「王様、僕達また旅に出るから」

「王様、お留守番よろしくね」

王に留守番を任せる信侍と謙恋。

「王様、タバコが無いよ」

「王様、酒も切れた」

「王様、新聞どこにやった？」

王をパシリに使おうとする次郎と勇治と龍奴。

「王様、私に巴嘩さんを下さい」

王に結婚の許しを乞う歳那。



「王様、洗濯手伝って」

王に洗濯干しを要求する巴嘩。

「王様、私のプリン食べました？」

王に疑惑をかける晴季。

そして……………。

「テメエら！王様つてのは何だ！？テメエらのお守りの事を言うのか！？」

ついに限界に達した王こと経、王になって仲間が増えたが要求も増えた、皆は経の事をパシリとしか思っていない。

「経ちゃん良いじゃない、皆といれるのも今日で最後なのよ」

そう、経達はそれぞれの道へ、次郎と晴季は同棲、龍奴と四奈は異端退治の旅、勇治と歳那と総羅は強い者を探して旅。

そして経と巴嘩は休学してた学校へ、戦いが終りそれぞれの道を進む事にした。

「でも勇治達がいるのはおかしいだろ」

「俺に住む所ねえもん」

「私は巴嘩さんがいれば何処へでも行きます」

「しょーっつーぶー」

この3人もそれぞれの理由があつて居候している、経は口では拒否しているが、寂しさを隠してる面もあった。

「経はどうするんだ？クソみたいに王様でもやるのか？」

「王の力は捨てる事にした、この力がもし信征みたいに渡つたらまた不毛な戦いが増える、それなら俺で力自体を抹消する」

「そんな事させないわよ」

経の首元には小刀、そしてそれを使っているのは秀美、誰もが気付かなかつた、しかし経は顔色一つ変えずに座っている。

「信征の敵討ちか？」

「そうよ、貴方を殺して私も死ぬ、それが信征様への最期の服従の証」

「じゃあ殺せよ」

「潔いわね」

龍奴が一步前に出たが経の首元に小刀を強く押し付けられ止まった、経の口角が上がっているが誰もその意図は分らない。

秀美は小刀を振り抜いた、経の首は床に転がり全員の顔が青ざめる。

「アハ、ア、アハハハハハハハハハ！」

龍奴が怒りに満ちた表情で秀美の胸ぐらを掴んだ、秀美は狂ったように笑っている。

「龍奴、そこまでにしとけよ、巴嘩、もう良いだろ」

「そうね」

どこからともなく声が聞こえ、巴嘩が指をパチンと鳴らすと経の首と体が桜の花びらと化した、そして奥から経が笑いながら出てきた。

「残念だったね、ホンモノはコッチ、それは巴嘩が作ったダミー」

「騙したのね!？」

「当然、素直に殺されるバカが何処にいる」

経は秀美の手から小刀を取り上げ手で遊ぶ、そして秀美の襟元を掴み顔を近付けた。

「残念だね、俺の前に現れなかった見逃してあげたのに、頭が悪かったね、バイバイ」

経は秀美から魂玉だけを取り出した、秀美はその場に意識を失って倒れ、魂玉と魂玉に関する全ての記憶を失った、信征に対する気持

ちと共に。

次の日、勇治達は経達が起きる前に出ていった、置き手紙だけを残して。

《世話になった》

この一言だけを残して、そして次郎と晴季は荷物をまとめて出る準備は出来ている、晴季は抑えきれずに泣き出した。

「さ、さようなら！絶対、絶対に忘れませんか」

「バイバイ経、落ち着いたら連絡するよ」

「分かった、いつでも遊びに来いよ」

「はいよ、晴季ちゃん行こう」

晴季は一礼して出ていった、次郎は指にタバコを挟み手を上げるだけの挨拶で。

そしてそれを追うように龍奴と四奈が出る準備をした、荷物はなく手ぶら。

「荷物は？」

「クソ邪魔になるだけだ」

「経さま、巴嘩ちゃんに変なことしちゃだめよ」

「大丈夫、経ちゃんにそんな度胸ないから」

経以外は大笑、そして四奈は大きく手を振りながら、龍奴は何もせずに出ていった。

玄関に残された二人、いつもうるさかった家が秒針の音が聞こえるくらい静まりかえっている。

「みんないなくなっちゃったね」

「いつか会えるよ」

「じゃあ経ちゃん、勉強だよ、試験で受かしないと留年決定なんだから」

「分かったから手を引つ張るな」

元に戻ったようで変わった世界、異端は尽きないが適合者同士の争いは無くなった、幾つもの屍を踏み越えて。

経達の望んだ世界が造り上げられた。

E  
N  
D

## エピソード（後書き）

最終回です！かなり長くなってしまいましたが、最後まで読んで頂いてありがとうございます。

次回作は只今執筆中です、この作品よりも更に良い作品を作ります、どうかそちらも読んで頂けたら光栄です。

コメント等を頂けると次回作の良い材料になります、お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5739a/>

---

戦玉 SENG(Y)OKU

2010年10月11日13時01分発行